

白き妖犬が翔る

クリカラ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

其の者、白き妖犬となり天地を翔る

……こんな感じで良い？ えっ？ ダメ？

自己満足の作品なので批判はあるかと思いますが、ご容赦ください

# 目次

## 外伝

番外編 予告第1弾 | 1

番外編 1 | 1 | 5

番外編 予告第2弾 | 8

番外編 予告第3弾 | 18

設定資料集 | 26

## 本編

雁夜の救い | 35

訪れる悲劇（オリ主に） | 50

願いの達成、そして彼の名は… | 57

変わらない誓い | 66

桜の起点、最強対最強 | 78

間桐陣営の内情 | 91

初戦の終幕 | 104

愉悦と機械 | 113

暗殺王ザイド | 120

策謀 | 129

ランサーの誓い | 136

捻じれる参加者 | 142

一難去って、また一難 | 155

一時休戦 | 164

一時の会話 | 172

聖杯問答の始まり | 184

聖杯問答の終わり | 195

序章の終わり、新たな始まり	206
過去とある救世主 記憶の一部	212

## 外伝

### 番外編 予告―第1弾―

—— 此処は、決して交わる事が無い原作犬夜叉の世界

—— 犬夜叉主人公たちの闘争は、4年前に終決を迎えた

—— 四魂のかけらを巡る争いは、皆の記憶に深く刻み付けながらも、想い出となり始めた

—— だが、そんな彼らに新たな戦いが迫っていた

『四魂のかけらの気配だと！ それは本当なのか、かごめ！』

日暮かごめは、消滅した筈である四魂のかけらの気配を察知する。

それを聞きつけた犬夜叉と二人で、かけらの調査に赴いた。

何故、かけらの気配がするのか？

疑問を浮かべながらも、其処に向かった二人が眼にした存在とは

……

『うむ、少しばかり拙いな』

そう呟いた彼の名は、キシユア・ゼルレツチ・シユバインオーグ。かの朱い月と戦い、勝者と成った稀代の魔法使い。

そんな彼が、少しばかり焦っていた。

彼の弟子（無理やり）が探していた秘宝であるかけらのひとつを、偶然にも発見した彼は親切心で届けようとした。

だが、偶然にも彼を狙ったバカな輩のお蔭で、

騒動の合間に別時空にかけらが落ちてしまったのだ。

それ故に、かけらの回収を殺生丸オリ主に頼むのであった。

—— 決して交わる事が無い原作犬夜叉と別世界本編

—— だが、もしかしたら在り得たかもしれない奇跡偶然がいま  
此処に再現される！

—— 『戦国御伽草子 犬夜叉 番外編 二人の殺生丸』

『殺生丸が二人だと!?!』

『ええ!?! お兄さんが二人も居る!』

『……おい、その呼び方お兄さんやめろって言ってるだろ!!』  
『ええ、別に減るもんじやないし良いじやない』  
『減るんだよ! 俺の心の何かが!!』

——  
会えない弟との、初めての触れ合い

『りん。私の視界に何だか殺生丸様が二人に見えるのだが……わし、  
疲れてない?』

『邪見様! ホントに二人の殺生丸様が居るよ!』

『……バカを申すでない。殺生丸様がお二人も居るなど、

わしの胃に穴があk「殺されたいか? 邪見」申し訳ございませんで  
したア——  
!!!』

——  
決して叶うはずが無かった、本殺生丸とオ殺生丸主の遭遇

『久しいな、犬夜叉』

『テメエは——奈落!』

『そう、何の因果かまたこの現世に舞い戻ってきてしまった様だ』

——嘗ての宿敵……復活

『——貴様は』

『アンタでもそんな顔するんだね——殺生丸』

——安らぎを得て旅立った、一人の女性との再会

……まあ、嘘なんですけどね!



番外編 1—1

その日、殺生丸は自称師匠であるゼルレッチに呼び出されていた。

「——私を呼び出すとは何用だ、ゼルレッチ?」

「……今日呼び出したのは、四魂のかけらに関する事だ。

お前には是非とも、話しをしておかなければならないと思ったからだ」

この時、殺生丸は嫌な予感を感じた。

ゼルレッチは爽やかな笑みを浮かべてこう告げる。

「——四魂のかけら……一つ異世界に落としちゃったく(▽?)ゞゴメ〜ン♪」

「……………。(。D。) ハア??」

殺生丸は呆けた顔を魅せた。

ゼルレッチは舌をペロツと出し、ふざけた表情をとった。

彼はそんな魔法使いの態度の一つ、溜息を吐いた後に一言呟いた。

「殺そう」

「さてさててつ!? 落ち着けつ!? まずは落ち着いて話しをしよう

!! そうしよう!!

我らには言葉という平和的解決方法が有るじゃないか!? それを

活用しよう!!」

「死ね」

「待って!? 解った!! ちゃんと謝る!! ふざけた事について謝るから落ち着いてくれ!!」

力が落ちた儂では貴様の全力など耐えきれんぞ!」

「知らん」

「アレじゃ!! ほらアレじゃよ!! 年老いた老人の茶目っ気という奴じゃ!!

頼むからまずは話を聞いてくれ!」

「……………」

殺生丸はゼルレツチ老害の懇願する様を見て、鉄碎牙に乗せていた手を静かに下ろす。

それを見たゼルレツチは安堵の溜息を吐く。

「……はあ、寿命が縮むかと思つたわい」

「——手短に用件だけを述べろ、老害」

「……冗談が通じない奴 z y……分かったから刀に手を置くのを止めるっ!？」

「——で？」

「……儂がお前をその異界に送り込んでやろう」

「——やはり、それしか手立てはない……か」

殺生丸は分かっていた事だが、気持ち的に凄く萎えた。

そんな彼を見たゼルレツチはこればかりはどうしようもないと言葉を続ける。

「仕方ないであろう。 四魂アのかけらは人間の手に余るモノ。

回収に適した者は、お前を於いて他に居らぬのだから」

ゼルレツチは一度、四魂のかけらに心を奪われたコトがあった。

かけらの回収に当たっていた殺生丸は、その時にこの魔法使いと出会った。

それ故に、ゼルレツチはこの秘宝の恐ろしさを知っている。

並の者では心を吞まれる、真に封印する者こそがかの宝玉に触れられる。

そしてそれが出来るのは彼の目の前に居る、大妖怪をおいて他にいない。

故に、ゼルレツチはこの案件を殺生丸に託す他ない。

殺生丸もそれらの事情を全て理解しているからこそ、面倒に感じているのだ。

「——ゼルレツチ、時が惜しい。 手早くコトを進めるぞ」

「——ああ、責任を以てお前さんに向こうの世界に送り届けよう」

ゼルレツチは殺生丸に自身が特定しておいた世界の座標を載せた第二魔法を行使する。

本来は彼にしか使えない代物だが、色んな意味で規格外の存在である殺生丸には使えるのだ。

「——今よりお前を異界に送る。準備は良いな？」

「——始めろ」

「——うむ、では良い旅路を」

そう告げて、偉大な魔法使いは大妖怪を異界へと送る。

「ボトツ（あつやべ）」

「……えっ？」

殺生丸が転移する直前、地面に描いた魔法陣の一角に鳥がフンを落とす。

ゼルレツチは焦ったが殺生丸は既に送りつけた後。

故に、彼は笑顔で一言こう呟くだけであった。

「ま、いつか！」

番外編 予告―第2弾―

― 舞台は、第5次聖杯戦争

― 聖杯を巡り争うのは、選ばれた七人の魔術師<sup>マスター</sup>

― 彼らに与えられた駒は、歴史に名を遺した英雄の具現  
化たる七騎の英<sup>セイヴァント</sup>霊

― 主人公は半人前の魔術師……と言いたい処だが、この  
世界は違う

― 『雪の妖精』イリヤスフィール・フォン・アインツベ  
ルン

― 『正義の体現者』『救世主』『殺生丸』

― この物語は、彼女と一匹の妖犬<sup>Fate</sup>によつて織り成される

― 新たな運命<sup>stay night</sup>の夜

此処は、御三家の一つである『アインツベルン』の本拠地がある城の場内。

現在この場では、召喚魔術の最高位である英<sup>サーヴァント</sup>霊降臨の儀式が行われている。

儀式を取り行っているのは、今回の聖杯に選ばれた魔術師<sup>マスター</sup>の一人であるイリヤスフィール。

彼女はアインツベルンが鑄造したホムンクルスであり、過去最高傑作の出来である。

そんな彼女は、アインツベルン現当主のアハト翁が用意した聖遺物を

その手にしながら少しの不安を感じていた。

何故、不安を感じるのか？

答えは簡単だ、これから呼び出す英霊に問題があるのだ。

呼び出す英霊が召喚に応じるかどうか、その部分が一番の問題になっているのだ。

今回で聖杯戦争も5度目、御三家の一つであるこの家系も数百年単位でこの戦争に参加している。

そんな彼らが、召喚に応じるかどうかの博打英霊を呼ぼうとしているのにも、勿論理由がある。

召喚に用いれる遺物がコレだけしか無い。

……仕方が無かったんだ。

第4次と第5次の間の期間がたったの10年しか無かったのだ。

冬木の聖杯戦争は主に約60周年の周期で訪れる大魔術儀式であり、

これまでの第4回まではその周期で訪れていたのだ。

だが、今回は10年と云う短い期間に急遽変更になり、英霊由縁の遺物を見つける時間がなかった。

一応は、ギリシャ大英雄を召喚できる遺物を取り寄せていたのだ

が、

運が悪かったのか手に入れる事は叶わなかった。

其処で、ユーブスタクハイト改めアハト翁は城にある物を片っ端から探した。

そして探し出したのが、その問題の英霊に由来する遺物である。

その聖遺物は、日本の着物と呼ばれる物の切れ端であった。

何処か上品な印象を与えられるそれで召喚出来る英霊は、世界に於いて一人……いや、一匹だ。

英霊の真名は、殺生丸。

出生は聖杯戦争の開催地である日本であり、その伝承は世界各国に及ぶ。

聖杯はキリスト由来の物である事から西洋の英霊、

具体的には宗教に携わっている西洋圏の者たちしか呼べない。

日本でも、近世に入った頃には宗教の影響を受け始めたので

それ以降に生まれた日本の英霊は召喚可能なのだ。

だが神秘はより古い時代の方が高い、それ故 近代の英霊を積極的に呼び出そうとするのは余りない。

その点、殺生丸は日本の英霊でありながら召喚の条件はクリアしている。

推定されている誕生年代も神話に近く、神秘は日本で呼べる英霊としては

最高にして最強のサーヴァントになるだろう。

こんな説明を聞いたら、絶対に彼を召喚した方が良いと誰もが言うだろう。

アハト翁もこの聖杯戦争に参加した当時からその様な考えをしていた。

だが、かの大英雄は召喚に応じないのだ。

何度も召喚するのに、その呼びかけにウンともスンともしないのだ。

第1回目は御三家全てが彼を召喚しようとした。

結果は全敗。

第2回目は御三家＋他の参加者4組の正しく全参加者が召喚しようとして挑戦した。

結果は惨敗。

第3回目は御三家以外の4組がまた挑戦した。

結果は無残。

第4回目は誰も召喚しようとはしようとはしなかった。

この結果から解るとおり、彼は何故か召喚に応じないのだ。

英霊も聖杯と云う優勝賞品を目当てに戦争に参加するので、

願いが無い存在は抑々召喚が出来ないだろう。

だが、彼は召喚に応じはする筈なのだ。

彼が一番大切にしていた存在の為に……

それ故、この城にもその時に使った遺物が残っているのだ。

アハト翁は無いよりはマシだと考えて、コレを召喚の触媒にしようとした。

召喚が不発に終わる様なら、次は時間が許す限り新たな聖遺物を探せば良いと開き直ったままでだ。

だからこそ、イリヤは不安を感じていた。

自身が考える復讐の第一歩が、不発から始まるなど冗談じゃない。

そんな考えがある彼女だからこそ、今回の召喚には不安と同時にヤル気を出していた。

未だ、誰も召喚した事が無い大英雄を自分が召喚してやる……と彼女は挑戦魂を露わにしている。

そして、その時が訪れた。

『素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。降り立つ風には壁を。』

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ』  
『閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。』

繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する』

『―――告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ』

『誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。』

汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ――

白き貴公子が、其処には存在していた。

長い銀髪、触媒に使用した物と同じ着物姿。

フワフワしている大きな毛皮。

腰と背中の計3本の刀。

そして、人類を超越している圧倒的な存在感。

想像していた域を優に超えた、真正の化物。

遠くで召喚を観ていたアハト翁は、まず何事かと慌てて召喚された存在を観察した。

今迄、一度たりとも召喚されなかった英霊だ。

まず偽物の可能性を疑い、その眼を疑惑の色にしていた。

だが、此れまで英霊と呼ばれる存在を何度か観てきた彼は、理解してしまった。

ソレが本物だと云う事実には……

アハト翁にその後の記憶は無い。

彼は歓喜の余り気絶してしまったのだ。

そんな爺の寸劇などは眼に入らない彼女は、目の前の存在が口を開くのを待った。

そして、透き通った声がイリヤの耳に聞こえてきた。

「――召喚に応じ、参上した。」

私を呼んだ魔術師はお前か？」

「――うん……じゃなくて！ ええつと……私が貴方のマスターである、

イリヤスフィール・フォン・アインツベルンです……ですわ！」

「――私の名は、殺生丸。」

此れより我が身は、お前と共にある」

「……あつ！ えつと……此れから宜しくね、殺生丸」



「……ああ、私に全て任せろマスター。

必ず、聖杯を……いや、まずはマスターの中にある聖杯を如何にかしよう」

「——なっ!?!」

イリヤは此れからの事について彼と相談する算段を頭の中で考えていた。

だが、彼が言った言葉に声を失った。

「——私は、魔術師キャスターとしての適性も持ち合わせている。

マスターと契約と云う形で繋がっている今の状況なら、ある程度は把握できる」

「——」

彼女は言葉が出なかった。

この英霊は、ここまで規格外なのかと……

「——貴方、役割クラスりは何なの?」

その口ぶりだと、キャスターでは無いようだけど……」

「——」

イリヤの眼には確りと彼のパラメーターが表示されていた。

驚異的な事に、合計がオールA以上と云う結果を叩き出していた。

その数値に、4騎士では先ずは無いと考えて3騎士セイバーの内の剣士を思い浮かべた。

セイバーのクラスなら、この数値に納得がいくからだ。

そんな考えをしていた彼女は、何時まで経っても

自身のクラスについて話さない彼を不審に思っていた。

そして、彼は重いその口を開いた。

「——救世主セイヴァー」

「……セイヴァー? セイバーじゃないの?」

「……………そうだ」

「ふん」

イリヤは意外に感じたが、寧ろ納得してもいた。

こんな凄い存在じゃ、通常のクラスは合わないなと考えたのだ。

だが、彼を観ているとその事実<sub>に</sub>凄く嫌がついているのが何となく分

かった。

顔色は変わってないが、雰囲気で何となく察せる。

イリヤはそんな彼の姿を見て、このサーヴァントとは上手くやっていけるかなと考えだしていた。

自分たちと同じように嫌いなものがあるのだと知れると、彼の存在を身近に感じられたのだ。

「ねえ、殺生丸?」

「——何だ、マスター?」

「——そのモフモフ触らせて!」

「——肩にある毛皮コイルの事か?」

「そうそう! そのモフモフ触らせて!」

「……はあ、仕方がない。——特別だぞ?」

「ヤッター!」

彼女はそう云うと、彼のソレにダイブした。

コレには殺生丸も驚き、彼女を抱きかかえる態勢に成ってしまった。

まあ、彼女はそんなのお構いなく毛皮に顔を埋めているのだが……先ほどまでは、殺生丸に対して気丈に振舞おうとしたのにもう終わっていた。

彼からして見れば、自身のマスターが無邪気に振舞う方が嬉しかったので如何でもよかった。

こんな始まりだったが、彼と彼女が紡ぎだす奇跡の物語には丁度良かったのかも知れない。

彼らには、この位のほのぼのとした空気が合っている。

——運命の歯車が動き出す

——本編とは違う、もう一つの聖杯戦争

―もう一つの運命』

『―なっ！ 何なのよ！あの化け物は！』

『凜！ 今は逃げるぞっ！ 私たちでは勝ち目は無い！

衛宮士郎！ 貴様もセイバーを連れて離脱しろっ！』

『―アーチャー！ 彼からは逃げられませんっ！

此処で戦うしか、生き残る道は無いっ！』

『何を言ってるんだっセイバー！ アーチャーの言うとおり、此処は  
―端退くんだけだっ！』

『―お困りの様なら、手を貸して遣るぜ。嬢ちゃんと坊主』

『―その顔を観るのは久しいな「クランの猛犬」』

―懐かしき、顔ぶれとの再会

『……まさか、この様な状況になろうとは』

『私は別に構わないが、コイツと組ませるのはだけは勘弁願いたい  
だが……』

『——ほお？ 何ならテメエからこの槍の餌食にしてやっても良いんだぜ？ アーチャー』

『——ふむ、次元を超えてこの秘剣を師匠とまた競えるとは……正に奇跡よな』

『アサシン、山門から動かして上げたのですからその分はちゃんと働きなさい』

『——桜が、望むなら……私は何も言いません』

『——壮観だな。全サーヴァントが集結し、力を合わせるなど……

だがな、気づいているか？ コレだけの戦力を集めながら尚、この身には届かないと……』

——在り得ない、共闘

『やつちやえ！ セイヴァー！』

『——ああ、マスターの命を遂行しよう。』

我が名は、殺生丸！

貴様を倒す——イリヤスフィール・フォン・アインツベルン最強の  
サーヴァント  
使い魔だ！』

最強は、いま現在此処に！

……ネタ、第2弾だよ！

番外編 予告―第3弾―

― 舞台は、靈子虚構世界『SE・RA・PH』

― 聖杯『ムーンセル・オートマトン』を求めると、総勢  
128人の靈子ハッカー

― 実在したか否かを問わず、地球上の歴史に記された過  
去の英靈サーヴァントの使役

― 主人公は原因不明の記憶喪失に陥った少女

― 彼女に選ばれし使役魔サーヴァント、『赤い外装に身を包んだ武人』

― 二度の闘争を経た彼女たちの前に立ち塞がる、白き少  
女と黒き少女

― 此れは、少々配役が替わった物語

西暦2032年、月面で発見された太陽系最古の物体、聖杯『ムーンセル・オートマトン』。

そして、聖杯が創り出す霊子虚構世界SE・RA・PH。

SE・RA・PHで開催される聖杯戦争の戦闘形式はトーナメント式である。

第一回戦で半分の64名になり、第二回戦で更に半数の32名にまで減少した。

このお話は、記憶を失った少女が三回目の戦いに挑んだ際に起こった出来事。

### ——第三回戦、一日目。

参加者の一人である主人公の名は、岸波白野。

そして彼女に付き従う、赤い外装のサーヴァント。

二度の勝利を得て計三回目になる聖杯戦争に挑んでいた。

彼女たちの次の対戦相手はおそらく10にも満たない少女『ありす』。

ありすの容貌に岸波白野は戸惑いを感じたが、自身のサーヴァントに諭され気持ちを入れ直した。

彼女もマスターとして此処まで勝ち上がって来たのだ、油断は出来ない。

だが白野は基本的に心優しくお人好しの部分が強い為、ありすを完全に敵だと断言出来なかった。

そんな矢先に、敵である筈のありすから誘いが掛かる。

内容は鬼ごっこと子供らしいモノであった。

彼女の要望に応じ、白野はありすを捕まえようとする。

ありすは逃げる舞台をSE・RA・PHが用意したダンジョンであるアリーナに設定。

彼女を追ってアリーナの最奥に進んでいく主人公たち。

逃げるありすをアリーナの最後で漸く捕捉する事に成功する白野。

そんな彼女にありすは嬉しそうに話し掛ける。

「見つかったちゃったけど、楽しかったよ！ お姉ちゃん！」

そんな楽しい表情を少し悲しげにしながら、ありすは話を続けた。

「ねえ……あたしのお話聞いてくれる？」

お話？

一体何の話だろうか？

「あたし《ありす》はむかしね、こことはちがう国にいたの……」

その時、ありすの傍に彼女にそっくりな黒い少女が突如として姿を現した。

ありすに似た少女は、ありすが話す内容の続きを語った。

「戦車とか飛行機とか、鉄のかぶとと鉄のてっぽう、黒いしかくの国がやってきたの。」

空はまっか、おうちはまっくろになって気がついたらまっしろの部屋にいたの。

そして、おともだちもママもパパもいなくなつて……」

此方がもう一人のありすの存在に困惑している間に話は進む。

ありすが語り出す。

「あたし、ころんでもけがしてもおぎようぎ良くがまんできるの。」

いたいっていうとパパがおこるから。

でも、がまんできないぐらい、いたいコトがあつて気づいたらここにいたの。

でもいいんだ。だって、ここはとっても楽しいもの。

いろんな人がみんな、あたしにやさしくしてくれるの」

黒いありすが語る。

「ええ、そうねありす。ここでなら力いっぱい遊べるとおもつたでしょう？」

「でも、思いつきり遊んだら壊れちゃうかも。」

くびもおとても取れちゃうかもしれないから大変だわ」

「壊れちゃったら直せばいいよ。ママからもらった針と糸があるもの。」



ちやちやつと縫つてはいおしまいよ。

ママみたいにお上手じゃないけど、ちゃんとくつつくわ」

「ふふつ、くつつければだいじょうぶだもんね」

「ふふつ、だいじょうぶじゃない？」

「よかったーっ！ またママに怒られるかとおもった」

「じゃあ、力いっぱい遊びましょう。このお姉ちゃんは、ようやく出会えた仲間だもの」

「前の二人とはちがつて、今度はちゃんと触れあえる。真つ赤な血もあたたかいもの」

白いありすと黒いありすは交互に語り合いながら話を進める。

—— 何かがオカシイ

白野は、彼女たちの話を聞きながらそう感じた。

見た目は可愛らしい少女だが、彼女たちと普通の人間を比べた場合、

その違いをはっきりと認識出来るであろう。

—— 人として、大事な何かが欠落している……

二人のありすが笑顔を浮かべながら告げる。

「さあ—— 『あの子』を呼ぶとしましょう？」

「うん！ それがいいよー！」

ありすがその手を振り上げる。

すると——

—— アリーナから、音が消えた。

床・壁・空—— アリーナに存在する全てがその対象にひれ伏す。

規格外、圧倒的等の言葉ですら生温い。

世界が悲鳴を上げているのでは無い、其処に存在する絶対者にただ服従する。

空間すら自身の支配下に置くその化け物は、ありすの合図と共に召喚されたモノ。

白い毛並に大きな体格をした狼？……いや、コレは犬であろうか？

其の白い犬は召喚されてから、此方をずっと見詰めている。  
……コレがありすのサーヴァントと云う事になるのだろうか？

——勝てない

考えなくても、本能が全身の感覚を刺激して伝えてくる。

アレにはどんな強大なサーヴァントで挑もうとも、戦いにすらならない。

王者であるレオナルド・ビスタリオ・ハーウェイのサーヴァント従者、太陽の騎士ガウエイン。

アジア屈指であるゲームチャンプである間桐シンジのサーヴァント姉御、星の

開拓者フランシス・ドレイク。  
イングラント女王陛下の懐刀であるダン・ブラックモアのサーヴァント騎士、森の反逆者ロビンフッド。

岸波白野が観た、英雄豪傑の猛者たち。

その他にも沢山の英霊が存在する筈だが、コレと見比べたら数段は劣るだろう。

彼女が絶対の信頼を寄せる、まだ名も知らぬ赤き弓兵。

自身に勝利を奉げてくれる頼もしき存在も、コレの前では無に等しい。

其れほどまでの絶対強者。

生物の頂点に君臨する存在。

今の彼女がこの様に思考していられるのも、感覚が麻痺を起しているに他ならない。

その隣では、相棒のサーヴァントが彼女に何かを伝えていたが無駄であった。

逃げるとうる思考にすら至れない程のショックを受けた彼女を、

アーチャーは無礼を承知しながら抱きかかえて逃走する。

そんな彼女たちの後ろから、無邪気な声が聞こえてくる。

「あれー、お姉ちゃん。行っちゃうの？ つまんないの……」

この子は、分けてあげた魔力がなくなるまでここにいるから、また遊んであげてねー！

彼女たちがありすの言葉を正しく理解できるのは、もう少し後であ

る。

今はただ、あの存在から逃げ出したかった……

——一つの配役が違うだけで大きく変わる歯車

——彼女<sup>主人</sup>たちはこの難関に如何立ち向かうのか……

——其の結果は、君自身の眼で確かめると良いだろう

——『Fate／EXTRA 番外編―第3弾― 運命の悪戯』

『マスター、此処が正念場だっ！ 踏み止まれ！』

『うんっ！ お願い、アーチャー！』

『——諦め無いのだな、人の子よ』

『『諦めるのはそっちの方だっ!!』』

『——フツ、コレが人間の強さ……か』

——決死の覚悟を抱いた、策

『ねえねえ！ お外で遊ぼうよ！』

『待つてありす<sup>あたし</sup>！ 走ったら転んじゃうよ！ ほらっ！ シロも一緒に来てー！』

『（――何時までも、この夢が続くのか……）』

――止まらない砂時計

『――マスター、私は……いや僕は殺生丸<sup>オリジナル</sup>には遠く及ばないけど、君たちの希望で在りたい。

――生きてくれ、ありす<sup>アリス</sup>。

君らが既に終わっている存在だとしても……それでも僕は君たちに生きていて欲しいんだ』

『――シロ……何をするつもりなの？』

『――シロ……貴方まさか……』

『――最初で最後の大仕事だっ！ 派手に逝かせてもらおうよっ！』

『全く……世話が掛かる息子だ』

『如何して……貴方殺生丸が此処月に？』

『我が名は、殺生丸。』

理由は——其れだけで十分では無いか？』

——希望の光が、月面に届く！

……ネタ、第3弾だね！

## 設定資料集

『我が名は——殺生丸。』

私に役割クラスりなど存在しない。

故に、私の事は名で呼べ（約：クラス名で呼ぶな）』

【クラス】救世主セイツア『其の名を——囁るな！（約：恥ずかしいんじやボケ！）』

【マスター】間桐雁夜

【真名】殺生丸

【性別】男性

【身長・体重】185cm・68kg

【属性】中立・中庸

【ステータス】筋力A 耐久B 敏捷A 魔力A 幸運B 宝具A＋  
＋（EX）

【クラス別スキル】

『カリスマ（B）』

軍団の指揮能力、カリスマ性の高さを示す能力。

団体戦闘に置いて自軍の能力を向上させる稀有な才能。

Bランクであれば国を率いるに十分な度量。

『対英雄（B）』

英雄を相手にした場合、そのパラメーターをダウンさせる。

Bランクの場合、英雄であれば2ランク、反英雄であれば1ランク低下する。

【保有スキル】

『怪力（B）』

魔物、魔獣のみが持つとされる攻撃特性で、一時的に筋力を増幅させる。

一定時間筋力のランクが一つ上がり、持続時間は『怪力のランク』による。

最高位の『神獣』ランクに位置する存在なので、本来このスキルは失われている。

だが、神として呼び出された訳では無いので所持。

『神性 (C)』

神霊適性を持つかどうか。

ランクが高いほど、より物質的な神霊との混血とされる。

聖杯戦争の開催地である日本で召喚された場合、信仰の関係で最大ランクAを獲得する。

だが、本人に神の自覚が無い為かランクダウンしている。

『毒華爪 (A+)』

強力な毒を発する爪。

自身の毒より効力が弱いものを無効化する『対毒』のスキルも兼ね備えている。

性能は、ギリシャ神話に悪名高いヒュドラの毒すら上回る。

『変化 (EX)』

文字通り『変身』する。

永い年月を得たその姿は正しく、幻想の祖と呼ばれる所以であろう。

『魔術 (B)』

このスキルは、基礎的な魔術を一通り修得していることを表す。

【宝具】

魔術師キャスターのクラスで召喚された場合、ランクが上昇する。

『人界風を守護する雄風傷』

ランク：A+ 種別：対軍宝具 レンジ：1〜10 最大捕捉：100人

由来：三界を統べる三剣の一つ、人の鉄砕牙より放たれる風の衝撃波。

三剣の一つ『鉄砕牙』から発生する、人々を守る荒々しい風。

普段はただの錆び刀だが、殺生丸の魔力(妖力)によって巨大な牙のような刀に変化する。

その力は、一振りですべての敵をなぎ倒すとされる。

原作での誕生秘話は、犬夜叉の母を守るために刀を打った事になっていた。

だが、この世界での誕生経緯は不明。

『人界を導く怒涛の嵐』

ランク：A++ 種別：対城宝具 レンジ：1～50 最大捕捉：500人

由来：三界を統べる三剣の一つ、人の鉄砕牙が放つ秘技。

三剣の一つ『鉄砕牙』から放たれる奥義。

《風の傷》は云わば、この宝具に至る前段階の技。

この宝具こそ『鉄砕牙』で放てる最強の一撃。

《風の傷》は、押し寄せる敵をなぎ払う為の放射型、対軍宝具。

対してこの宝具は、竜巻状の風が狙った処を撃ち抜く集中型、対城宝具。

『天界を否定する奇跡の法』

ランク：EX 種別：対人宝具 レンジ：1～10 最大捕捉：100人

由来：三界を統べる三剣の一つ、天の天生牙より放たれる一度限りの奇跡。

三剣の一つ『天生牙』が織り成す、一度限りの蘇生。

蘇生は、肉体が消滅する、既に他の手段で蘇生されていた等の場合は効力が無い。

『天生牙』はその刃で生者を斬ることができないが、『あの世の存在』を斬ることができる。

真に慈しむ心があれば、一振りで百の命を救うとされている。

『天界を繋ぐ冥府の門』

ランク：EX 種別：対界宝具 レンジ：1～50 最大補足：500人

由来：三界を統べる三剣の一つ、天の天生牙が開く亜空間。

三剣の一つ『天生牙』が開く、現世とは違う別次元の世界。

空間を切り裂いて冥道を開き、敵を冥界へと直接送り込む。

開く冥道の大きさは調節できて、殺生丸は頻繁に冥界から道具を取



り出す。

彼がジルに与えた武具や旗、魔力分割を行っている植物などは冥界から取り寄せた。

『地界を創造する破壊の暴威』<sup>獄龍破</sup>

ランク：A++ 種別：対国宝具 レンジ：1～99 最大捕捉：1000人

由来：三界を統べる三剣の一つ、地の叢雲牙より放たれる黒き龍。三剣の一つ『叢雲牙』から発生する、国を崩壊させかねない一撃。刀身は野太刀程度の長さで日本刀と同じくらいの身幅を持つ両刃剣で、

柄頭には大きな紫色の珠が埋め込まれている。

その威力は、最上位に位置する聖剣の輝きすら飲み込み、漆黒へと誘う。

『叢雲牙』には太古の悪霊による自我が宿っており、隙あらば所持者の意志を奪おうとする。

現在、悪霊の自我は完全に沈黙を貫いている。

救世主のクラスで在りながら、

悪（邪悪）の塊であるこの宝具を扱えるのかは、謎である……

『地界を司る奈落の底』<sup>黄泉</sup>

ランク：EX 種別：対軍・対界宝具 レンジ：1～50 最大補足：100人

由来：三界を統べる三剣の一つ、地の叢雲牙が開く亜空間。

三剣の一つ『叢雲牙』が開く、現世とは違う別次元の世界。

そして、地獄より無数の亡者を蘇らせる力を持つ。

一振りで百の亡者を蘇らせる事も可能とされる。

『叢雲牙』本来の使用方法は、『獄龍破』よりこちらの方が正しい。

『天生牙』の冥道と同じように別の空間を行き来する力も持ち合わせている。

だが、こちらでは余り空間を開いたりしない。

蘇らせる亡者は通常、人間が対象であるが殺生丸の場合は『スケルトン』

『ワイバーン』『ゴースト』などの、所謂モンスター系を蘇らせて自身の戦力とする。

何故、彼が救世主セイヴァーのクラスに該当するのか、作者にも解らなくなってきた……

『??』

ランク：EX 種別：?? レンジ：?? 最大補足：??人

由来：世界を救った証。

彼が救世主と呼ばれる所以、究極宝具。

現在その詳細は、謎に包まれている。

【Weapon<sup>ウェポン</sup>】

『闘鬼神』『爆碎牙』その他の武具・道具の類は、冥界の時空に保管されている。

その気になれば、彼は宝具になる宝の全てを手元に取り寄せられる。

この作品の主人公であり、別世界からの漂流者。

前世の事については、永い年月の果てに殆ど覚えてはいない。

自身の本当の名も忘れてしまったが、生前からの性格だけは多少の変化を伴いながらも保っている。

だが、様々な時代を生き抜いてきた影響もあつて、結構ドライな部分も存在する。

基本的に子供が好きで、子供を甚振っている様な畜生は許さない。

その辺りも、生前に残った名残なのかも知れない。

彼はサーヴァントとして、基本の7クラス全てに適性がある。

三騎士クラスで召喚された場合、上記のスキルに戦闘系のスキルが複数追加される。

キャスターのクラスで召喚された際、鍛冶スキルを取得する。

バーサーカーのクラスで召喚された際、『天性の肉体』を獲得して筋骨隆々の体軀に変化する。

だがその変化を嫌う故に、彼は死んでもバーサーカーのクラスでは

召喚に応じない。

パラメーターの数値は雁夜がマスターの為、軒並み低下。

イリヤ・凜の場合

【ステータス】筋力A＋ 耐久A 敏捷A＋ 魔力A＋ 幸運A 宝具A＋＋(EX)

バーサーカーで召喚した場合

【ステータス】筋力A＋＋ 耐久A＋ 敏捷A＋＋ 魔力A＋＋ 幸運A＋ 宝具A＋＋(EX)

魔術やパラメーターを上昇させる宝具を使用した場合、一時的な数値はこれ以上となる。

生まれて数十年の内は戦闘技術を上げる為、修行と実践を交互に行いながら過ごす。

その後、この世界の正体を知り修行と並行する形で情報収集を行う。

同時期に刀鍛冶の妖怪である刀々斎に鍛冶の師範を受ける。

習得して於いて無駄にはならないだろうと考えた、主人公の浅はかな思惑であった。

だが、思いの外楽しみを見出したのか、師弟関係が終了した後も彼は独自で技量を高めた。

並行して取り組んでいた修行も上手く仕上がり、順風満帆な妖怪ライフを謳歌した。

然し、そんな彼の元にある一つの便りが届く。

母から息子に送られた、試験<sup>虐め</sup>である。

彼は泣く泣く、自身の母国となる島国を旅立つ。

その際に、蚤妖怪の冥加をお供に従えた。

まあ、爺さんは喜びの涙を流してくれたんだけどな！（愉悦

旅を始めた殺生丸は、試験の内容である四魂のかげらの情報を集めようと奮闘した。

だが彼は、直ぐに挫折した。



『……………』

『……………?』(\*「・ω・」?)

『——アツハツハツハツハツハツハツハツ!!』

『?!』——何が、そんなに可笑しい?』、(∴、「ㄩ」)ノミ☆コ  
ラーツ!

『寧ろ、可笑しくない処が無いじゃない!』

まさか、そんな魔術を教えて貰う為に私を助けたのが魔獣なんて他に表現しようが無いわよ!』

『——そんな事は如何でもいい。其れよりも教えるのか? 教えないのか? どっちだ?』

『ああ、魔術は教えるわよ。魔術師は等価交換が原則だからね……ブ  
フツ!』

『……如何やら貴様は、黄泉の国に旅立ちたい様だな』

『ああ待った待った! もう笑わない! 笑わないから!』

あつそうだ! 貴方の名前を教えてよ!

これから私が少しの間は師匠になるんだからさ。

名前が解らないと、色々不便だし』

『——別に、貴様が師になる訳では無い』

『まあまあ、そう言わずに名前位は教えてよ。』

一応これから仲良くやるんだし』

『——殺生丸。』

私の名前は——殺生丸だ』

『……セツシヨウマル? 変な名前ね?』

『——うるさいっ黙れ』

『——よし! じゃあ、次は私の番ね!』

私の名前は……』

——この出会いから、彼の本格的な旅が始まる。

——叙事記『白き妖犬』一部選抜

……えっ？ この先？ ここから先は有料だから観れないよ！

雁夜の救い

——前世の記憶がある。

そんな書き込みを以前ネットで見たことがある。

面白半分で書き込んだのか、本当に記憶があつたのかは自分には分からない。

——真実なんて書き込んだ本人しか知りようがない。

当時の自分は嘘だろうと決めつけた。

何かの言葉に『人間は自身が理解できる範囲でしか物事を理解できない』というものを

見かけたことがあつたが、まさに自分はそういった部類の人間なのだ実感する。

現に世間一般的な暮らしの中で幽霊や宇宙人に遭遇したことはない。

魔法や超能力者もテレビで報道されるインチキなモノしか知らない。

自分の中でそれらが常識となり、不可思議な現象や存在は空想のものだと考えるようになった。

それが当たり前だと思つていた……そう、思つていた……だ。

長々と前置きを喋つたが簡潔に述べると前世の記憶を持つたまま転生した、妖怪に……

それも只の転生ではなく、自身が知っているキャラに憑依しての転生だ。

……いや、別に人間に転生できなかったのが嫌だった訳じゃない。寧ろ虫や魚などに転生してないだけマシだと考えた。

妖怪と云つても、自分はヒトに変化できるタイプで人間だった頃と

然程変わらなかつた。

……まあ、生まれた時からヒトの形を保っていたので其処は如何でもいいのだ。

問題は、転生したキャラ自身である。

長い銀髪に、額に月の形の紋：頬に二本の紋様がはいった面立ち、名がセツシヨウマル。

……これ犬夜叉に出てくる殺生丸様じゃね？

アイエエエエ！ セツシヨウマル!? セツシヨウマルナンデ!?

——殺生丸

犬の大将と呼ばれる西国を支配した大妖怪の嫡男、自身も強大な力を持つている純血種の大妖怪。

——ある時は、犬夜叉異母弟と鉄碎牙形見の奪い合いで腕を切り落とされ

——ある時は、犬夜叉を狙う奈落ラスボスに利用されて始末しようとするも幾度となく逃げられ

——ある時は、天生牙形見の冥道残月破技が本来は犬夜叉に与える為のものだった

——など、不憫な場面が多々ある。

だが同時に、彼は気まぐれで救った少女りんとの出会いを皮切りに情が芽生えていく。

奈落敵の分身であった神楽女性との別れ、親から子へ託された真の想い、様々なモノを物語の中で見出していき、父親大妖怪を超える存在へと成長を遂げる。

ついには殺し合う存在であった犬夜叉に手を貸し、奈落を倒すまでに至った。

——話を纏めると、殺生丸大妖怪の身近は危険だと云うことだ。

作品には書かれていないが父が没した後、西国を収める存在が居な



いたため必然的に彼が後を継ぐ。

母が代わりに西国を収めたかもしれないが、本来は後継者の殺生丸が後を継いだと考えるべきだ。

妖怪の世界は弱肉強食、上に立つ者は絶対の支配者でなければならぬ。

もし弱者に成り下がってしまったら、即座に寝首を搔かれるだろう。

殺生丸は戦国最強の異名を持っており、物語的に犬夜叉や奈落に負けただけで弱い訳ではない。

寧ろその名の通り、妖怪の世に於いてもトップの実力者であろう。

ここで考えなければならぬのは、飽くまで最強であったのは本人だと云う事。

大妖怪の血、そして数多くの経験が彼を強者に仕立て上げたのならば、自分もそれに倣う他ない。

弱者の時に他の妖怪に襲われていたのでは、些か遅すぎる。

本人より強くなれるかは努力次第だと考えたら、頑張れそうな気もしてくるし大丈夫な筈だ！

やればにんぐ……じゃなかった、やれば妖怪できるものさ！

——よし！ 俺は、妖怪最強を目指す！

そして本人より強くて優しい兄上となり、産まれてくる犬夜叉と一緒  
に日ノ本を駆け巡るぞ！

——その時は、まだ何も知らなかった。

殺生丸自身が存在するならば、この世界にも犬夜叉は産まれると考えていた自分は、

後になってその想像は見当違いだと理解する。

——ここは<sup>主人公</sup>犬夜叉が誕生する世界ではない、全くの別世界なのだ  
と——

——西暦1994年、場所はとある地方都市『冬木市』  
周囲を山と海に囲まれた場所であり、近代的に発展した新都、  
昔ながらの町並みを残す深山町の主に二つのエリアに区切られた  
自然豊かな地方都市。

此処は日本でも有数の霊地であり、ある戦争の舞台となる場所だ。

その名は——

——聖杯戦争

万能の願望機である『聖杯』を巡り、七人の<sup>マスター</sup>魔術師が<sup>サーヴァント</sup>霊長の守護者  
たる英霊を召喚し、  
争い合う小さな戦争。  
他の六組を排し、最後に残った一組に願いを叶える権利が与えられ  
る。

数十年に一度の周期で行われる聖杯戦争の狼煙がもう間も無く、冬  
木に上がろうとしていた。

——間桐邸

『間桐』とは数百年前に冬木に根を張った魔術師の家系であり、冬木の高い霊脈を使い『遠坂』『アインツベルン』と協力し、聖杯降臨の術式を完成させ、これまで聖杯戦争に携わってきた御三家の一つである。

その間桐邸で、もだえ苦しむ男が一人居た。

——間桐雁夜

いま、彼の有様を見たら普通の人は目を見張るだろう。

髪の毛は色素が抜け落ちたかのように真っ白で、

左半身は魔術回路を補う刻印虫の影響で殆ど動かない状態だ。

……だが、彼はこんな姿に成り果てても、叶えなければならぬ願いがあった。

——桜を救う

雁夜は『間桐』の非人道的な魔術を嫌い、11年前に家を出奔した。そのため本来その身は冬木に留まらず、フリーのルポライターとして生計を立て、

様々な場所へ赴いていた。

そんな彼だがここ冬木には定期的に帰って来ていた。

その理由が彼の初恋である『遠坂葵』の存在であった。

彼は幼馴染である葵に好意を寄せていたが、

魔道と称し非道の数々を行う間桐に彼女を近づけたくないという思いから、

只の幼馴染として振る舞っていた。

また、遠坂時臣のプロポーズに対して笑顔を浮かべる彼女を見て、自身の幸せより葵の幸せを優先しその身を引いた。

彼女の夫である時臣は気に入らない存在だったが、葵を幸せにして

くれるとそう信じ、

雁夜は普通の幼馴染として、彼女の人生を見守ることに決めたのだ。

彼女の第一子である凜が生まれ、翌年には桜が誕生し、新しい家族に囲まれた彼女の嬉しそうな姿は、

自分の選択が間違っていないかと思わせてくれた。

だがそれは……桜が間桐の養子にされると聞くまでだった。

『遠坂』と『間桐』は聖杯関係で古い盟約を結んでいる。

時臣は凜と桜のどちらも優秀すぎる才能を惜しみ、

そして身の安全を考えて桜を間桐に養子に出したのだ。

桜の魔術属性、『架空元素』は現代において封印指定に属すもの。

封印指定とは、希少能力を持つ魔術師に魔術協会が発令する事例で、

希少能力を永遠に保存するために「保護」する制度である。

しかしそれは名目にすぎず、やることはホルマリン漬けの標本にして飾るのと変わらない。

この危険性を考えた時臣は桜を魔術師としても、

最愛の娘としても救いたい思いで間桐家へ養子に出した。

桜を救うためには魔術家の加護を必要とする為、

そして自身の後を継いだ凜か桜のどちらかが遠坂の悲願を達成すると願って……

ここで遠坂時臣は二つの間違いを犯した。

一つは間桐が今も真つ当な魔術を行っているのかどうかの確認。

そしてもう一つは桜に自身の状況を理解させなかった事。

この二つの事について確認を怠った為に桜を地獄へ送ってしまった。

そして時臣が何を考えて桜を間桐に養子に出したのか分からなかった雁夜も彼を憎悪した。

『何故、奴は……娘を……桜を……こんな間桐<sup>地獄</sup>へ追いやったッ!!』

葵さんはこの家がどんな地獄なのか知らないのだろう。知っていたら彼女は止めてくれた筈だ。

『間桐』は数百年前から間桐臓硯が支配している魔境だった。

人の血肉を啜り、蟲そのものとして500年もの間、今生に留まる妖怪<sup>害虫</sup>。

臓硯に捕まった女は蟲に体を凌辱され、間桐の跡継ぎを産む胎盤としてだけの肉塊になり、

子供を産んだら最後は蟲の餌だ。

人間の尊厳も女としての価値も文字通りここでは蟲以下だ。

だからここには葵を近づけまいとしたのに……娘の桜が来てしまふなんて……

雁夜は分かっていた。

この元凶は間桐臓硯で、その片棒を担いだのは遠坂時臣だとも……その一人に自分も入っているのだと……

臓硯が桜を養子にした理由はまともな魔術回路を持っている者が居なかったからだ。

彼の兄である鶴野には少し回路があったが、

その子である慎二は魔術回路が全て閉じて使い物にならなかった。

もし雁夜が家を飛び出さずに留まっていたら、

少なくとも桜が間桐に引き取られることは無かっただろう。

雁夜が間桐に戻ってきたのもただ桜を葵の元に帰す為だ。

聖杯戦争に勝利し、聖杯を持つてくる事で桜を解放するという取引を臓硯と契約した。

そのためにはまず魔術を学ぶ必要があった。

聖杯戦争に参加するための最低条件として、魔術回路を持っている、

参加資格である令呪が宿る、この二つが叶い初めて参加資格を得る。

雁夜は魔術を学ぶ以前に出奔したため、手始めに魔術を扱える様にならなければいけない。

だが、魔術は一生を掛けて学んでいくものであり、直ぐに覚えられ

る代物じゃない。

故に雁夜は、魔術を学ぶ時間の代わりに己の命を代用した。

刻印虫を体に馴染ませ、急造の魔術師となり聖杯戦争の参加資格である令呪を得たが、

その代価として余命は一月ほどになった。

それでも、雁夜に後悔は無い。

——それで桜を救えるならばと……

——そして……

「遠坂ア……時臣イ……！」

同時に雁夜は、遠坂時臣に憎悪の炎を燃やしていた。

そもそもアイツが桜を間桐に養子として送り出さなかったら、こんな事にはならなかったのだと彼が考えた為だ。

ここで時臣の思惑を知らなかったことが、雁夜にとって感情の抑制を無くさせていた。

雁夜はこの聖杯戦争で時臣を殺そうとしていた。

奴さえ居なくなれば、葵も桜も幸せになれると今の彼は盲信染み込考えをしていた。

彼では気付けない。

桜を救うことと時臣を殺すことは直結していかないのだと……

最愛の人の夫であり、救おうとしている少女の父親を殺そうとしている状況に雁夜は気付けない。

だが、今の彼にその矛盾を指摘してくれる存在も居なければ、気づける要素もない。

このまま往けば、彼も周りもいつか来る破滅の時が訪れるのも気付かず……

——そして時が来た

普段、夥しい数の蟲が蠢いている蟲蔵には、英霊召喚に必要な魔法陣と触媒が置いてあり、

その場には、雁夜と臓硯 二人の姿があつた。

雁夜はサーヴァントを召喚するに当たって、臓硯より詠唱の呪文に一節加える様、

指示を受けていた。

それは『狂化』のスキルをサーヴァントに施すものである。

冬木の聖杯戦争は、七騎の英<sup>サーヴァント</sup>霊に七つの役割<sup>クラス</sup>を設けて、

英霊を完全な形で召喚するのではなく——

劍士<sup>セイバー</sup>の英霊  
弓兵<sup>アーチャー</sup>の英霊  
槍兵<sup>ランサー</sup>の英霊  
騎兵<sup>ライダー</sup>の英霊  
魔術師<sup>キャスター</sup>の英霊  
狂戦士<sup>バースター</sup>の英霊  
暗殺者<sup>アサシン</sup>の英霊

——と、それぞれの伝承に基づく『役割に即した英霊の一面』というもの限定して、

現世への召喚を可能としている。

英霊を呼び出す際に用いる触媒でどの英霊を呼び出せるのかある程度決まるが、

肝心のクラスを限定することは出来ない。

ギリシヤの大英雄ヘラクレスを呼び出そうとした場合、

彼の伝承ではキヤスター以外の全てにクラスが適性があり、

特定のクラスで呼べないという状況になることもある。

アサシンのクラスは例外を除いて全て山の老翁ハサン・サブバーハとなる為、

基本的にマスターたちはそれ以外のクラスを狙うが、一つだけ特定して呼び出せるクラスがある。

それがスキル『狂化』で理性を無くした、狂戦士バーサーカーである。

バーサーカーは伝承において狂気を得たエピソードを持つ英霊ならば、大抵の者を呼び出せる。

特定の英霊を特定のクラスで召喚するという条件ならばこれで行うことができる。

これだけだったら狂戦士バーサーカーのクラスが当たりだと思いかも知れないが、

当然それ相応のリスクが発生する。

バーサーカーはステータスを上昇させる『狂化』の対価に、

魔力消費量が膨大になるというデメリットがあり、元から強力なサーヴァントには使えないのだ。

それに加えて、一部の能力が使用不能になったり、理性が失われている為に制御が効かなくなる場合もある。

今までの聖杯戦争では、バーサーカーのマスターたちは魔力切れによる自滅で全て敗退している。

故に雁夜などの急造魔術師が一番に召喚してはならないクラスなのだ。

そんな事は無論、臓硯も気付いている。

コイツにとって雁夜は只の余興。

少しの間、退屈を紛らわす為の玩具としてしか、価値を見出してないのだ。

聖杯も勝ち取れたら儲け物、その程度の考えだ。

つまり、この聖杯戦争で雁夜が勝てる可能性未\*など無かったのだ。



——だが、未来とは常に変動する——

——些細な切欠で、異なる未来<sup>先</sup>を導き出す——

——此<sup>別世界</sup>処は、そういった世界<sup>可能性</sup>の物語である——

——閉<sup>みたせ</sup>じよ。閉<sup>みたせ</sup>じよ。閉<sup>みたせ</sup>じよ。閉<sup>みたせ</sup>じよ。閉<sup>みたせ</sup>じよ。閉<sup>みたせ</sup>じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する。

雁夜は呪文を詠唱しながら、むかし好きだった御伽話の事を思い出していた。

その物語の主人公は人間じゃなかったが、圧倒的な強さで敵を倒す姿は子供ながらに憧れた。

——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。

特に好感が持てたのは、偶然で人間の少女を救った時の話だ。

主人公は人間じゃない為、始めは人の気持ちが理解できなかったが、  
その少女と心を通わすことよって感情が芽生え初め、  
最後は物の怪の身ながら人間たちの為に悪に立ち向かったお話だ。  
これを読んで昔は、正義の味方に憧れたものだ。

——誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。

何故いまになってそんな事を思い出したのかというと、  
此処に来る前にその絵本を偶然にも自室で発見したからだ。  
雁夜は懐かしさのあまり、絵本をこの場に持つて来ていた。  
そして絵本を読み直し、自分も桜にとつての救いになろうと改めて  
決意を固めた。

——されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に  
囚われし者。我はその鎖を手繰る者。

こんな救いの主人公ヒーローに自分はなりたい。  
でも、それを成し遂げる為の力が足りない……  
この時、雁夜は力を求めた。

彼は普段、桜を救い出すことと時臣に復讐する気持ちが混合して  
いるが、

この一瞬、純粋に桜を助ける為だけの救いの力を求めた。  
本来の物語で召喚されるサーヴァントは、湖の騎士ランスロットであつたかも知  
れないが此処は別世界。

ランスロット以外にもこの呼びかけに応える、物好きな  
サーヴァント英霊が居てもおかしくない。  
召喚される、絵本キッカケもある。

なら、この哀れで救いようのない雁夜弱者に手を差し伸べてやろう。

——汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ！

——この殺生<sup>強</sup>者<sup>者</sup>丸が！

雁夜の目の前には、見惚れるほどの美男子がいた。

膝裏まである長い銀髪、額に月の模様、頬に二本の紋様が入り、白を基調とした着物の上に鎧姿。

目を惹くのは右肩から長い髪と一緒にあって靡いている大きな毛皮。

腰には二振りの日本刀を差し、背中に野太刀程度の長さを持つ剣を所持しているのが判別できた。

そして、すべてを見通す様な切れ長の金眼には何者をも寄せ付けない、絶対者としての存在感。

肌で、五感で、感じ取れた……文字通り並の英霊とは格が違う存在だと……

雁夜は自身が呼び出したサーヴァントの存在に、只々圧倒され、

臓硯は計算違いの結果に大いに焦っていた。

一体何だ！ この化物は！

臓硯は自分<sup>化物</sup>と比べても、途方もない<sup>サーヴァント</sup>化物の存在に驚愕した。

500年もの時を過ぎた臓硯は、並大抵のことでは動揺しない自負があつたがこれには驚いた。

用意した触媒で呼び出せるのは、湖の騎士ランスロットか精々円卓関係の騎士しか

呼べないと踏んでいたが、まさか全く関係ない英霊を召喚し、

しかもそのサーヴァントが超一級の英霊だったことに臓硯は驚きを隠せなかった。

だが、それと同時に歓喜していた。

これはもしかすると本当に聖杯に手が届くかもしれない。

そんな事を考えた臓硯は、まずサーヴァントを操るために主である  
雁夜に命令を下そうとした。

そして、ここまでが臓硯の記憶している最後だった。

彼は、その生がいつ終わったのかも気付かなかっただろう。

その場に居た雁夜は全てを見ていた。

自分のサーヴァントが臓硯に向かって、腰に差している二振りの内  
の一本で臓硯を斬ったのを……

そして斬った空間が裂け、臓硯を呑みこんだ所を……

雁夜は理解できなかった。

一体、臓硯はどうなったのか？ 死んだのか？ あの刀は何だ？

それにあの空間が裂けたのは？ 何故？ どうして？

こんな考えばかりが、頭の中を堂々巡りしていた。

理解できないなら、教えてもらえば良い。

雁夜はそんな単純な思考に思い至り、純粋な気持ちでサーヴァント  
に聞いていた。

その時は不思議と恐怖を感じなかった。

「今のは……一体どうなったんだ……？」

それに対して、透き通った声でサーヴァントは丁寧に答えてくれ  
た。

「――彼奴から、邪気を感じた。故に、冥界へ魂を送った」

それはつまり……臓硯は死んだということか？

500年もの間、間桐を支配していた妖怪が居なくなったのか？

その結果を徐々に理解していった雁夜は、体から意識が抜け落ちて  
いくのを感じた。

今まで臓硯に対して常に気を張っていた為、その反動でこの身が安  
全になったと知ると、

体が休息を取る様にと急かして来たらしい。

それに、つい先ほど行った英霊召喚も体に随分と負担を掛けた様  
だ。

召喚の言葉で自分が呼び出したサーヴァントのことを思い出し、

どうしようかと消える意識の中 考えていたが『……後のことは、任せろ』と聞こえてきた。

それなら大丈夫かなと彼は考えるのを止めた。

少しの間だが、この使い魔サーヴァントなら信用できる。

雁夜には不思議とそんな感情が芽生えていた。

このサーヴァントは自分が望んだ通りの存在なのではないかと想ったからだ。

そんな事を考えながら、雁夜はその意識を落とした。

意識を失う一瞬、自分のサーヴァントがこちらに向かつて、

何かを言っている様な感じがしたが、雁夜には分からなかった。

『……言えない、臍臍の視線が気持ち悪かったから、反射的に切り捨てたなんて言えない……』

……色々と台無しであった……

## 訪れる悲劇（オリ主に）

### ——四魂の玉

犬夜叉  
原作の中枢を担う重要なアイテムであり、物語の根幹を成す真の黒幕。

物語の中では無数のかけらとなり、日本の至る所に飛び散った。

かけらの効力は多様に優れ、『能力向上』『病や外傷の抑制』

『死者蘇生』など一部は魔法の領域にまで及ぶ。

この効力は妖怪だけに留まらず、人間にも作用するため、

この玉を巡って人と妖は幾度となく争いあった。

玉は不滅とされており、かけらになろうとも再び玉に戻り、時空を越えて災いを撒き散らす。

言ってしまうと、無意識の災害。

いや、四魂の玉自身に自我があるので人為的な災害とも言える。

善悪の概念は無く、所有者の心に左右され、邪悪な者が持てば汚れが増し、

清らかな魂を持つ者が持てば浄化される特性を持つとされる。

願いを叶えるのは事実だが、持ち主の欲望を更に引き出させる為に、  
本来の願いだけは叶えない。

そして最後に、所有者が『正しい願い』を願った時、玉はこの世から消滅する。

——ここまでが原作犬夜叉に出てくる、四魂の玉についての大概かな詳細だ。

……はつきり言って悪質な詐欺もいいところだ。

『死者蘇生』などこちらの世界では魔法紛いのことをしておきながら、  
本当の願いは叶えないなど笑い話じゃないか。

これじゃあ、かけらを悪用したがる妖怪や人間が多く現れるのも寧ろ必然だと断言してもいい。

自分が只の人間だったのなら、何としてでも手に入れたと思う。  
今の私は<sup>殺生丸</sup>そう考えていた。

ん？ 私の名前か？

自己紹介が遅れたな、では改めて名乗りを上げるとしよう。

私は元人間、現大妖怪の殺生丸だ。

この世界に<sup>別世界</sup>転生して随分と永い時が過ぎたが、その間に様々な事が知れた。

結論から言おう、この世界は犬夜叉の世界では無いらしい。

初めの頃は原作知識を活かし優位に立ちまわろうと考えたが、時が経つにつれて、この世界は別世界じゃないのか考えを改め直した。

自分という異物が混入した時点で世界は変化するものと思っていたが、

どうやら根本的に間違えていた様だ。

——根源

物事の大本。

起こりや始まりを意味する言葉であるが、私が言いたいのは一般常識ではない。

——『魔術』と『魔術師』

……気付きたくなかった事実だ……

……ああ、これだけでは意味が分からない者も居るかも知れないが、

分かる者には理解できるだろう……

そう、何の嫌がらせかは知らないが、この世界は型月の世界らしい

……

かたつき……カタツキ？ 型月か？ ……型月だって？

……ふっ……ふざけるなあああ!! 何だよこれ!! 何な  
んだよ!!

この世界のことについて理解した瞬間、表れた心境の一部だ。

殺生丸のキャラが壊れないように表情には表さなかったが、内心は大いに荒れ狂った。

## ——TYPE—MOON

直訳すると「型月」と呼ばれ、生前において私が好きだった作品の一つだ。

作品同士の世界観を共有し、独自の発想で魔術の在り方や神秘を取り扱う物語で、

その中に出てくる魔術師たちは『根源』と呼ぶものを探求し続ける存在であった。

『根源』は渦と呼ばれ、万物の始まりにして終焉、この世の全てを記録し、

この世の全てを作れる、あらゆる出来事の発端とされる座標らしい。

魔術は根源の渦から分かれた流れで、魔術師たちにとっては

これを研究し最終目標である『根源の渦』にたどり着く事を目標としている。

その内容は私が知っている『型月』そのものであった。

それから独自で調べたりしてみたが、

やはりこの世界は型月の世界を基にした別世界だと判断した。

何故、そう考えたのかと言うと、自分自身の存在が一番の理由であるが、

他にも原作に登場した妖怪たちが何匹か居たためである。



私一人だけで有ったのならばただの型月世界だと考えたが、それ以外にも別のものが存在するというので有れば、

<sup>型月</sup>世界を基準とした別世界……平行世界だと考える方が自然だと私は思った。

そして、その考えは間違っていないなかった様だ。

この事を知り、私は型月関係の内容をなるべく記録する作業を始めた。

はつきり言つて犬夜叉の世界よりこつちの方が数段危険だったからだ。

抑止力から始まり、幻想種や吸血鬼である死徒二十七祖。

主人公たちが持っている「直死の魔眼」や「固有結界」など、

超常の存在であるこの身を打倒するかもしれない。

冗談じゃない！

もし本物の殺生丸でもO R Tや朱い月のブリュンスタッドたちと比べると形無しだ！

他にも色々と素で殺生丸を上回りそうな奴ばかりじゃないか！

これが分かった時点で私は可能な限り知っている事を記録しようとした。

しかし、此処が犬夜叉の世界だと思ひ込んでいた所為で、それ以外の記憶は既にうる覚えだった。

辛うじて覚えていた事は、F a t eの物語である聖杯戦争の事やそれ関係に加えて、

印象に残った人物の詳細程度だった。

それでも貴重な情報だったので、思ひ出した事は直ぐに書き記し、厳重に保管した。

次に目標にしたのは力を付ける事……つまり修行である。

まだこの世界についてよく知らなかった時から、可能な限り鍛錬を行ってきたつもりだったが、

全然ダメだったらしい。

この世界にはTUBAMEを斬ろうとして剣技が魔法の域に達したNOUMIN、

初見でかの騎士王を打倒したYAMASODATIなど色々とかシイな存在が居るので、

自分が行ってきた修行ではまだまだ成果を出すには至っていないかったらしい。

だから私は、其処から今まで以上 修行に力を入れていった。

ここで少し、殺生丸オリ主の力について説明するが、

彼は自身の力についてまだまだだと考えているようだが、

この時点で既に上から数えた方が早いほどの強さを誇っていた。

——秘剣・燕返し

佐々木小次郎がツバメを打ち落とそうとして編み出した秘剣。

『ほぼ同時』ではなく『全く同時』に放たれる円弧を描く三つの軌跡と、彼が持つ長刀、そして超絶的な技巧と速さが生み出す対人魔剣。

彼が目標にしている佐々木小次郎NOUMINは剣技だけで、魔法の領域に達した化物である。

かの騎士王や援護があったとはいえ、ギリシヤの大英雄をも退けた猛者だ。

技だけの境域で云えば、ヘラクレスですら連続の剣技が限界であった。

……まあ彼は、100頭のヒュドラを同時殲滅した弓矢とか持っている、

トンデモ英雄だから別に如何でも良いか。

『同時』と『連続』

似ているようで異なる二つの言葉。

連続攻撃は始まりがあり、それに続いて後の攻撃がやってくるもの。

対処の方法を簡単に言えば、最初の攻撃さえ強制的に止めてしまえばそこで攻撃は止まるのだ。

だが同時は読んで字の如く、全く同じタイミングで複数の攻撃がある。

一つ攻撃を止めて終わりではなく、これ全てに対処しなければならぬ。

……分かって頂けたであろうか？

彼は人間を越えた存在妖怪で在りながら、この技クラスを身に付けようとしているのだ……

……これについての話は、また何処かでしょう。

私はそんな風に、自身に出来る事引きこもり生活を試していく日々を過ごしていた。

だが、平和な日常を過ごしていたある日、終わりは唐突に訪れた。

——物語冒険が動き出したのだ——

——犬夜叉原作と他型月作品が融合した世界別世界——

——殺<sup>オ</sup>生<sup>リ</sup>丸<sup>主</sup>を軸とした 新<sup>オ</sup>た<sup>リ</sup>な<sup>リ</sup>四<sup>ジ</sup>魂<sup>ナ</sup>の<sup>ナ</sup>か<sup>ケ</sup>ら<sup>ス</sup>を<sup>ト</sup>巡<sup>リ</sup>る<sup>争</sup>いが——

あつ…因みに時代背景は紀元前だよ。

願いの達成、そして彼の名は…

——間桐雁夜は、物語を見た。

——物の怪が、人と妖 二つの姿を様々な時代に残していく記録

彼は夢を見ながら、この物語の主役である人物に顔を向けていた。  
長い髪と毛皮を風に靡かせる、召喚した時と何も変わらない姿で其  
処に存在した。

どれ程の月日が経とうとも、その存在は決して揺るがない。  
それが記憶を覗いて視た、間桐雁夜が語る、自分のサーヴァントに  
ついての評価だった。

彼は、どんな状況になっても決して屈すること無く、その勇姿を数多  
くの人々に魅せた。

どれ程の英雄たちが、彼の背中を見たのだろう。  
どれ程の人間たちが、彼に希望を見出したのだろう。

——彼が、小さな頃に憧れた姿が其処にはあった。

「……………んっ」

雁夜は辺りを照らす、朝日に目を覚ました。

寝ぼけている頭で周りを観察し、何とか此処が自身の部屋だと認識した。

そして、いま自分が見ていた夢が、召喚したサーヴァントのものだと理解した。

次に、自分の状況を整理し、召喚を行った際に気絶した事を思い出した。

「……臓硯は俺の記憶が正しいなら、サーヴァントアイツに殺された筈だ。

蟲たちが大人しいのも、臓硯支配者が居なくなつたから、俺に命令権が移つたのか」

そこまで考え、一先ずは安堵した。

だが雁夜はここで、一番に確認しなければならぬことを忘れていた。

彼の目的である、『間桐桜』の安否を確認していなかつたのだ。

原因は諸悪の根源である臓硯が死んだ事による、気の緩みだろう。

自身を罵倒したい気持ちを切り捨て、桜の確認を急ごうとした。

「待っていてくれ！ 桜ちゃん！」

確認の為に急ぎベッドから起き上がろうとしたその時、部屋の扉を開ける音が辺りに響いた。

視線をそちらに移すとそこには、心配した桜の姿があつた。

「桜ちゃん!!」

雁夜は急ぎ桜の傍らに近づき無事を確認したが、何処にも異常は見当たらなかつた。

寧ろ桜がこちらの心配している姿は、最後に顔を合わせた時より、表情が豊かになつたとすら思えた。

そしてこの状況は、桜が本当の意味で臓硯から解放されたのだと、理解させてくれた。

雁夜の目的である『桜を救い出す』ことは、既に果たされたのだ。

「雁夜おじさん、大丈夫？」

「……ああ、おじさんは大丈夫だよ、桜ちゃん」

こちらを心配してくれる桜の表情は、葵や凜と一緒にだった頃と比べると、

少し劣っていたかも知れないが、間桐家で再会した時に見た顔より、

よっぽど人間味溢れる表情だった。

今の桜を見て、彼は涙が零れ落ちそうだった。

『桜を助けない』

そのためだけに、今まで走り続けてきたのだ。

そして、間桐雁夜のささやかな願いは、いま此処に実を結んだ。

桜は、涙を堪え体を震わせる雁夜を見て、何処か痛いのかと勘違いし、

彼の頭を優しく撫でて慰めようとした。

その行いに彼は我慢していた涙が溢れてきてしまい、大人気なくその場に泣き崩れてしまった。

それに驚き、初めはオロオロしていた桜だったが、やがて先ほどよりも優しく、

まるで幼い赤子を慰めるように、彼の頭を撫で続けた。

この光景は、雁夜のサーヴァントが彼らを呼びに部屋を訪れるまで続いた。

大の大人が、少女に慰められている状態は、他者から見たら滑稽だったかも知れない。

だが、小さな救いを求めたこの男を一体、何処の誰が笑えるのだろうか。

何も知らない人間が、間桐雁夜の行いを笑う事は許さない。

後に彼のサーヴァントは、この光景を見てそうコメントした。

それを聞き、雁夜は恥ずかしさの余り、野垂れ死にそうになった。

だが、何よりも憧れの存在にそのように評価して貰えたことが嬉しかった。

現在、彼らは間桐邸の居間に集まっていた。

桜と雁夜は備え付けのソファに座り、殺生丸は二人の対面になる様に座っていた。

先ほどの光景を見られた雁夜は、恥ずかしく思い視線を下に向け、桜も少し頬を染めて恥ずかしそうにしていた。

そんな二人の姿を見て、殺生丸は少しだけ表情を柔らかくしていた。

別に、リア充爆発などと思っではない。

ただ、始め暗い顔をしていた桜が、このような表情を出してくれた事が純粹に嬉しかったのだ。

子供は笑顔が一番。

いま、殺生丸が考えている事はそんな所だった。

雁夜はこの空気に耐えかねて、わざとらしく咳払いをした後に話を始めた。

「召喚して直ぐに気絶してしまったから、お互いの自己紹介もまだだったよな。」

俺の名前は間桐雁夜、まずは礼を言わせてくれ。

臓硯を倒して、桜ちゃんを助けくれてありがとうございます」

「ありがとうございます」

二人は臓硯から解放してくれたことについてお礼を述べた。

それに対して殺生丸は、何気なく言葉を返した。

「——別に大した事ではない。」

ただ、彼奴が私を下賤な視線で見下したのが気に食わなかっただけだ」

「……そうか、なら礼はこれ以上言わない」

一先ず彼は、臓硯の話はここで一端 終わらせることにした。

終わったことについてより、まずは先に優先させることがあったからだ。

雁夜と殺生丸は、マスター聖杯戦争のサーヴァント魔術師と使い魔。



いつまでもノンビリとして居られないのだ。

そう考えて雁夜は、まずは桜を部屋に戻らせようとしたが、桜は頑として部屋に戻らなかった。

逆にその話し合いに参加させてほしいと提案してきたのだ。

桜は、臓硯から教えられていた。

雁夜が自分を助けるために此処間桐に戻ってきた事、

そして聖杯なる物を巡る殺し合いに参加する事も全て臓硯に知らされていたのだ。

教えられた当初 桜は臓硯の言いなりの人形だった為、別段何とも思っていないかった。

寧ろ何故、おじい様に逆らっているのだろうかと疑問にすら考えた。

それは、おじい様には敵いつこないと桜が達観していた所為である。

だが、それは仕方がない事だろう。

幼いその身を蟲に凌辱されて、精神が完全に壊れなかっただけでも桜は凄かったのだ。

普通であれば、ただ生きる人形と成り果てても不思議じゃなかった。

しかし、今はこうやって誰かの身を案じられる普通の少女に戻れた。

雁夜はもう、桜を魔術というふざけたものには金輪際、関わらせない事に決めていた。

故に、桜が聖杯戦争の事を知るのを避けたかったのだ。

桜は、自分の身を文字通り削って救おうとしてくれた雁夜が、これ以上危ない目に遭うのは見たくなかった。

二人は互いの主張を言い合い、意見を曲げようとしなかった。それを今まで黙っていた殺生丸が見かねて、話に割り込んできた。

「雁夜、桜の意見を通してやれ。その子はお前が考えているより強い」  
「だがッ！ 彼女はまだこども」雁夜おじさん!!「!？」

雁夜の言葉は、そこで遮られた。

その時、桜はその瞳に強い覚悟を宿して、彼を見つめていた。

「私ね……本当はまだ色んなことが怖い。

でもね、おじさんが何処か遠くに行く方が今はずっと怖い……。だからお願い、桜をもう一人にしないで……」

覚悟を決めたその顔は、次第に不安の顔つきになり、最後には涙を浮かべていた。

其処には、ただ家族の帰りを待つ、小さな少女の姿があった。

それを見て彼は、自身の敗北を悟った。

女の子にこんな姿をさせて、駄目だと言える人間では無いのだ、間桐雁夜と云う男は。

二人は話し合いの結果、このままの状況で話を続けることになった。

聖杯戦争の話に戻る際、雁夜はまず確認しなければならぬことを殺生丸に聞いた。

「今まで流してきてしまったが、そろそろお前の真名を聞かせてくれないか？」

臓硯が用意した触媒は、アーサー王伝説の円卓関係の聖遺物だった。

普通なら、円卓の騎士の誰かが出てくる筈なんだが……お前は違うよな？

一応、自分では既に答えを出しているんだが、お前自身の口から聞いてみたい」

今まで彼には聞き出していなかったが、サーヴァントの真名を彼は大体予想がついていた。

夢で見たあの光景、召喚の場に在った触媒以外の絵本<sup>物</sup>、そしてその特徴的な姿。

寧ろ召喚した時に気付かなかったのが、不思議でならない。

恐らく、存在感の方ばかりに目がいつてあの時は、頭の思考が停止していたのであろう。

故に、今ここで彼の正体を改めて知っておかなければならなかった。

「——私の真名か、そういえばまだ自己紹介の途中でもあったな」

そう言うと、彼は座っていたその場から徐に立ち上がり、雁夜を見下ろした。

その瞬間、雁夜には召喚した時の様な、威圧感オーラが殺生丸から向けられた。

だが、最初程には臆さなかった。

慣れ：ではないだろう、ただ彼がどれだけの存在であるか知識として、

そして夢を見て知っていたからだろう。

桜はそんな二人を交互に見比べた後、首を傾げていた。

どうやら、この威圧は雁夜だけに向けられているものらしい。

故に、彼は桜のことを気にせず、目の前の英雄に向かい会えた。

そして、いま現代にその姿を現した英雄は、静かに名乗りを上げた。

—— 我が名は殺生丸

—— 此度の聖杯戦争に召喚された、使い魔サーヴァントだ

—— 私クラスに役割など存在しない

—— 故に、私を呼ぶ際は殺生丸と呼べ

その名乗りは、聖杯戦争の参加者が聴いたら、驚きを通り越して呆れ果てていたでだろう。

まさか、クラスが無く、名を呼ぶ際は真名で呼べなど、参加者を馬鹿にしていると思えない。

だが、殺生丸<sup>英雄</sup>にはそれが許されるほどの力があつた。

彼は、大昔に砕け散つた秘宝の玉を完成させるべく、

世界各国に飛び散つた24個のかけらを永い時を掛けて探し出した。その過程で、彼は様々な英雄たちの叙事記や伝説に名と姿を残していった。

かけらを持った悪に立ち向かう為に他者と共闘し、ある時はかけらを悪用した人間の戦に参加し、

又ある時はかけらの所為で本来 起こりえるはずがない反乱を鎮圧したりなど、

活躍を挙げだしたら切りがない。

だが、それだけで彼が大英雄になつた訳じゃない。

人々から英雄と呼ばれるのは、彼がいつも弱者の味方だったからだ。

——悪を許さず、善を為す

本来、性質的に人類の天敵である存在の彼が何故、人々に味方したかは正確には分かっていない。

一説によると、幼い少女を救つたのが切欠だったと伝えられているが本当の処は伝わっていない。

だが、彼が歩んで来た歴史は、確かに人類を守るかのように刻まれ続けていた。

故に、人々は彼を魔物と知りながら、その偉業から英雄と称えたのだ。

『いや、四魂の玉はマジヤバいって。えっ、それなら探しに逝け？  
ハッハッハ、君は何を言ってるのかな？ ……えっ、母上が仰つたの  
か？ いやいや、嘘はついちやダメだぞ。お兄さん、そういうのには  
厳しいからね？ なに？ 母上からの手紙だと？ おいおい、これは手  
が込んだ冗談だな。まあ、ここまでやっただから、手紙の一つ位は  
最後に読んで上げようじゃないか。なになに、（拝啓、親愛なる息子  
殺生丸へ、妾は四魂のかげらなる物の噂を耳にしたのじやが、これを  
集める旅をお主の試練にしようと思つたのじや。彼奴も私の息子な  
らきつとやり遂げてくれると、妾に賛同してくれたので当分の間は、  
この地に帰還するのを禁止とする。追伸、もし何も成果を挙げずに  
帰ってくるようであれば……分かつているな？）………嘘だと  
言つてよ、母上………』

——この時より、殺生丸の永く険しい戦いの歴史が幕を上  
げた——

………この物語………無事に続くかな？

変わらない誓い

——とある住宅の一室

「えー、みたせ、みたせ、みたして、みたせつと。

繰り返すつどに五度……あれ？ 四回じゃ駄目か。

五回って書いてあるし、増やしてみようかな。

みたせ、みたせ、みたして、みたして、みたせつと、よし今度はバツ

チリ！」

そう言つて、古めかしい書物を片手に一人の男性が居た。

彼の名前は、雨生龍之介。

容姿はオレンジ色の髪が特徴の、20代前半の青年である。

龍之介がいる此処は、彼の自宅ではない。

友達の家でも、ましてや彼女の家でもない、全くの赤の他人の家。

何故、彼は他人の家に居ながら、其処に住んでいる住民に何も言わ

れないのか？

彼らは何も言わない。

正確に言えば、既に言えない状態なのだ。

彼らは、人としての生が終わっている。

つまりは死んでいるのだ。

誰が彼らをこんな風にしたのか？

勿論、この場に居ながら平然としている、この男龍之介がこの惨状を生み出したのだ。

彼は、日本各地を転々としながら殺人を繰り返してきた、

連続殺人犯であり、その犯行は40以上にも及ぶ。

いま、彼が行っているのは聖杯戦争でサーヴァントを召喚する詠唱の呪文だが、

龍之介は参加者ではない。

厳密に言うと、魔術師でもない。

彼は、魔術回路があるだけの一般人なのだ。

ならば何故、彼は聖杯戦争の召喚魔術などを詠唱しているのか？

龍之介がこんな事をしている理由は、ただ悪魔に会ってみたかったからだ。

彼が、実家の土蔵から古文書なる物を偶然にも発見し、

そこに書かれている召喚呪文を悪魔を呼び出す何かだと勘違いしたのが始まりだ。

もしかしたら、悪魔は居るのかも知れない。

もし、居るのなら会って話をしてみたい。

この古文書を見つけた時に、彼はそんな事を考えた。

そして、龍之介はそんな考えの下にこの惨劇を引き起こした。

今の彼は、殺害した夫妻の血液で召喚魔法陣を描きつつ詠唱をしている最中だった。

そんな彼に、荒い息遣いが聞こえてきた。

夫妻には、まだ小さな少年が居た。

少年は親を目の前で殺されていながら、まだ生きていた。

正確には龍之介が親と一緒に殺さず、縄で縛ってその辺りに放置しているのだ。

龍之介は悪魔をホントに召喚できた際には、

何か供物を奉げなければいけないのでは……と考えていた。

その場合、何をプレゼントしたら喜ばれるかを彼は考えた。

そして龍之介は、贈り物をコレ子供に決めたのだ。

「ねえねえ？　ぼーやは悪魔ってホントに居ると思う？」

彼は人を殺したとは思えないほどの気軽さで、子供に話掛けた。

「テレビとか新聞でさあー、俺の事を悪魔呼ばわりしたりする人たちがいるんだけど、

それってさあ、本物の悪魔が居たら失礼な話だよな？」

そうやって彼は、少年の傍に寄っていったが彼の体は震えていた。

当然だろう、いつもの日常を過ごしてきたら、唐突に訳も分からない内に親を殺され、

居るかどうかも知らない悪魔の生け贄にされる等、こんな地獄があ

るだろうか？

少年にしてみれば、居るかも分からない悪魔より目の前の龍悪魔之介に恐怖するのは当たり前である。

だが、龍之介はそんな彼の心境などお構いなく話を続ける。

「だからさあ？　偶然にも家の土蔵で発見しちゃった、この古文書に書いてある呪文でさ、

ひとつ本物の悪魔悪魔って奴を呼びだそうって考えた訳よこれが！」  
少年にとって、この男は一体何の話しているのか理解できなかった。

言葉が通じないなどの話じゃない。

龍龍之介之介がホントに自分と同じ人間なのかも、今の彼には分からなかった。

だが、そんな彼でもこれだけは理解できた。

「でも、ホントに悪魔悪魔って奴が出て来ても茶飲み話だけってのも味気ないじゃん？

だからさあぼーや……ここはひとつ殺されてみてくんない？」

自分は此処で死ぬのだと。

その瞬間、彼は塞がれた口からあらん限りの声を上げた。

……死にたくない！

……まだ自分は、死にたくない！

それだけを、今の彼は考えた。

その必死に生きようとする彼の姿に、龍之介は爆笑していた。

「はっはっはっはっ！　悪魔に殺されるのってどうな体験なんだろうね！」

龍之介が少年の反応を楽しんでいたその時、

彼の右手に痛みが走り、三画の聖痕が浮かび上がった。

彼はこれが一体何なのか考えていると、魔法陣の方から眩い光が差し込んできた。

その光景に彼は言葉を奪われていると、光の中から一体のサーヴァント悪魔が姿を現した。

「問おう。我を呼び、我を求め、キャスターを依り代に現界せしめた



マスター  
召喚者。

貴殿の名を此処に問う。祖は、何者なるや？」

それは異様な風体をした存在であった。

着ているローブは古めかしく、長身で在りながら体を大きく曲げて自身を小さくし、

カエルめいた異相をした悪魔というより、絵本にでてくる黒魔術師などに見て取れた。

これに対し龍之介は、何か答えなければと思いい言葉を発した。

「……ああー、えっと、名前は雨生龍之介です。」

職業フリーター、趣味は人殺し全般、子供とか若い女が好きです」

通常この様な自己紹介をされれば色々と問題が生じるが、サーヴァントは普通では無い。

寧ろ、その龍之介の解答はこのサーヴァントにとって、正しい正解であったのかもしれない。

「よろしい、契約は此処に成立しました。貴殿が求める聖杯は私も悲願とするもの、

かの楽園の釜は必ずや我らの手にする所でしょう」

「……せい……はい？」

龍之介はキャスターが言っている事の意味を、

余り理解していなかったがそこは如何でも良かった。

そこで、悪魔？に奉げる生け贄を用意してた事を思い出した。

「あっそうだー！ アレ、アンタの為に用意したんだけど、食べない？」

キャスターが視線を向けたその先には、先ほどまで恐怖に怯えていた少年が居た。

少年もその視線に気づき何とか逃げ出そうと試みたが、子供の力では到底抜け出せなかった。

キャスターはそれを見て何かを考えた後、懐に手を入れて奇妙な本を取り出した。

「あっ！ それ人間の皮で出来てる奴でしょ！」

人は殺し続けてきた彼だからこそ、すぐに分かったのだろう。

だがそんな彼の言葉を無視して、キャスターは龍之介が理解できない言語を

少し呟くとその本を懐に締まってしまった。

次にキャスターが行った事は何と、少年の縄を解き始めることだった。

これには少年も驚いき、また龍之介も驚いた。

てつきり殺されるのだとばかり思っていた少年は、困惑した表情でキャスターを見た。

「――怖がらなくていいんだよ。坊や立てるか？」

キャスターの言葉に少年は頷きで返事をした。

彼は子供の動作に微笑みで返し、言葉が続けた。

「さあ坊や、あそのこの扉から部屋の外に出られる。周りを見ないで、前だけを見て、

自分の足で歩くんぞ。――ひとりぞ、行けるね？」

少年は流されるようにその扉を開け、そして明るい廊下の先に出た。

その行動に今まで黙っていた龍之介が声を上げようとしたが、

それはキャスターに止められ出来なかった。

キャスターは分かっているのだ。

この少年は此処で自身が操る水魔に、その短い生を終えるのだと  
……

此処で少年は死ぬ。

間違いではない。

間違いではないが、それは正しくもない。

世界とは都合が良い事も、悪い事も含めての世界なのだ。

物語で囚われたお姫様が、悪者を退治する勇者に助けられるのは王道すぎるのか？

いや、王道の何が悪い。

物語の定番だからと云って、それが在り来たりだから駄目なんて誰

が決められた？

そんなの、作者世界が決める事だ。

とある世界の主人公はある作家の英霊に、この物語は「書きたいもの」なのかと問うた。

『バツカ、そんなものオマエ、「書きたいもの」に決まっているだろう!!』

彼はこう言って退けた。

……まあ、彼の楽しみ方はちよつと、変わっていたかもしれない。だが、言いたい事は概ね同じだ。

描きたいものを書く、正しくその通りだと。

——さあ、別世界物語の続きを話そう

少年は廊下に飛び出した後、玄関先から溢れてくる光に目を細めた。

生きてる……その実感を噛み締めながら、彼は一步一步前に歩いていく。

その時、音が聞こえた。

何気なく後ろを見やると、目の前に何かが居た。言葉で表せない何か、其処には存在した。

——あつ、死ぬんだ

何故か少年は、そんな感情が出た。  
唯々、分かってしまったのだ。  
今からコイツに、殺されるんだな……と。

——なら、もういつか……

少し、遅れてしまったが家族が居る場所<sup>天国</sup>へ。

少年は、その瞳を閉じた。

……

……

……

………？

何時まで経っても、少年に魔の手が来ない。

少年は、恐る恐る閉じていた目を開けると其処には……

——白い、モフモフだった

???

少年は困惑した。

形容し難いものが消えたと思ったら、代わりに白いモフモフが在る  
状況に

困惑するなという方が無理だろう。

だが、よく観察するとそれは自身の目の前に立っている、  
大きな人の肩から垂れ下げているものだと理解できた。

こちらの視線に気付いたのか、その人はゆっくりと身体を反転させ、その全貌を魅せた。

白い。

少年の感想はそんな処だ。

その人間離れた美貌も、腰や背中に差している刀も目に入らず、白い着物、白い髪、白いモフモフ。

白色にしか、少年の視線はいかなかった。

そんな、子供の呆然とした顔を気にせずとその人物は、少年をそつと抱いた。

少年は一体何事だと焦ったが、次の瞬間には睡魔に襲われていた。彼には理解できないだろうが、これは簡単な催眠魔術の一種だ。

魔術に対抗する術がない一般人には、すぐ効く代物だった。

現に、少年の意識は残り僅かとなっていた。

そんな彼の耳に『これは全部、悪い夢だ。次に起きた時は、全てを忘れて日常に戻ると良い』と

優しく聞こえてきた。

——そうか、これは悪い夢なんだ

少年は、すんなりとこの暗示に掛かった様だ。

これも一般人には効くのだろうが、このような衝撃的な出来事は、早々忘れられないだろう。

一端、忘れたとしてもいつの日か思い出してしまうかも知れない。

こればかりは、この少年の心を信じよう。

そう願いながら、白い人物はその魔術を掛けた。

そして、ここで少年の意識は完全に失った。

——さて、ならここからはサ<sup>殺</sup>ーヴ<sup>生</sup>アント<sup>丸</sup>のお仕事だ

雨生龍之介は困惑していた。

子供を逃がしたのもそうだったが、目の前にいきなり現れた殺生丸の登場にも困惑した。

そして、殺生丸が登場した辺りからこつちのキャスターの様子も変だった。

キャスターが変だったのは、ただ歓喜していたからだ。

共に戦場を駆け抜けた戦友と時空の果てに出会えた奇跡を。

「ああー、ああー、ああー！ 会いたかった！ 私は貴方に会いたかったのですよ、殺生丸!!」

「——お前は、ジル…なのか?」

「ええー！ ええー！ ええー！ 貴方とジャンヌと共にあの大地を駆け抜けた、ジル・ド・レエです!!」

——ジル・ド・レエ

聖女ジャンヌ・ダルクと共に、百年戦争の終結に貢献した『救国の英雄』とも呼ばれ存在だが、

彼女が異端として処刑されたことで精神を病んだとされて、

子供を次々と拉致しては凌辱・惨殺するという所行を繰り返し、

後の世の童話『青髭』のモデルとされた人物だ。

「ああー、貴方と共にこの聖杯戦争戦を戦えるとは、私にとって何と幸先が良いのか!」

ジル・ド・レエは殺生丸が自分の下に、聖女を救うこの戦いの為にその姿を現してくれたのだと信じて疑わなかった。

だが、殺生丸は端からそんな事を考えて、この場に来たのではないかった。

彼は、ただ嘗ての友の姿を取り戻しに来ただけなのだ。

殺生丸は、今迄蚊帳の外であった、ジルのマスターである龍之介に近づくと、

彼が何かを言う前に令呪が浮かんでいるその右手を斬り落とした。

「……………」

彼は自身に何をされたのか理解しきれなかった。

英霊の、それもこのクラスの達人となると相手に斬らせたことにも気づかずに

終わらせることが出来る。

次に気付いた時は変な切れ目が入った空間に飛ばされた後だった。

彼も、臓硯と同じように自身に何が起こったのか正確に理解しきれないまま、

その生に幕を下ろした。

これを目の前で見ていたキャスターも理解しきれなかった。

何故、彼は私のマスターを殺したのだろうか？

そんな事を考えている間に、殺生丸は次の行動に出ていた。

話は変わるが、ここで殺生丸は魔術を使えるのかという質問については、イエスと答える。

先ほどの少年を魔術で眠らせたのも彼である。

彼が魔術を学んだ最初の経緯は、正直しようもない理由であった。

……旅をするにあたって、言語の壁は厚かった……とここでは言わせて貰おう。

その後も、元気な宝石のゼル何とかさんに御節介にも色々教えて貰い、

結構なレベルをマスターしているとか。

……まあ、その所為で赤い月関係に巻き込まれて、

本気でアイツ殺そうかなと考えてみたりしたとか e t c …

つまり、彼はこの令呪をマスターを介さずに、強引に使用する術を持っているのだ。

彼は龍之介の令呪を使い、キャスターにある命令を下した。

「令呪を持って命ずる。キャスター ジル・ド・レエよ、英雄ジル・ド・レエとしての誇りを取り戻せ」

それを聞いたキャスターは驚愕した。

「何故、そのような事をするのです！ 殺生丸!!」

だが、殺生丸はその問いに答えない。

「次に第二、第三の令呪を持って、これを永遠のものとする」

令呪とは、サーヴァントを御する三回だけの絶対命令権。

それは魔法の域に分類する空間転移ですら可能にする、大魔術の結晶。

対魔力のスキルで多少はサーヴァント側でも対抗する事が出来るが、基本的には絶対服従である。

そして、令呪は方向性が定められた命令に対しては絶大な効力を発揮する。

三つも重ね掛けしたともなれば、それは絶対の掟となる。

「何故っ！ 何故っ！ 何故っ！ 何故なのですっ！」

セエエシヨウマアルウウーリーーッツツツ!!」

青髭ジル・ド・レエは何故友が裏切ったのか、最後まで理解しきれなかった。

殺生丸が彼らと最後に顔を合わせたのは、聖女も健在していた時期である。

その為、厳密に彼は青髭ジル・ド・レエと顔を合わせたことは無いのだ。

……だがたとえ、姿形が友に近しくてもそれは彼にとって、もはや別人でしか無かった。

もし、救国の英雄と呼ばれた彼が、あの姿を見たなら必ず止めてくれと私に言った筈だ。

それが分かっていたからこそ、彼は令呪をそのような形で使い果たしたのだ。

青髭ジル・ド・レエ  
英雄ジル・ド・レエ  
自分分のかしる。自分分のかしる。



それが、共に戦場を駆け抜けた友に対する、彼なりのやり方であった。

そして、令呪の効力が全てキャスターに行き届き、

殺生丸の目の前には正しく戦場と一緒に駆け抜けた時の、友の姿が其処には在った。

英雄ジル・ド・レエは、こちらを乾いた笑みを浮かべて見つめていた。

「——久しぶりですね、わが友 殺生丸」

「——些か以上に寝覚めが遅いぞ、ジル」

本来、人と妖では時の流れが違う為、奇跡でも起きない限り再会など有り得ない。

だが聖杯戦争<sup>此</sup>は奇跡<sup>此</sup>の場、その程度のこととは造作もない。

故に、この再会は寧ろ必然であったかも知れない。

——500年以上の時を超えて再会した、人間<sup>友</sup>と物の怪<sup>友</sup>の姿が此処には存在した——

……このフレイズ的に、普通は男女の再会だよね……聖女とかさあ  
……作者<sup>俺</sup>って、ほんとばか……

## 桜の起点、最強対最強

——間桐桜は空虚だ。

それは生まれた時から……と云う訳では無い。

彼女がこうなったのは勿論理由がある。

——間桐臓硯

人の形をした畜生であり、永き時を一人過ごした哀れな蟲。  
そんな彼にも、初めは人として立派な夢を持っていた。

——正義の味方

しかし、数えるのも馬鹿らしい時の狭間にその夢は置き去りにされ、想いは風化していった。

……臓硯の最後が、正義の名を背負った彼殺生丸に倒されたのは皮肉だったろう。

桜は、そんな害虫に成り果てた蟲臓硯に改造と云う名の凌辱を受けさせられていた。

幼子に耐えきれぬものではなかったが、桜は己を無くすことで心の崩壊を免れた。

これは、そんな彼女が正義殺生丸の味方に出会った時のお話。

——時は臓硯を滅し、雁夜が気絶した場面にまで遡る。

「(……えっと、これの名前はカリーだっけ？」

聖杯戦争に、こんな願い救いを持って参加するもんだから、ノリで呼びかけに応えちゃったよ」

殺生丸は世界に名を知られた、大英雄。

過去3回の聖杯戦争全てに於いて呼び出されたが、それに応じることは一度たりともなかった。

殺生丸を呼び出そうとした魔術師マスターは、

己が欲を満たす為だけに彼を使役しようとした所為である。

そんな、願望だけの輩に手を貸すほど彼は聖人では無いのだ。

だが、それは無茶な話である。

聖杯戦争に参加するにあたって、優勝の品である聖杯を欲さずに何を欲せいいのか？

彼を召喚するのは、実はそう難しくは無い。

寧ろ、雁夜が召喚したようにその辺りで売ってある、

彼に纏わる絵本でも召喚することは可能なのだ。

世界中に名を知られている、彼だからこそできる荒技だ。

しかし、呼び出すには一つだけ条件がある。

彼に気に入られる、ただそれだけだ。

だが、これが一番難しい。

まず、魔術師はその存在からして彼にはあまり好まれていなかった。

彼の師匠の所為でもあるが、何より自分たちの子供を道具か何かの様に扱う

その在り方が気に食わなかった。

魔道の家系は、代を重ねて根源へと至る。

一般人からしてみれば、それは唯の呪いと変わらない。

子も親も関係なく、後に続く者に魔術を託していくその姿に、彼は共感出来なかったのだ。

彼は魔術を扱うが、その在り方は魔術師としてではなく魔術使いとしてだ。

故に、魔術師らしい魔術師の召喚に彼は決して応じない。

でも、だからこそ雁夜の召喚には承諾したのだ。

聖杯を求めるのは目標達成の為に必要だったから。

魔術はただ、聖杯戦争に使うから。

何より、大切な存在をただ救いたい。

今迄、彼を呼び出してきた魔術師の中では、雁夜は最高だったのだ。

故に、殺生丸は彼の救いを求めた召喚に応じたのだ。

彼は召喚に応じたが、キモい視線に耐えきれずに臓硯を斬った事を多少後悔していた。

『やべー、マスターの家族 斬っちゃたよ』と焦った彼だが、

雁夜が嬉しそうに気絶したのを見て、別に問題ないかと逆に開き直った。

寧ろ、『自分が斬ったのが間桐臓硯だったら俺偉くね?』と若干誇っていた。

そして、マスターを安全な場所へ運ぼうと彼が考えていたその時、周りに音が響いた。

蟲。

見渡す限りの蟲、蟲、蟲。

支配者たる臓硯が居なくなり、制御下を一時的に離れてしまった所為だろう。

奥に潜んでいた、大量の蟲が蟲蔵の至る所にその姿を現した。

殺生丸は此処が工房だからこんなに臭いんだと、思考を少し残念な方向に考えていた。

だが、彼はその光景を見て固まった。

殺生丸の外見は冷徹で物事に動じない様に見えるかも知れないが、中身は違うのだ。

ビビりな彼が、見た目男性器に似たキモい蟲をこんな大量に見たら……分かるだろう?

彼は無意識の内に鞘から抜いていた妖刀鉄碎牙を、躊躇なく蟲たちに振り抜いていた。

いまの彼には余裕がないのだ。

心境で表すと、

『きもいきもいきもいきもいきもいきもいきもいきもぬいきもいきも

いきもい』

唯々、気持ち悪かった。

桜は、雁夜が地下へ降りて行ったのを見て、今日は何かが起こるのだと感じていた。

故に、今日はベットに入ってもあまり寝付けていなかった。

そんな桜の下に、ゴゴゴゴと云う振動音が響いてきた。

これを聞いた彼女は、一体何が起こったのかと地下へ足を運んだ。其処で桜が見たものは、部屋が半壊し自身をいつも凌辱していた蟲たちが、

無様に瓦礫等といった物に押しつぶされている光景であった。

彼女は、此処で一体何が起こったのだろうかと良く辺りを観察してみ、

部屋の中央に雁夜を背負った、綺麗な存在が立っていたのに気が付いた。

こんな地下には光など入らないと云うのに、

その存在にはまるで月のスポットライトが当たっているかの様な錯覚を彼女は受けた。

彼は、桜の気配を察して雁夜を抱えながら彼女の傍まで飛んできた。

その姿はまるで、物語の一説を観ているかのように感じさせた。

間近に迫っていた彼は、桜に『——この者を休ませたい、部屋があるのなら教えてほしい』と

律儀に訪ねてきた。

この問い掛けに桜は正気を取り戻し、彼に雁夜の寝室の場所を教え

た。

『——感謝する』とその存在はその場を後にした。

桜はその去る背中を、ただ眺めていた。

害虫駆除は良いね！

そんなお気楽に物事を考えながら、雁夜を教えられた寝室のベットへ寝かしつけた。

部屋を余り壊さず、虫たちだけを殲滅した自身の手際の良さに感心していると、

此処に来るまでに出会った、一人の少女とワカメハヤーのお兄さんのことを思い出した。

ワカメの方はこつちを見てギョツと目を見開いた後、恐る恐る何が起こったのかと問うてきた。

親切に蟲駆除をしないといたと告げた時には更に目を見開き、

何かのお礼を言って家の中を弄った後に家を飛び出していった。

アイツは何だったのだろうか？

原作知識もあやふやで、いまの彼は主要以外の人物を特定する事が出来ていなかった。

だが、もう一人出会った女の子。

彼女のことは分かった。

自分と呼んだマスターが、一番に救いたいと願った存在。

原作知識を補う為に大昔に書いた、書物に載っている人物。

——間桐桜

彼女を救うことが、雁夜の使い魔<sup>サーヴァント</sup>としての仕事だと理解した殺生丸は、

まず彼女の情報を集めることにした。

最初に、魔術で負荷が掛からない様にマスターの記憶から彼女のこ  
とを読み取った。

……え？ プライバシーの侵害？ そんなの知らん。

次に、始末した蟲<sup>臓</sup>の部屋にある彼女の資料、

先ほどの蟲蔵に残った残留思念の読み取りなどを行い大体の情報を集めた。

そして、彼女が居る寝室に会いに行った。

場所は匂いで分かる……変態とかじゃないからな！

桜は先ほど会った白い存在のことを思い出しながら、自分の寝室に戻っていた。

一体、彼は何者だったのだろうか？

そんな彼女の気持ちに応えたのか、丁度良いタイミングで殺生丸が訪ねてきた。

「……すまない、先ほどの者だが少し話をしないか？」

何だか、女性を口説くような口調だが桜はそんなこと気にしない。

彼女には迷いも少しあったが、それでも話をしてみたくて部屋に彼を通した。

「……どうぞ入ってください」

「失礼する」

そう言って、入ってきた彼の姿に桜は緊張した。

元々彼女は、姉の遠坂凜と違い少し引込み思案な性格をしていたので、

初対面のしかも大人の男性と会話するというのは、彼女にとって勇気がいる行為だった。

それを瞬時に察したろり：ゲフンゲフン、殺生丸は彼女を落ち着かせる様に優しく頭を撫でた。

それに対して、彼女は初めビクツと身体を強張らせたが、

次第に体の中が何だか暖かくなっていく気持ちになった。

それを感じた殺生丸は、撫でるのを止めて彼女と会話できる様に少し距離を離れた。

桜は、撫でる手を名残り惜しそうに見つめていたが、話をすることを思い出し慌てた。

その姿に殺生丸は微笑ましく感じながらも話を始めた。

「——お前の名は、間桐桜で間違いないか？」

「……はい、私の名前は間桐桜です。——貴方は一体、何者何ですか……？」

「私は……そうだな、彼奴……雁夜の知り合いだとも思ってくれ」

「……？ 貴方は、雁夜おじさんのお友達なんですか？」

「ああ、少々厄介ごとが起こった故、彼奴を手伝う為に此処へ来た」

嘘は言っていない。

厄介ごと 聖杯戦争を片づける為に、マスターサーヴァント 彼の手伝いが来たのだ。

そしてこれは、事前に決めておいた受け答えの返答だ。

だが、次に状況を理解させる為に、直球で彼女にあることを教えた。

「——桜、まずは落ち着いて聞け。お前の爺である間桐臓硯は、私が殺した」

「……………え？」

桜は彼が言っていることが、理解出来なかった。

彼女にとつての臓硯は絶対者。

逆らっても敵いつこない存在。

今迄の仕打ちの所為で彼女は、臓硯には誰も勝てないと考えてしまったのだ。

でも、臓硯は桜の下に顔を出していなかった。

蟲蔵があんな有様になって、彼が姿を現さないなんてあり得るのか？

桜はここで初めて、希望を見出した。

だが、直にその考えを捨てた。

やっぱり、お爺様が殺されるなんて在り得ない。

彼女に根付いている感情はそう簡単に取り除けるものでは無かった。

そんな桜を見て、殺生丸は突然彼女を抱きかかえた。

「キャッ!!」



桜が驚いているその隙に、部屋の備え付け窓から彼女を抱え外に飛び出したのだ！

これには桜も恐怖して目を必死に閉じ、体に訪れる衝撃に耐えようとした。

……

……

……

………？

だが、彼女が予想した衝撃が何時まで経っても来なかった。

何故かと思い、恐る恐る目を開けると其処には、満点の星空が視界一杯に広がった。

彼女たちは、空に浮いていたのだ。

冬木の街並みを一望できるほどの上空に身を漂わせながら。

「……うわぁー、お空飛んでるー」

桜は、自分たちが空を飛んでいる事実に若干だが、喜んでくれているようだ。

殺生丸も彼女を無理やり連れ出すのは後ろめたさがあったが、

子供にはコレ空中浮遊をしてやるのが、一番効果があると経験から分かっていたのだ。

「――桜」

「ハイ、何ですか？」

桜は返事をしながら、殺生丸が抱えている腕から外の風景を一生懸命見ようとしていた。

声は平坦気味だったが、そこには確かな喜びの感情があった。

彼女にとって、この景色は随分と気に入ってくれた様だ。

殺生丸はそんな彼女の姿を微笑ましく思いながら、先ほどの事実を

もう一度述べた。

「——お前は……もう自由なのだ。」

誰かに縛られる生は今宵を以て、終わりを迎えた。  
故に、いま一度——真実を伝えよう。

——間桐桜。お前は、自由な風になったのだ」

「……………」

「……………」

それから……どれ程の時が経ったのだろう。

数秒か、数分か、或いはもつと時間が経過したのかもしれないが、いまの彼らには関係なかった。

ただ、幼子の永く辛い悲しみがやつと終焉を告げた。

いまは、その事実さえ在れば良いのだ。

「……ホントに……終わったんですか？」

「——ああ、終わったのだ」

その問いを最後に、腕に抱いている少女から震えを感じた。

自身が悪夢から解放されたのだと、ようやく実感できたのだ。

今宵の冬木の空には、一人の少女が涙を流しながら、己が運命の始まりを感じた。

そして少女の傍らに寄り添う、白き妖犬も彼女の喜びを心の底から祝福した。

——遠坂邸

『地を這う虫けら風情が、誰の許しを得て面を上げる？』

其処には、目も眩む様な黄金のサーヴァントが存在した。

彼の手により、いま正にサーヴァントが一騎脱落する瞬間であった。

『（マスターは、サーヴァントを……恐れることはない……だと！）』

その思考を最後に、一人の暗殺者<sup>サーヴァント</sup>は脱落した。

……したかに見えた。

だか其処に突如、白銀のサーヴァントが姿を現したのだ。

彼はその生を終えようとしたアサシンに歪な刀で斬りかかり、

その後にもまた別の刀で今度は、別空間に繋がる空間の割れ目を発生させて、

彼を其処に放り込んだ。

この有様をアサシンの言峰綺礼<sup>マスター</sup>は呆然とした形で受け止め、

その協力者である黄金のサーヴァントの契約者<sup>マスター</sup>、

遠坂時臣は驚愕した面持ちでこの場面を覗いていた。

彼らにとってこれは唯の茶番劇。

他陣営に、自身の力の誇示を示すと共に師弟同士である自分たちの関係を、

これで立派な敵同士だよ……と相手に分かり易く教える為の云わばデモンストレーションなのだ。

他にも脱落者として言峰綺礼<sup>彼</sup>を教会に置き、

残ったアサシンのサーヴァントで敵情視察するなど云った戦略があつたが、

いまはそれ処では無くなった。

まさか、コレにサーヴァント<sup>茶番劇</sup>が顔を出すなど誰が予想するものか。

遠坂時臣は一切、予想して無かつた。

彼は、基本的にうっかりだからね！

そして今、この場には二騎のサーヴァント<sup>強者</sup>は互いを自己主張するが如く、

その存在感を露わにしていた。

方や黄金。

もう一方は白銀。

両者は独特の光<sup>オーラ</sup>を発しながらも尚、その存在感は色褪せていなかった。

最古の王は敵対者に、自身の唯一の朋友にも比例する強さを明確に

感じ取り、

白き妖犬は絶対者に、自身を打倒しうる可能性を瞬時に悟った。

世界最古の王、半人半神、人と神の楔を外す者。

世界の観測者、幻想の祖、正義の体現者。

両者を表せる言葉など、星の数ほど存在する。

それでも両者を一言で現すなら、絶対者。

他に類をみない程の存在。

これ等に並び立つ存在と云えば、かのギリシャの大英雄やインドに於ける施しの英雄位のものだ。

何の冗談か、初戦で超級同士の戦いがいま幕を上げようとしていた。

「……」

「……」

黄金の王は、その顔を愉悅に歪ませながら、敵に笑みを浮かべる。

「――聖杯戦争とは、敵対者の真名を暴くことが醍醐味だと思ったが、

貴様の存在感では隠す意味が無いな『救世主』」

対し、白銀の獣はその顔に冷徹の表情を浮かばせながら、敵対者に警戒する。

「――それは、こちらのセリフだと言わせて貰おう『裁定者』」。

貴様ほどの輝きをもつ存在は、永き時を過ごした私でさえ見たことが無い」

その言葉に彼は、鼻で嗤い飛ばした。

「戯け、我に並び立つ存在などこの世に居るものか」

「然り、その傲慢な態度は貴様だからこそ許される代物なのだろう」

この肯定は事実そうなのだから仕方がない。

――英雄王ギルガメツシュ

古代メソポタミア、シュメール初期王朝時代のウルク第1王朝の伝

説的な王。

人類最古の英雄譚『ギルガメツシュ叙事詩』の主人公。

彼の後に世に出回った物語は、彼を原典にしていると言っても過言ではないのだ。

そして圧倒的的神性を持つ半神半人であり、最古にして世界の全てを手中に収めた英雄王でもある。

「その不敬な態度も今は許そう。」

貴様ほどの男にそう目くじらを立てるのは、私の沽券に関わるからな」

「——その心使いに感謝を述べよう、英雄王」

「——だが、貴様程の者を手ぶらで還す訳にもいくまい。」

私の獲物である雑種アサシンを、貴様の所為で取り逃がしてしまったばかりだ。

故に、お前の首級か、財宝四魂の玉、或いは宝具天下三剣でこの件は手打ちとしよう。

そら？我にしては寛容であろう？」

傍若無人の塊である様な英雄王が、この様に言うのは確かに破格の条件である。

しかし殺生丸には、今の彼が求めている物はそんなものではないと理解できていた。

場を支配する死の気配が、先ほどよりも濃密になっているのだ。

「其れとも——王の財をその身を以て味わうか？」

「——元より、その腹積りであったのだろうか？」

こと此処に至り、両者は最大級の臨戦態勢に入った。

頂上に存在する者は、一人で事足りる。

故に、自身に並ぶ存在は不要。

絶対の王の考えはそんな処だろう。

殺生丸も半ば諦めの感情を浮かべながらも、戦闘に意識を切り替えた。

——此処に、太古の神話が時空を越えて再現される——

因みに彼の心境は、

『ヤベーよ、ヤベーよ！ 生金ぴかだ！ バビロンしてる！ カツ  
ケー！ てかマジ金色だわwww』

ミーハー精神を全面に押し出していた。

……………トツキー大丈夫かな？ 優雅、息してる？

## 間桐陣営の内情

——始まりは、殺生丸が自身の真名を告げた後のお話

殺生丸は自身の真名を明かした際に、彼らに桜の現状を分かり易く整理して話を聞かせていた。

「……つまりお前が言っている事が本当だとしたら、

時臣は桜ちゃんを助ける為、間桐に養子として出したのか？」

「——ああ、蟲の資料を読んだ限りでは桜の魔術属性は架空元素。

これは魔術家の保護下に属していない者が持っていた場合、

魔術協会に封印指定とされホルマリン漬けの標本に飾られる代物だ。

私自身も魔術で調べたがこれは間違いない。

仮に、魔術に関わらない様に今後過ごしたとしても異端は異端を惹きつけ合う、

その素質を持ち合わせるだけで厄介ごとに巻き込まれるだろう」

雁夜は、殺生丸の話を聞いて遣る瀬無い思いを抱いていた。

やっと臓硯から解放され、後は葵の下に帰すだけだと考えていた彼は、

殺生丸からそんな話をされても信じきれなかったのだ。

だから彼は継る想いで、他の打開案を出していた。

「……魔術回路ごと壊してしまえば……」

「戯け、貴様は魔術を正しく学ばなかったからその様な事が言えるのだろうが、

魔術回路とは体の臓器と一緒にだ。

それを無暗に壊そうとするなら、体にどの様な影響が出るか分かったものではない」

「……それなら！ 封印すれば何とか……」

「もし感情の高ぶりや外的要因で外れた場合どう対処する？

その場に魔術を知る者が対処できれば良いがそう都合よく往くま  
い。

魔術の失敗は死に直結する、対処法を知ると知らないのでは成果  
は

随分と変わってくるだろう。

それに最初に言った筈だ、異端は異端を引き寄せる。

桜ほどの才能になると決して裏の事情に関わらずには居られない  
筈だ」

これは、永い年月を過ごした殺生丸だからこそその答えだ。

平和に過ごしていても、異端側向こうからこちらにやってくる。

世界の理不尽と云うのを彼はその眼で多く視てきたのだ。

「……」

そして、この話は雁夜にとっても例外じゃない。

彼はジャーナリストとして世界中を歩んでいたがその最中、

魔術絡みの騒動に何度か巻き込まれた経験があった。

桜がそんな目に遭うのは避けたかったが、それでも彼女には魔術な  
どに関わらず

平和に暮らして欲しいのだ。

雁夜は何か桜を元の日常に帰そうと思いを巡らせてたが、

それは桜自身によって止められた。

「……雁夜おじさん、もう……いいんだよ？」

「桜ちゃん！ 君は幸せを願っても良いんだ！ だから諦めないでく  
れ！」

「……違うのおじさん。桜はもう幸せなんだよ？」

「何を言ってるんだ！ また葵さんとも凜ちゃんとも会えるんだよ？」

ジジイも兄貴も居なくなつて桜ちゃんの邪魔をする存在は無く  
なつたんだ……だから！」

「……私ね、殺生丸さんから聞いたの。

桜を助ける為に今まで頑張ってくれたんだよね？」

だからね？



桜は……助けようと頑張ってくれた雁夜おじさんが居てくれるだけで幸せなんだよ?」

「!!」

彼は、今迄の事を桜が知っている事に驚いた。

その情報を教えた自分のサーヴァントに怒鳴り声を上げた。

「殺生丸! お前……」

「——桜にも知る権利はあろう。それに私が改めて伝えずとも蟲から教えられていた様だ」

「なっ!」

それでは今まで隠していた事は全て無駄だったと云うのか……と、彼は言葉を失った。

その姿を見た桜は、雁夜に自身の気持ちを伝えた。

「雁夜おじさん、私……魔術を学びたい」

「なっ何を言ってるんだい桜ちゃん! 君は今までその魔術に苦しめられてきたんじゃないか!」

「うん、おじさんの言ってる通り私は今まで痛い思いしか魔術ではしてこなかった。

でも、殺生丸さんが正しい魔術を教えてくださいって約束してくれたの。

だから魔術をちゃんと扱える様になって、おじさんのお手伝いをしたい」

「……またお前の考えか」

雁夜は若干キレていた。

だがそんな彼にも殺生丸は冷静に対処した。

「——雁夜、貴様は確かに人として正しい考えをしている。

だが、こと魔術の世界に置いてその甘い考えでは守りたいと思った存在を一番に死なせるぞ」

「……そんなの……俺が一番よく分かってるさ……」

そう、彼も分かっている。

ここまで説明され、殺生丸が自分たちの為に最善を尽くそうとしているのは理解しているのだ。

だが、感情がそれを拒み続けていた。

自分や桜を苦しみ続けていた魔術にこれ以上、彼女を関わらせたくなかった。

故に彼は、ここまで頑なに拒んでいるのだ。

しかし、そんな雁夜もついにその提案を受け入れた。

それは桜の安全を第一に考えての事だった。

「――桜ちゃん、これだけはおじさんと約束して欲しい。

絶対に無理だけはしないって……約束してくれるかい？」

「――うん、約束する。雁夜おじさんを困らせる様なこと、桜は絶対しない」

「……よし！ なら俺から君にもう何も言わないよ。

でも、困ったことがあったら何でも言ってくれ、おじさんが全力で力になるから」

「……ありがとう……雁夜さん」

「？ 桜ちゃん、いま何か言ったかい？」

「ううん、何も言っていないよ？」

「そっか？ なら聞き間違いかな……」

「……ふふっ」

こんな遣り取りを得て、間桐陣営はその絆を強固なものとしていった。

次に、聖杯戦争の参加についての有無は参加する方針となった。

色々と考えた結果、この戦いは避けられないものだとして結論を出した為である。

「――まずは聖杯戦争に参加している他陣営の情報だ。

一つ目は知つての通り、御三家である『遠坂』現当主の遠坂時臣。

次にもう一つの御三家『アインツベルン』からの参加予定である『魔術師殺し』衛宮切嗣。

時計塔でロード・エルメロイの二つ名で知られるケイネス・エルメロイ・アーチボルト。

最後に遠坂時臣を師範とした魔術師弟関係である聖堂教会の元『代行者』言峰綺礼」

殺生丸は、聖杯戦争に参加するに当たって臓硯が調べていたことを改めて、

マスターである雁夜と桜に情報として聴かせたが、

やはり雁夜に聖杯戦争を降りてもらうのは今は危険だと判断した。

彼はこんな戦い早く退場した方が二人の身も安全になると初期は考えていた為、

早々に雁夜の令呪で自害でもしようと考えたがそれを思い留まり現状を再確認した。

まず、雁夜の命は長くない。

聖杯戦争に参加する際に無理な魔術行使を受けた所為で、寿命は既に一月も持たない状態だった。

これは桜も悲しむ為、何とかしなければと彼は考えた。

次に参加資格を失ったからといって、彼らに危害が及ばなくなるのか……と改めて考えた。

マスターの資格を失った場合、他の参加者から身の安全を確保する為に、

中立である冬木教会に保護を求めることが出来る。

だが、中立だからといって其処が絶対に安全だと考えてはいけない。

寧ろ、原作知識本に書いてあることが起こるなら安全ではない。

遠坂時臣は何とか説得すれば良いかも知れないが衛宮切継は駄目だ。

この男は目的の為になら手段を選ばない存在だ。

それに言峰綺礼も覚醒した場合には、面倒な存在となる。こういった者たちが一番厄介なのだ。

それにキャスターにジルが召喚されるとしたら、友として出来れば止めて遣りたい。

彼は後年に青髭と呼ばれる存在になる前は、

祖国の為に……そして誓いを奉げた彼女の為に戦い続けた男だ。

そんな彼を殺生丸は、自身の手でどうしても助けたかった。

殺生丸は雁夜の寿命とキャスターの件が無ければ、

ホントに自害をして雁夜と桜の二人を冬木の地から逃がしていた。

この地から抜け出せれば、二人の生存を確かなものとする事が出来たからだ。

だが、キャスターをどうにかしなければ桜の姉である凜にも被害が及ぶ可能性があった。

そして雁夜が死んだ時に桜が一人取り残される状況は見過ごせないのだ。

雁夜も殺生丸の話を聞き色々と考えてくれた結果、彼の提案を受け入れた。

召喚されてから自分たちの事を第一に考えてくれる殺生丸に、自分たちの命を託したのだ。

そして殺生丸は方針としてまず、協力者を得ようとマスターに進言した。

そして現在、間桐家には4人の人物が存在していた。

魔術師の間桐雁夜、その使い魔である殺生丸。

間桐の養子になった間桐桜、殺生丸が連れて来たキャスターのジル・ド・レエ。

殺生丸がジルを元の状態に戻し、ここまでに至った経緯を説明しよう。

まず殺生丸は雨生龍之介が殺害した夫妻を甦らせ、

その後は殺害現場を魔術で手早く処理し、ジルを伴い間桐邸へと帰還した。

彼は事前にこの様な結果になると雁夜たちに伝えていたが、やはり驚きはあつたらしい。

それは、サーヴァントの召喚と呼び出される英霊の真名を事前に知っていたことについてだ。

情報源について殺生丸は話をはぐらかしたが、

それでも何とか雁夜の信用を勝ち取ることに成功し、

ジルを間桐家まで連れて来たのだ。

何故ジルを仲間に引き入れたかについての理由は、雁夜たちの安全を確保すると同時に、

聖杯戦争を円滑に進める協力者の存在が必要不可欠だと考えたからだ。

——戦争に安全など存在しない

それは超越者となった殺生丸には一部の例外を除きほぼ起り得ないことだが、

彼の周りに居る存在にもそれが適応する……と云う訳では無い。

確かに殺生丸の実力なら他の存在を圧倒してマスターの安全を確保するなど容易ではあるが、

予想を上回る事態にも備えがあれば尚 安心と云った思惑が彼には基本的に備わっているからだ。

……ビビリの感性がここでも発揮されてたのだ。

そんな理由でジルは間桐家へと連れて来られた。

無論ジル自身を助けたかったのも理由にはあるが、今の彼は雁夜の使<sup>サーヴァント</sup>い魔なのだ。

マスターの為に手を尽くすのは、サーヴァントとしての務め。

そんな考えの下に殺<sup>オリ</sup>生<sup>主</sup>丸は行動している。

殺生丸は帰還した後にはジルに協力して貰える様に頼む考えだったが、これが少し厄介だった。

ジルは初め、自身が青髭として呼ばれたことを恥じて自害しようとしたのだ。

それを何とか食い止めて、何とか協力してくれるよう頼みこんだ。それでもジルは自分の存在が相当許せなかったらしく、こちらの説得を中々聞き入れてくれなかった。

だが桜はそんなジルを見かねて、彼にこんなことを言った。

「……ねえ、ローブのおじさんは何でそんなに自分のことを嫌ってるの？」

「……御嬢さん、私はね……とっても悪い人間なんだ。

現世こゝこに居たら、いつか君みたいな子に酷いことをするかもしれない。

だから、私みたいな悪人は皆の前から消えたほうが良いんだ……」  
ジルは悲しい顔で彼女にそう告げた。

それは大切な存在を失って自分が信じていたものが嘘だと思いつみ、

道を踏み外してしまった彼だからこそその言葉であった。

そんなジルに桜はこう告げた。

「……おじさんは悪い人なのかも知れないね。

でも、そんなおじさんでも殺生丸さんは信じてるよ？」

だって言ってたもん、アイツは絶対に悪い奴じゃないって。

……少し、ほんの少しだけ道を誤ったんだって。

だから雁夜おじさんと私におじさんのこと信じてほしいって」

「……………」

「だから、私も雁夜おじさんも信じてるんだ……おじさんは絶対良い人だって！」

桜は自分を助けてくれた殺生丸に感謝していた。

そしてそんな彼が言った言葉を彼女は純粹に信じた。

この英雄は自分たちの味方になってくれると……

英雄ジル・ド・レエにとつて子供とは愛すべき存在であり、自分たちが守るべき存在だと考えていた。

祖国を守る戦いにおいても、彼らの笑顔を第一に考えて彼は戦い続けた。

そんな英雄は、聖女ジャンヌ・ダルクの死と共に消え、

代わりに青髭と呼ばれる存在に成り果てた。

だが、彼はそれでも英雄なのだ。

いつかその身が地獄に堕ちると分かっているとしても、子供に求められれば立ち上がる皆の英雄だ。

桜の言葉を受けて、彼は覚悟を決めた。

浅ましいこの身を必要としてくれる存在が居るのならばと！

「私はいつか地獄に堕ちるでしょう。」

されど、この時ばかりは貴方たちと共に戦わせてください。

——この身が燃え尽きるまで！」

——こうして間桐陣営に新たな戦力が加わった。

そして現在に至り彼らは、今後のことを話し合っていたのだ。

「——まず、雁夜と桜には私の魔術で体の状態を正常な域にまで戻そう」

「?! そんな事が可能なのか！」

「——ああ、雁夜は急造で仕立て上げた所為で体はボロボロの状態だ。

まずは体に単食う蟲を全て排し、寿命は私が可能な限り伸ばそう。

次に桜は、蟲が間桐の水属性に変えようとして乱した流れを正常にすれば戻る筈だ」

殺生丸は雁夜と桜の状態を通常に戻そうとしていた。

この提案に雁夜は喜んだが、次にそれによって起こる魔術供給の不足についての懸念が発生した。

だが、それについても殺生丸には対策があった。

「魔術供給の問題は大丈夫だ。

マスターとは別に魔力供給源として魔力炉を作り、

それを用いて魔力パスの分割を行い雁夜の負担を極力避ける」

「そんなことも出来るのか？」

「……私が世界を旅していた時、外界の魔力を効率良く吸収する植物が居てな、

それを今まで育てていたのだ。

アレを地下の蟲蔵に設置すれば、この地のマナを効率良く集める。そして植物に魔力パスを繋げて分割の魔力供給源とすれば、雁夜への負担はほぼ無くなるだろう」

その言葉を聞いて雁夜は一先ず安堵した。

自分の所為で殺生丸が負けてしまったら、今迄のことが台無しになるからだ。

次にジルについての話になった。

ジルはキャスターとして召喚された為、ステータスなどがセイバーとして呼ばれた時の状態より大きく劣っていた。

殺生丸は腰に差している刀で虚空を切り裂き、その裂け目から何と武器と旗を取り出した。

表れたそれらを見て、ジルは思わずと云った顔になった。

「！それは私の武器に……貴方の旗……ですか？」

「そうだ、これは生前お前が使用した物と同じ武装だ。

忘れたか？お前たちの隊が使用していた装備は私が鑄造していただろう。

これもその時の一部だ。

……それとこの旗は本来 私の物だが、お前ならば使いこなせるだろう」

そうして殺生丸は彼に防具と剣、そして旗を渡した。

ジルは懐かしむようにそれらを受け取った。

雁夜はその光景を見て、殺生丸の伝承の一つを思い出していた。

「……確かお前って、色んな物を作ってたんだよな？」

「——ああ、御節介な鍛冶妖怪の爺にそう云った指導を受けていたかな。

外界の旅に出た際は、珍しい素材で武器や道具などを自前で作成したものだ」

殺生丸は懐かしい思い出を語るように雁夜に話した。

それが終わると彼は、ジルに武器の説明をした。



「それには加護や硬化、早駆けのルーンなどが刻み付けてある。武装するだけでステータスの向上が見込める筈だ」

「……我が友よ、感謝する」

「ふん、これらが無ければ始まらないであろう」

ジルは自身の友に感謝した。

だが、次に殺生丸はとんでもないことを彼に告げた。

「——そして……ジルには桜と再契約をしよう」

「なっ!!」

「……わたし?」

殺生丸の提案に雁夜とジルは驚愕し、桜は少し驚いていた。

そして直ぐに男二人から反対の意見が上がった。

「殺生丸! 桜ちゃんを聖杯戦争に参加させるつもりなのか!」

「見損ないましたよ殺生丸! この様な幼子に戦えと言うのですか!」

普段の殺生丸なら二人の意見に同意するが、それらを見做して言葉を続けた。

「——桜の素質は雁夜の倍処かそれ以上だ。」

いまの二重契約の状況より、桜を身近で守るサーヴァントの方が何かと都合が良いだろう」

「でも……彼女はまだこd「雁夜おじさん、私マスターになりたい」……さくらちゃん」

雁夜が情けない表情と声を上げているが、桜はそれを無視してジルにお願いした。

「ジルさん、私のサーヴァントになって下さい」

「……桜ちゃん、マスターは危険なんだよ?それでもやるのかい?」

「……私はもう……逃げたくないんです。」

雁夜おじさんは私を助ける為にいつぱい痛い思いをしたの。

——そんなおじさんを今度は私が助ける番なんです。

だから……お願いします! 私に彼を助ける力を貸して下さい!」

「……桜ちゃん」

雁夜は桜を呆然と眺めていた。

彼女の何かが変わったと彼は眠りから覚めた後に薄々感じていたが、いまはつきりと理解した。

彼女は前へ進もうとしているのだ。

何も出来なかったあの頃を越えて、自分の足だけで未来前に一步一步進んでいるんだ。

ジルが雁夜に目配せを送ってどうするか聞いてきた。

それに対して彼は……力を貸してやってほしい有無を伝えた。

彼女が選んだ未来道を自分は全力でサポートすれば良いんだ。

雁夜は桜の成長を優先することにしたのだ。

ジルはその判断に驚いたが同時に納得した。

彼らの間には強い絆があるのだと……

……彼女桜を視ていると、頑固者ジャンヌを思い出す。

そんなことを考えたジルだったが、いまは桜の誓いに応えるのが先だった。

「——解りました。その契約を受けましょう」

その言葉に桜は嬉しそうにしていた。

そして彼らの問題も解決した所で、殺生丸が再契約のやり方を彼女に教えた。

「——桜、今から私が行う詠唱を続けて言うんだ」

「はいー！」

——『告げる』

——『汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に』

——『聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら』

——『我に従え！ならばこの命運、汝が剣に預けよう！』

「——英霊ヅル・ド・レエの名に懸け誓いを受けましょう！  
貴女を我がマスターとして認めます、桜——！」

——此処に七人目のマスターが誕生した

——そして時空は、前回の戦いに戻る

## 初戦の終幕

「おい、ライダー！ 進展だぞ！ 初のサーヴァント戦が始まりそう  
だ！」

そう興奮をみせる彼の名は、ウェイバー・ベルベット。

第4次聖杯戦争に参加している、マスターの一人だ。

現在、彼が行っているのは使い魔を介しての遠見魔術であり、  
其処では今聖杯戦争における第1戦がいま幕を上げようとしてい  
た。

いまの彼が話しかけているのは、自分のサーヴァントである征服王  
イスカンドル。

彼は自身のマスターから得た情報を聞き、獰猛な笑みを浮かべてい  
た。

「——ほう、もう開戦おっほじめぬ 輩が現れたか。これは余も、うかうかしとら  
れんな」

そう言つて彼はその筋骨隆々の巨体を起こし上げた。

それを見たウェイバーは嫌な予感を感じていた。

「……お前、まさかとは思うけど其処に行こう何て考えてるんじゃない  
だろうな？」

「ん？ 当然行くに決まっておろう」

「——このっ大バカ野郎！ そんなの駄目に決まってるだろう！」

僕たちは此処で高みの見物を決め込むんだよ！」

そう言つて退けた彼に、イスカンドルライダーは軽い感じでデコピンをお見  
舞いした。

まあ軽いと言つても、遣られた相手が数十センチ後ろに吹っ飛ぶ代  
物の話だが……

ウェイバーは遣られた箇所を抑えて、泣きながら抗議した。

「なっ何すんだよーお前は！」

「……はあ坊主、余がそんなせせこましい真似をする輩にお前は視えるのか？」

「(……コイツなら絶対しないだろうな)——でも、それでも駄目だ！あの戦場には絶対、連れて行かないぞ！」

ウェイバーはライダーを召喚してまだ数日程度の関係だが、大方の性格を既に把握していた。

出鱈目な奴：彼が人生で出会って来た存在の中で、

この言葉が一番似合う輩など彼以外には居なかった。

こんな報告を彼にしたら薄々はこういった展開になるんじゃないかなーと考えてもいた。

だが、ウェイバーはこの戦いにライダーを参加させる気は無かった。

……というか、戦場を観察していてそれどころでは無くなったのだ。

壮絶なのだ、戦いの規模が……

彼はサーヴァント同士が戦いだす前に使い魔を離れた距離に置いて、

観察を続行していたがその行動は正しかった。

自分が召喚したサーヴァントが、毎日毎日テレビを見ながら煎餅を齧っている奴だとしても、

人間を超越した存在であることには変わらない。

現に、召喚当時はその存在感に圧倒されてまともに話しかける事すら出来なかった。

まあ直ぐに、破天荒で厄介なデカブツ程度にしか感じなくなったのだが……

そして現在、彼の目に視えている戦いは自身のサーヴァントを越えるものだと感じた。

自分たちより上だと考えたからこそ、彼はライダーを止めようとしているのだ。

「——ライダー、僕と視界の共有をしろ。」

あの戦場を自分の目で見てもまだ行くって言うなら、僕はもう止め

たりしない……」

「おいおい坊主、お前さん随分と意気消沈しとるでわないか？まだ戦ってもいないのに」

「——アレを見てないから、お前はそんなことが言えるんだよ……」

「——ふむ、なら坊主が言う様にまずは一つ戦場を拝ませてもらうとするかの」

ウェイバーはライダーに視界の共有を発動し、彼にその戦場を見せた。

「——コイツは……！」

其処でライダーが視たのは、懐かしき面影をした存在と黄金の輩が死闘を繰り広げる光景だった。

「アハツハツハツハツハツハツ！」

いま遠坂邸に於いて、通常では起こり得ない戦いが行われていた。

一人は最古の王、ギルガメッシュ。

一人は幻想の神、殺生丸。

ギルガメッシュの背後には、

剣刀、槍、矛、鎌、斧、メイス、棍棒……考えうる限りの多種多様な武器が宙を舞い、

敵対者に対して射出するという光景が繰り広げられていた。

十、二十、五十、百……数えるのも馬鹿らしいほどのそれらは全て、正真正銘の宝具であった。

より厳密に言えば宝具の原典。

伝説において、彼の英雄王は世界中の財をその手に収めたとされており、

宝具『王の財宝』ゲイト・オブ・バビロンはその宝を全て収める蔵であった。

彼はこの蔵を射出する形で主に運用する。

凡百の英霊であれば、これだけで即座に敗退する運命であろう。だが、それに受けて立つのは彼と同じ超越者。

凡百の存在が倒れるものでも、殺生丸であればその攻撃を防ぐなど造作もない。

現にその場に居ながらもその身に傷らしきものは一つもなかった。腰に差した刀は、彼が抜き放ったその時から片刃の大剣へと姿を変え、

宝具の弾雨からその身を守った。

一振りでその弾雨を退け、衝撃として放った風の暴威はギルガメツシユにも届く。

だが、王も自身の眼前に無数の盾を展開してその暴威を退ける。

その守りも宝具であり、簡単には突破できない。

故に殺生丸は、少しだけ力を込めてもう一度その大剣を振るう。

それだけでギルガメツシユの盾を消失させた。

在り得ない。

ただの刀の一振りで宝具が消えるなど普通では起こり得ない。

だが、それを可能とするのが殺生丸<sup>彼</sup>だ。

殺生丸の暴威は盾を退け、ギルガメツシユの鎧にも傷を与えていた。

「アレを退けこの身に傷を付けるか……これだけでは遊戯にも劣るか『救世主』?」

「……いや、流石と云おう『英雄王』。これだけの財を投げ捨てながらもまるで底が視えぬ」

「私の財は無限にして圧制の究極だ、底など存在する筈がなかろう」愉快そうに自身たちの遣り取りを嗤うギルガメツシユ。

「……だが、貴様は何時まで慢心を決め込むつもりだ」

「——ハッ、慢心せずして何が王か!」

正面から射出していた方針を変え、四方八方：視界に収まりきらない範囲を宝具で囲み、

それらを一齐に殺生丸へと発射した。

それを確認した彼は、弾幕の一部にその身を寄せ薙ぎ払い、見事に

回避してみせた。

彼らの戦いは、その一つ一つのレベルが超越したものである。

この戦いを覗き見ていたウェイバーが、ライダーを戦場に行かせんとした理由は簡単だ。

次元が違う。

文字通り、戦う者のステージが違ったのだ。

人と人の戦いは拮抗するものだろう。

通常の英霊と英霊の戦いもレベル差はあれど、拮抗するだろう。

だが、それすらも越えた超越者が相手であつた場合はその限りではない。

それほどの差が、自分のサーヴァントと比べた場合では存在すると思つたのだ。

彼の認識は全てが正しい。

世に名高い征服王でも、この2騎と並べた場合では大きく劣るだろう。

仮に戦つたとしても英雄王には一太刀すら及ばず、

救世主には彼自慢の戦車で挑んだとしてもその身ごと消滅させるであろう。

それほどの差なのだ。

彼らと他の英霊を見比べた場合では……

そして彼らの戦いは終幕へと向かう。

「——貴様を屠るのは最終と見定めた。故にこの余興は、次の一撃で仕舞としよう」

「——その考えに同意を示そう。私のマスターに帰還しろと急かされているのでな」

その言葉を最後、二人は互いの必殺を披露する。

英雄の王は蔵底から取り出した、乖離の剣により放たれる究極の一撃。

幻想の祖は背中から取り出した、地獄の剣による放たれる最凶の一撃。



——此処に、最高ランクの宝具同士が衝突する

「——天地乖離す開闢の星！」

「——地界を創造する破壊の暴威！」

「……………」

その光景を最後に、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの視界は閉じられた。

恐らく、宝具同士の余波による使い魔の消滅だろう。  
だが、今の彼にはそんな事はどうでも良かった。  
そんな事より、

「——あれが……サーヴァント同士の戦いだと？」  
初めて英霊同士の戦いと云うのを視た彼は、驚愕を露わにしていた。

自分が召喚したサーヴァントである、フィオナ騎士団の騎士『輝く貌』デイルムツド・オディナ。

彼はケイネスにとってただ忌々しいの一言で表せる存在であったが、

それでも人間である自分を確かに超えた存在なのだとは認識していた。

だが、アレに比べたら可愛いものなんじゃないのかと……とち狂った思考をしてしまった。

彼がそんな考えをしてしまうのも仕方がない。

それだけ、比べる相手が悪すぎた。

超越者<sup>彼ら</sup>とデイルムツドでは次元が違うのだ。

そんな事を考えをしていた彼に、デイルムツド<sup>ランサー</sup>が報告があると話しかけてきた。

ランサーもケイネスと視界共有を施し、今迄の戦いを観察していたのだ。

当初、ケイネスは視界共有するのを物凄く嫌がっていたが……

「——我が主よ、私は先ほど戦闘を行っていた白銀の正体を知っています」

その言葉を聞き、彼は声を荒げた。

「なっ！ 何故それを先に言わないのだ馬鹿者が！」

「……申し訳ありません、お考えのご様子でしたので報告は後ほどと愚行した所存です」

ケイネスはランサーの言葉に頭を抱えそうになったが、

彼が有力な情報を持っているは確かな様なので、その怒りは一端流すことにした。

「——それで？ 敵の真名は何なのだ？ 貴様が知り得ているならケルトの者か？」

その言葉に否とランサーは返答した。

そして、自身のマスターに相手の正体を告げた。

「——いえ、あの者は例外です。彼奴に時間の概念は存在しません」

「——其れは、まさか……」

ケイネスは薄々気が付いた。

敵の正体を……

そして同時刻、マッケンジー夫妻の家を仮宿にしているウェイバーも、

自身のサーヴァントに相手の真名を告げられている最中であつた。  
「彼奴の真名は、この国日本に住む者なら誰でも知つていよう」  
異なる国、時代を過ごした二人の英傑がその者を語る。

「我が主、あの者は数千の時を駆けた化生であり、世界にその名を轟かせた大英雄です」

「坊主、彼奴は世界を救つた救世主とも呼ばれたりした豪快な奴だぞ」

そして同時に、その名をマスターたちに告げた。

「彼奴（アイツ）の真名は——」

「——『大妖怪』殺生丸!!」

——此処に5組の参加者が彼を認識する

——最後の1組である彼女は、彼の姿を見て一体何を思うのか？

## 愉悦と機械

——遠坂邸跡地

「……………」

超常の存在である2騎が争ったこの場で呆然としているのは、遠坂家五代目当主である遠坂時臣。

彼は戦場となった遠坂邸が在った場所を放心した眼で眺めていた。彼は聖杯戦争における御三家の一つとして、聖杯を何としてでも手に入れなければならなかった。

それが遠坂の悲願であり、大望であるが故に……

時臣は今回の戦いに挑むに当たって、様々な策を巡らせていた。まずは、サーヴァント召喚。

これは聖杯戦争において最重要な案件である為、一番力を尽くした。

その御蔭で、英雄王と呼ばれる破格の駒を揃えることに成功した。そして聖堂教会派遣である審判役の璃正神父、聖杯戦争マスターである言峰綺礼、

彼らの助力も借りて環境的にも他を圧倒するアドバンテージを得た。

守りの工房も外来から訪れるマスターたちと比べると最高と云っていい状態だ。

寧ろ、負ける要素の方が無いだろう。

……だが、何事も思い道理に往かないのが世の中である。

彼は失念しているのだ。

冬木で開催されるこの戦い<sup>聖杯戦争</sup>が、人の常識で推し量れるものではないと云う事に……

たとえば、彼が呼び出した者に匹敵する存在が現れた場合は如何なる？

……普通に考えれば、その結果が解かるだろう。  
いま自身が目に行っている光景が、その答えなのだから……

遠坂時臣は勘違いをしている。

使い魔<sup>サーヴァント</sup>と云つてもそれは人間には手が届かない、遙か高みの存在。

過去の英雄を模して造り出した現世の現身。

上つ面な礼儀だけでやり過ぎせる存在ではないのだ。

例え、令呪と云った楔があつたとしても軽く考えてはいけない。

使い魔だからと自身の方が上と想うなかれ。

模しただけの偽者だと云つて侮るなかれ。

彼らは正しく一時代を築き挙げてきた存在だ。

普通の人間であろうが魔術師であろうが関係ない。

歴史を読んだ彼らが想像する代物より、それは何倍何十倍の偉業である。

ぬるま湯の様な現世を生きている人間たちは正しく理解できない。

彼らの恐ろしさを……

そして彼はそれをいま身を以て実感した。

……たつたの一晩だ。

それだけで彼の先祖が積み重ねてきた魔術師<sup>業</sup>の歴史と自身の住まいが共に吹き飛んだ。

ギルガメツシユと殺生丸が戦い始める前に、

何とか必要な物は持ち出せて自身も安全な場所まで逃げられた。

幸いだったのが、アーチャーが即座に仕掛けずに何とか逃げるだけ

の時間を稼げたからだ。

まあ、ギルガメツシユが時臣を気に掛けるなど世界が変わろうと起こり得ない。

ただ彼は、極上の餌を前にして軽い興奮を起こしていただけだ。

そんな感じで時臣の命は無事だったが、代わりに家及び辺り一面が更地になりました。

被害範囲は遠坂邸の本館が全壊し、敷地の庭を入れた範囲が吹き飛んだ程度だ。

民間の死者などは一切ない。

……少し被害が小さすぎないかだと？

それには一寸した訳がある。

理由を述べると、遠坂邸の周りに敷いてある結界を殺生丸が戦闘前に頑丈にしたのだ。

彼はこの場に訪れると同時に魔術で結界に干渉し、

強度を神話レベルのものにまで引き上げていた。

周りの被害を想定して、出来るだけ最小限にしようと考えた結果だ。

……それに、子供を死なせるなどは論外である。

まあ彼がその気になれば遠坂邸も守れはしたが、桜を苦しませた時臣になど慈悲は無い。

寧ろ、この戦いに巻き込まれて死なないかなと少し、ほんの少しだけ彼は考えていた。

話は戻るが、この場には時臣以外の存在も出向いていた。

秘密裏の同盟者、言峰綺礼である。

彼もまた、殺生丸に予定を狂わされた人物であり、いまこの場でもっとも関係ない存在であった。

綺礼はこの惨状を見ても、別段何とも感じていなかった。

この地において、遠坂邸は魔術を学ぶ為に何度も足を運んだ所であり、

思い入れがある場所の筈だ。

だが、それでも彼は何も感じなかった。

悲しみや後悔など普通なら自然と出てくるものが彼には無いのだ。寧ろ呆然と立ちすくむ時臣の姿を視ていたら、何やら胸中がざわつくのを感じた。

この想いは何なのだろうと彼は考えたが答えが出そうも無かったので、

まずは目の前の些事を片づけるのを優先する事にした。

……この場に綺礼の顔を覗き込む存在が居れば、彼の変化に気付いただろう。

彼の顔に表れていたものは、正しくその言葉通りのものだった。このことを綺礼自身が知るのもそう、遠いものでは無いだろう。

「――我が師よ、此れからの事についてお聞きしたいのですが？」

「……ああ、そうだね。此れからの事について話そう……」

綺礼の返事にも力が無かった時臣だったが、何時までも落ち込んでいる訳にもいかなかった。

これはまだ始まりなのだ。

幸い、乗り気では無かったギルガメツシユもこの戦いを得て考えを変えるかも知れないし、

無事な礼装も未使用の令呪も手元にある。

綺礼のサーヴァントであるアサシンも居れば、璃正神父も無事に健在している。

まだ取り返しが付かない訳じゃないのだ。

そう自身を奮い立たせて、彼はまた立ち上がった。

それを視ていた綺礼は残念そうであったが……

彼は気持ちを切り替えて、まずは情報を整理する所から始めた。

そこでの戦いを視ていた綺礼と相談する事にした。

「綺礼、まずはあのサーヴァントが何者であるかは解っているね？」

「……アーチャーの言葉に偽りが無ければ、敵はかの大英雄である殺生丸に間違いありません」

「……………君の聴き間違いと云う可能性も「無いでしょうね」。

……………これは全部夢じゃ「無いですね」……………はあ」

序盤で挫けそうになる時臣であった。

……胃が痛くなる。

あとその似非神父、その愉悦スマイルは止める。

目の前の顎鬚にばれるぞ。



——とあるホテルの一室

「……………」

同時刻、此処でも殺生丸とギルガメツシユについて考え込んでいる男が一人居た。

これは今聖杯戦争に於ける最後の参加者であるマスター『魔術師殺し』衛宮切嗣その人である。

彼はこの日に冬木に到着した身であり、昨夜の戦闘は今まで視てはいなかった。

相方である久宇舞弥が使い魔を通して収めた映像を視終った彼は、その思考をフル回転させていた。

一瞬思考に何かが過った様に感じたが大丈夫だろう。それよりも殺生丸<sup>ア</sup>について<sup>レ</sup>の意見を舞弥に尋ねる方が先だった。

「——舞弥、あのサーヴァントについて解っている事は？」

「——遠坂のサーヴァントと思われるアーチャーは、大量の宝具を所持していることしか……………」

「ああ、あの数は異常だ。

だが逆に考えるとアレだけの宝具を所持する英霊は歴史に於いても限られる筈だ。

その線で探せば直ぐ解る筈だ」

「ええ、アーチャーは直ぐに割り当てられる筈です。

問題は、あの宝具の数を余裕で裁ききった白いサーヴァントの方です。

武器は大剣を扱っていた様ですが、切嗣が呼び出したのはセイバーのサーヴァント、

つまり敵はそれ以外によるクラスとなります」

「……………剣や槍をぶつ放す英霊も居る訳だからセイバーのクラスじゃ無

くても、

剣に長けた存在が居たつて不思議じゃない筈だ。

それに、エクストラクラスと云う線もある。

第3次の聖杯戦争に於いて、一度だけ召喚された事例があった」

「では、クラス特定は難しいのでは？」

そこまで会話をしていた切嗣がそこで少し考え、自身の至った答えを彼女に告げた。

「——舞弥、僕は奴の真名が解ったかも知れない」

「！……本当ですか？」

「ああ、アイツの大剣は腰に差してある刀を抜いた時に変化したものだったな？」

「その通りです」

「——そして、白を基準とした着物の上に鎧姿、長い銀髪と共に靡く毛皮……伝承の通りだな」

「……そのご様子だと正解のようですね」

「……君も解っていたんだろ？」

「いえ、貴方が特徴を改めて述べて頂いたお蔭で解りました」

「——『救世主』殺生丸。またの名を『正義の体現者』とも呼ばれる存在……か」

そう言った彼の眼には行き場のない怒りが込められていた。

「……馬鹿げてる。何が救世主だ、何が正義だ。」

アイツはアレだけの力を持ちながら世界を救えていないじゃないか？」

「……切嗣」

「——英雄なんて、所詮そんなものさ。」

僕たちに比べたら凄い力を持ち合わせているのにそれをただ破壊に費やしている馬鹿な存在。

騎士道なんて戦場には無い、ただあるのは地獄だけ。掛け値なしの絶望だけさ……」

彼は多くの戦場をその眼にできて、その真理に至った。

戦場で死んでいく人間を救えない英雄の存在を彼は嫌った。

寧ろ、戦場に法があるなどと抜かす輩には殺意さえ抱く。  
戦場に救いなどない。

あるのは弱者が強者に蹂躪される現実だけだ。  
争いを世界から無くす方法を彼は探し求めた。

そして、衛宮切嗣はこの聖杯戦争に答えを見出した。

——世界の平和

現実では到底成し遂げられないであろう願望でも、聖杯ならば叶う。

彼はこの戦いに望みを掛けたのだ。

——この争いを、人類最後の流血にしてみせる。

——敵対者が救世主だとしても……僕が勝者となる！

——英雄に憧れた暗殺者、参戦

## 暗殺王ザイード

——間桐邸

「……家…吹っ飛んだよな？」

「……ええ、派手に吹っ飛びましたね」

「……はあ」

そう言っつて互いにため息を吐いているのは、雁夜とジルの二人。

現在、殺生丸が遠坂邸に敵襲と云う名のトツキー苛めを終えて、間桐邸へと帰還した後である。

彼は桜とジルの契約が終わった後に、『……ダンサーが危ない』と言葉を残してその姿を消した。

桜を含めた三人は始め訳が解らずに困惑していたが、雁夜に彼からの念話が届き、

その内容がいまから遠坂邸に奇襲してくると云う出鱈目なものだった。

『はあ!?!』状態の雁夜を置いてきぼりに戦いは始まってしまい止めることが出来なかった。

状況をまずは確かめようとしたジルは、自身のマスターである桜を確認していた。

彼女は先ほどは所持していなかった水晶玉を膝に抱えて、その中を覗いている最中であった。

ジルはそれが直ぐに遠見の水晶玉と解り、何処に在ったのかと彼女に聞いた。

「……水晶玉<sup>コクリツ</sup>を視てろっつて殺生丸さんが言ってたの」

その言葉だけでジルは理解した。

彼の悪い癖がでたと……

ジルと彼は戦時中、様々な首都に訪れた。

其処には戦をまだ理解できない幼い子供の姿も在った。

街を散策する最中、子供に手を挙げる親の姿を見た。

不安だったのだろうか。

戦況が如何転ぶかで、自分たちにも被害が及ぶかも知れない。

情緒不安定になる大人も居ただろう。

その不安を弱者である子にぶつける者が居ても可笑しくないのだ。

ジルはその場を直ぐ様止めようと駆け出そうとしたが、彼の横を白い光が通り過ぎた。

そして彼が気付いた時には、親が仰向けの状態で倒れており、子の傍には殺生丸の姿が在った。

彼は強者が弱者を甚振って悦に浸るのを心底嫌っている。

後、多分子ども好きだと思ふのだ。

っていうか、絶対に好きだと思ふ。

ジルがその事を一度だけ彼に告げることがあった。

まさか、ガチめの風の傷をお見舞いしてくるとは思つてもみなかったが……

あの時は彼に与えられた防具を装備していたから良かったものの、防具が無かつたらと思うとゾツとする。

ジャンヌが彼に告げた際は、『うるさい』と一言で済ませたのにこの差は何なのだろう？

まあ兎に角、彼が遠坂邸に居る桜の親を弄りに向かった理由が解りました。

なら私も少し見学すると致しますか……

——そして冒頭へと戻る

彼が戦闘をしたら、被害がでるのは解っていたが……彼と同等の存在が現れるとは

思つてもいなかった。

彼一人であれば家の一角が吹っ飛ぶ程度で済んだのに、

まさか拮抗した戦闘が起こるなど想像もしていなかったのだ。

彼のマスターである雁夜は『葵さんと凜ちゃんの家が……』と嘆き、桜は『……ふーん』と反応しただけで何とも感じていない様だった。雁夜や殺生丸には心を開いた桜だが、遠坂家の人間にはまだ如何ともし難い感情があるようだ。

やはり、捨てられたと思っていた所為でまだ完全には許せていないらしい。

夜も遅い時間だったので既に桜は寝たが、雁夜とジルは殺生丸が帰宅するまで待っていた。

そして、戻ってきた彼に雁夜は直ぐに問い詰めた。

何で遠坂邸に往って来たのか：と、その答えに対して殺生丸は

唐突に腰から引き抜いた刀でまた虚空を裂き、大きな黒い物体を取り出した。

取り出したそれは、何と敗退したと考えられていたアサシンであったのだ。

それを見た雁夜は大層驚き、

「おま、お前は一体何を持って帰って来てるんだ！」

その問いに対し、彼はこう答えた。

「――拾った」

「嘘付け!!」

キャラが若干崩壊してきたように感じてきた。

そんなこんなでアサシンを彼らは手に入れた。

彼らの騒ぎ声で意識を取り戻したのか、アサシンがその眼を覚ます。

「……此処は一体？」

「――間桐邸だ」

「――なっ!!」

彼は状況を瞬時に理解し、敵から距離を於こうとしたが殺生丸に先を越され、

その身を床に組み伏せられた。

何とか抜け出そうと試みたが、その前に刀が首筋に中てられ行動を

制限された。

「——自身の状況を改めて認識したなら、落ち着け。

今の処、貴様を害する気は無い。まあ其れは、貴様次第だがな？」

「……………」

彼は先ほどその身を黄金のサーヴァントに消滅させられようとしていた。

自身の暗殺に絶対の自信を持ち、館内に設置されている魔術結界を解くのに

後一步の筈だったのだ。

……だが、それは敵サーヴァントの所為で直ぐに終わった。

アサシンは死ぬのだと確信したその時に、

殺生丸が彼の前に表れてどうやったか解らないがこの身を救ったのだ。

彼は一連の出来事を思い出し、一応の警戒は解いた。

だがそれは、一応のものである。

あの場で脱落するサーヴァントを助ける理由が、アサシンには見当が付かない。

故に、自身を助けた殺生丸の意図がまるで見えないのだ。

だから、最低限の警戒を解いて情報を得ることにまずは専念した。

「……何故、あの場で私を助けたのですか？」

聖杯戦争に参加する者にとってアサシンが敗退するのは、寧ろ歓迎することでは？」

「——貴様自身も気づいているだろうが、あれは唯のデモンストレーションだ。

表向きは敗退した様に見せかけて、裏で間諜などを行う予定だったのだろうか？」

……まあ、貴様は生け贄としてその事は知らされていないであろうがな」

「……………」

アサシンは肯定こそしなかったが、全てを語っている様なものだった。

今回の聖杯戦争に参加している暗殺者は、第19代目『百の貌のハサン』と呼ばれる存在。

彼……いや、彼らの宝具である妄想幻像は、簡単に言えば多重人格一人一人に体を与えるもの。

この場に居る彼も多重人格内に存在する一人に過ぎない。

今回の作戦は彼一人を犠牲とし、敵陣営に偽りの情報を与えて、今後は影より敵陣営の情報を集めるのが目的であろう。

……そしてそれは殺生丸に改めて告げられるまでもなく、彼自身も解っていることだ。

同盟関係であった自身のマスターは、黄金のサーヴァントを視ている。

英雄王を視て恐れる必要が無いなどと、口が裂けても言わないだろう。

故に、アサシンは自身が捨て駒扱いされたのを理解しているのだ。

……彼が大人しく話を聞こうとしたのも、それが理由に入っている筈だ。

そして、そんな彼に殺生丸はある提案を持ちかけた。

「——私たちの仲間になるか？」

「……………えっ？」

アサシンは自身の耳を疑った。

いま、この男は何と言ったのか？

敵である私を仲間に……だと？

それを聞いて驚いていたのは何もアサシンだけではない。

その場に留まり、今まで黙っていた聞いていた雁夜も殺生丸の提案に異議を申し立てた。

「お前はまた何を考えているんだよ！

キヤスターの次はアサシンを仲間に誘うなんて！」

その異論に彼は冷静に返事を返した。

「——コヤツ以外の暗殺者が、まだ健在している筈だ。

なら、仲間に引き入れて暗殺対策に備えるのもまた一考だと私は思うが？」



「……でも、他人のサーヴァントなんだぞ？」

その辺りは如何するんだよう？」

「安心しろ、マスターとの契約関係は既に切つてある。

故にその問題は支障にはならない」

「……ホントにそういうのは用意周到だな。

お前を観ていると本物の救世主かどうか怪しく感じるなあ」

雁夜の言葉に彼は不機嫌になっていた。

如何やら『救世主』の言葉が癪に障つたらしい。

「——ふん、その名称は好かん。

それは私が遣りたい様にやった結果、周りが勝手に付けたものだ。

私からその名乗りを上げたことは、一度たりとて在りはしない。

以後、私をその呼び名で呼ぶな」

「——はいはい」

雁夜は何か色々如何でもよくなってきていた。

殺生丸がやる事は最終的には、自分たちにとってプラスに働くと考

えて

意見するだけ無駄だと感じたのだ。

故に、もう全部彼に託すことにした。

世間一般ではこれを、投げやりと呼ぶ。

そしてジルも殺生丸を信頼していたので特に異論などはなかった。

アサンである彼が承諾すれば、今からもう仲間状態なのだ。

だが、彼は迷いかねていた。

この手を取つても良いのかと……

また、自分は裏切られるのではないのかと……

いまの彼は思考の渦に囚われていた。

そんな彼を見かねた殺生丸は更に言葉を尽くした。

「——貴様が迷うのも無理はない。

マスターが居ない貴様が此処に留まっているのも、私が手を加えて  
いるからだ。

私はその気になれば、お前を強制的に操る事も可能だ。

……だが、それでは意味が無い。

私は背中を預けられる真の友を欲している。  
故に、私は問う。貴様自身の意志で、想いで応えろ。

「私たちの仲間になるか？」

「彼はこんなにも必要とされたことが、今までにあっただろうかと考えていた。」

先ほどまで、自分は使い捨てにされていたと云うのに……

泣きたかった。

泣いて、泣いて、みつともなく泣き喚きたかった。

歓喜した。

喜んだ、嬉しかった、そんな陳腐な言葉しか出てこない位に喜んで  
いた。

必要とされる。

自身を仲間と呼んでくれる。

それだけで彼は救われていた。

聖杯に願わなくとも彼自身の願望は叶っているのではないか？

彼自身の願いは、歴史に己の名を残すこと。

でも彼は考えた。

この者たちに自身の名を呼ばれた方がそれは素敵なことなんじゃないのかと……

例え、世界にその名を轟かせられなくても、確りと自分のことを解ってくれる存在が

一人でも居てくれた方が幸せなんじゃないのかと……

そして、彼は決意を固めた。

この者たちと共に運命<sup>Fate</sup>を歩もうと……

ここから自身の歴史<sup>Zeir</sup>を始めよう！

彼は、自身の真名をこれからの仲間に奉げた。

こんな愚かな私に力を貸してくれと願う為に……

「――我が名は、暗殺教団の教主『山の翁』<sup>百の貌のハサン</sup>の一人であるザイドと申します。」

――どうか、どうか私を貴方たちの戦列に加えて頂きたい！」

彼の応えに、各々は言葉を告げる。

「……また増えると思うと一寸気が滅入るけど、それでも俺はアンタを歓迎するよ。」

俺の名前は間桐雁夜、其処の破天荒様のマスターだ。

これから宜しく、ザイード」

マスターである雁夜が信頼し、

「私も彼に救われた身、貴方の気持ち誠に理解しています。

私のクラスはキャスター、真名はジル・ド・レエと申し上げます。

——此れよりは、我ら共にマスターを守り抜きましょうぞ！」

キャスターであるジルが新たな同士を歓迎し、

「——アサシン、ザイードよ……此れよりは共に往こう。

我が真名——殺生丸。私にとってクラスなど不要。

故に、貴様も私を呼ぶ際はその名で呼べ」

殺生丸が彼の存在を肯定する。

ザイードは自身が暗殺者だと知っているのに、心が温かくなる思いだった。

だが、それは悪い事ではない。

彼が暗殺者だと云つても元は人間。

その様に感じるのも……決して間違いなんかじゃない。

——此処に、また新たな仲間が参戦する

——彼の者の名は、ザイード

——  
彼もまた本来、消える筈の存在

——  
だが、殺生丸は彼を見捨てなかつた

——  
神は言っている、ここで死ぬ運命<sup>さだめ</sup>ではないと

## 策謀

——冬木空港ロビー

「……ねえセイバー？ 何だかわたしたち、周りの人から観られてない？」

「——アイリスフィールの容姿に注目しているのでしょうか。」

貴女は女性として、とても美しいですからね」

「セイバーだって、とても可愛いわよ？」

「……複雑ですね、私は王になったその時から女を捨てた身ですから」  
この場で今、周りに注目を集めている人物が二人ほど存在している。

一人は銀髪を伸ばし、その白い肌と対照的な紅い瞳をもった女性。  
もう一方は金髪に、翡翠の瞳をもった男装の麗人。

冬木には魔術師絡みの件で、国外からの訪問者が思いの外いる。

一般の外国人も観光目的でこの地に訪れたりするので彼女たちの存在は別段、珍しく無いのだ。

其れなのに何故、此れほどの注目を浴びるのかと言われれば、  
純粹に彼女たちの容姿が優れていた為だ。

銀髪の女性、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。

男装の麗人、騎士王アーサー・ペンドラゴン。

又の名を使い魔、サーヴァントセイバー、セイバー剣士と呼ぶ。

彼女たちが今回の聖杯戦争に於ける、最後の一組である。

そして彼女たちの参戦で、冬木の地に全ての参加者が出揃った。

——この時より、Zero物語が動き出す

「良くぞ来た。」

今日一日、この街を練り歩いて過ごしたものの、どいつも此奴も穴倉を決め込むばかり。

俺の誘いに応じた猛者は、お前だけだ」

そう言つて彼女たちの前に姿を現したのは、2振りの槍を持った美丈夫の男であつた。

此処は冬木の外れにある倉庫街。

セイバーたちは空港を出た後に冬木の街を二人で散策していたが、その最中に目の前に居る男に誘いを掛けられた。

彼女たちはその誘いに乗り、この倉庫街にまで足を運んだ。

「その清澄な闘気、セイバー 剣士と御見受けしたが…如何に？」

「——如何にも。そう云うお前はランサー 槍兵に相違無いな？」

「ああ、我が役割りはクラスランサーだ」

英雄は、仮の名であるが互いに名乗りを上げた。

そんな自身たちの状況に、ランサーは苦笑を魅せた。

「……名乗りもまともに上げられんとは、興が乗らん縛りが有つたものだ」

「……………」

その眩きにセイバーも少なからずの同意はあつたが、敢て口に出す事も無いと考え黙っていた。

その時、彼らの辺りに声が上がった。

『下らない事を喋るんじゃない、ランサー』

「っー」

「……………」

突然の声にアイリは驚き、セイバーは辺りを静かに探った。

声は反響するかの如くに辺り一面に響いていた。

恐らく魔術で風を操り声を反響させているのだろう。

自身の居場所を彼女たちに特定させない為に……

彼女たちもそれが解り、姿が見えない敵を警戒した。

「――申し訳ありません、我が主よ」

『……ふんっ、解つたのなら私が話をする間は黙っている』

ランサーのマスターは自身のサーヴァントの会話を早々に終わらせ、敵であるセイバー陣営に話を振ってきた。

『我が名は、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト。』

此度はランサーのマスターとして、この聖杯戦争に推参した者だ。そして姿を見せない、この様な状況を許してほしい。

アインツベルンの魔術師よ』

彼は姿を隠しながら、自身の紹介をするといった奇妙な戦法を取っていた。

だがアイリは、ケイネスの反応を観て自分たちの策が成功しているのを実感していた。

セイバー本来のマスターは衛宮切嗣。

アイリスフィールはただセイバーの近くに居るだけ……

つまりアイリがマスターだと敵に誤認させることが彼女たちの作戦だ。

アイリは作戦の感触を確かめつつ、ケイネスの返答に応えた。

「――初めまして、ロード・エルメロイ。」

私は名前は、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。

貴方ほどの魔術師にその様に言われると恐縮するわ」

『――なに、君の家系も歴史に名を残す名家だ。』

貴族ならば最低限、礼儀は弁えねばなるまい』

「……ええ、ならその謝罪は素直に受け取らせてもらおうわ」

其処までの会話を終わらせて、アイリは本題に入ることにした。

「それで？ 私たちに挑発を仕掛けてきた訳は何なのかしら？」

ロードほどのお方が姿を隠しながら、この様な事をしたのには理由が有るのでしよう？」

『当然だ。私を其処のお喋りな奴と一緒にして貰っては困る』

ランサーはケイネスの言葉には特に反応を示さず、ただ黙っていた。

アイリはそれを視界に入れながらケイネスに続きを足した。

『君たちは昨夜、遠坂邸で起こった初のサーヴァント戦についての詳細はご存知かな?』

アイリは彼の問いにどう答えたら良いのかと思考を巡らせた。

そして素直に此方の状況を話すことにした。

「……私たちは、先ほど日本に到着したばかりで貴方が云う襲撃についての詳細は

持ち合わせてないわ」

『——ふむ、嘘は付いてなさそうだな。』

まあ、こんな情報に嘘を付いても仕方ないとは思うがな』

そしてケイネスは言葉が続けた。

『ならば、君たちには簡潔にその詳細を話そう。』

昨夜の襲撃は、遠坂のサーヴァントだと思しき黄金のアーチャー、クラスが不明である白銀のサーヴァント、その2騎による戦いが事の発端だ。

……私がこんな姑息な手段を取らざる得ない状況になったのも、全てあのサーヴァントたちが悪い!』

「……何が不自然なの?」

私には、ただサーヴァント同士が戦っただけにしか聞こえないのだけれども……」

『……ただの难道?』

いや、君たちは視てはいなかったのだな。

なら、その判断を下すのも無理はないか……』

彼は寧ろ、こちらを憐れんでいるかの様だった。

その態度にアイリは少しムカツときて、語尾を強めながら続きを足した。

『……先ほどの続きだが、無論ただの戦闘ではない。

なにせ戦いを観ていたにも関わらず、気づいた時には辺り一帯が吹き飛んでいたのだから』

「……はっ?」

『言葉の通りだよ、アインツベルン。』



屋敷を中心に周囲100mは一気に吹き飛んだ筈だ。

それも宝具などの真名を解放せずにだ……』

アイリはケイネスの言葉を理解できなかった。

だが其処に、別行動を取っていた切嗣が意見を重ねてきた。

『——アイリ、ケイネスが話している内容は事実だ。

僕も舞弥に見せて貰った映像でそれは確認済みだ』

『……なら、ホントの事なのね?』

『ああ、間違いない。

それとアイリ、ケイネスが何を言うのかは知らないが、

出来るだけ奴に情報を引き出させてくれ。

僕たちにとつて、有益なものがあるかも知れない』

『——解った』

其処で念話を止めた彼女は、更に情報を聴きだす為にケイネスに問うた。

「——貴方が伝えた事は理解できたわ。

でも、何が目的なのかまだ解っていないのだけれど……」

『——単刀直入に告げよう、私たちと同盟を結ぶ気はないかね?』

「なっ!」

アイリはセイバーと共に驚いてしまった。

まさか、彼のロードから同盟の話を持ち掛けられるとは思ってもみなかったのだ。

ケイネスは、そんな二人を無視して話を続けた。

『——君のサーヴアントであるセイバーは、パラメーターの数値がオールAに近い最高のものだ。

私のランサーでは苦戦は免れないだろう。

だが逆にそれは、君たちの助力を得られればあのサーヴアントたちにも

勝ち得る布石となる筈だ。

故に私は君たちを此処に誘い、この話を持ち掛けているのだ』

ケイネスはここまで話すと、ランサーに一枚のスクロールを取り出させた。

彼は、スクロールをセイバーに投げ渡した。  
セイバーは警戒しながらそれを受け取り、アイリに手渡した。  
彼女はスクロールの中身を確認して驚いた。

——セルフギアス・スクロール  
自己強制証明

魔術師同士が違約不可能な取り決めをする時にのみ使用される、呪術契約の一つ。

魔術刻印の機能を用いて術者本人にかける強制の呪いは、いかなる手段を用いても解除不可能。

命をさしだしても次代に継承された魔術刻印がある限り、死後の魂すらも束縛される。

ケイネスが渡してきたのは自己強制証明セルフギアス・スクロールであった。

まさか、死後まで束縛されるこれを持ち出してまで同盟を組もうと考える何て、

想定外もいい所だ。

アイリは即座に切嗣に指示を仰いだ。

『——アイリ、それには何て書いてある?』

『少し待って、……要約すると互いのサーヴァントを用いてその2騎のサーヴァントを打倒する。』

その間は互いに敵対行動を取る事を禁じる……って事位かしら。

後、互いのマスターに害を成す存在が現れた場合は、

もう一方のサーヴァントを用いて相手の障害を排除するって書いてあるわ』

『……駄目だな。』

これじゃあ2騎を倒すまでケイネスを排除できないし、

僕がセイバーのマスターだとばれてしまう。

それにこの内容だと舞弥を使って間接的に殺すことも出来ない。

何よりも旨みが無い』

『……そうね、背中を安全に預けられる存在が出来るのは心強いけど、あのランサーがどれ位強いのか解らないもの』

『——ああ、交渉は決裂だ』

アイリはケイネスに自分たちの答えを告げようとした。だが、それは彼の高笑いので止められてしまった。

『——アハツハツハツハツハツハツハツ！』

ようやく捉えたぞ、この魔術師の面汚しめ！』

彼は声高らかに宣言した。

ケイネスはこの時を待っていたのだ。

衛宮切嗣が自己強制証明セルフギアス・スクリールに意識を向ける、その時を……

「何っ!!」

これには切嗣も驚き、直ぐ様ケイネスを補足しようとスコープを覗き見たが、

先ほどまで確認できた彼の姿は其処には無かった。

そして切嗣は唐突にその場から地面へと飛び降りた。

直後、彼が先ほどまで立っていた場所に鎌鼬の様な風が通り過ぎていた。

後、1秒遅ければ……切嗣の胸は真つ二つだったろう。

「何処に往こうと云うのだね、セイバーのマスター？」

切嗣の目の前に、彼は居た。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトの姿が、其処には在った。

「魔道を穢す、薄汚れたネズミに私自ら特別に指導してやろう」

彼は顔を歪めながら、切嗣に告げた。

「——光栄に思いたまえ」

よ………ケイネスのパーフェクトまじゆつ教室、はっじまってるよ——

## ランサーの誓い

——倉庫街

「——くっ！ 其処を退け、ランサー！」

「その提案には承諾し兼ねるな、セイバー。」

此れより先に往きたいので有れば、我が首級を討ち取ってからにして貰おう。

——最も、簡単にこの首を取れるとは考えないことだ」

「——ならば、貴殿を即座に討ち果たす。」

其処を押し通らせて貰うぞ、槍使い！」

「——其れは俺の望む処だぞ、セイバー！」

一進一退。

正に彼らの戦いはそう呼べる代物であった。

英傑同士による闘争は、人間では視覚に捉える事は難しい。

現にセイバーに守られるアイリは、目の前で行われる戦いを正しく認識出来ていなかった。

縦横無尽に翔る両者の姿を一度確認すれば、

その間に何十と云う剣戟の遣り取りが行われていても彼女は気付けない。

だが、それが当たり前の事なのだ。

英霊とは人の形を保ちながら、人を超越した存在。

故に、この戦いにアイリが手助け出来ないのは寧ろ必然。

アイリは今が非常に不味い状況だと理解していながら、

何も出来ない自身に苛立ちを感じていた。

ケイネスが切嗣に襲撃を仕掛けたのはこちらでも瞬時に察し、

彼の救援にセイバーを向かわせようとしているのだが思うようにいってなかった。

理由は当然、ケイネスのサーヴァントであるランサーが原因だ。

彼は自身のマスターが襲撃を仕掛けると同時に戦闘を喚け、彼女たちを食い止めていた。

彼女は切嗣が襲撃された際、状況を聴きだす為に念話を彼に送り続けていたが一向に繋がらなかった。

この状況もケイネスによる仕業だと考えられた。

故にアイリは、必要以上に切嗣の身を案じていた。

彼の安全を知る為には、ランサーを倒す他なかった。

アイリがその様に思考を巡らせていると同時に、セイバーは目の前の敵について考えていた。

彼女はランサーと武器を交えながら疑問を感じた。

セイバーは彼の事を何も知り得て無かった為、初めは相手の策に疑問を覚えなかったが、

こうして獲物を交えると彼からは騎士道に通じるものを感じていた。

何故、此れほどの猛者があのような策を弄する必要があったのかと……セイバーは考えたのだ。

そして彼女はその真相を探るべく、互いの間合いに距離が出来た際に問いを彼に投げ掛けた。

「——ランサー、貴公ほどの者が何故この様な小細工を弄した？」

剣を交えて貴方がどれ程の力量を持ち合わせているのかは理解した。

……貴方も騎士の道を志しているのでは無いのか？」

その疑問に、彼は自己を以て応えた。

「——確かに俺は、理想とする志を持っている。」

だが、これは主奇襲に強制された訳では無いぞ。

俺自身の意志で、我が主の方針に賛同したのだ」

彼の言葉に嘘は無い。

それはセイバー自身にも理解できていた。

もし彼がこの作戦に賛同していなければ、

この場でセイバーと此れほどの戦いを繰り広げられなかったであろう。

迷いを持って打ち合えるほど、セイバーの剣撃は甘く無い。

故に、セイバーはランサーの事が解らなくなっていた。

彼女は彼ならば絶対に己が武で敵の首級を討ち取り、自身のマスターを納得させると思ったからだ。

令呪も使わずに大人しく従っているのが不思議でならないのだ。

だから彼女は再度、彼に問いを投げた。

「……だからこそ、私は貴公の事が理解できない。

何故、自身の武だけで主に貢献しようと思わない？

如何して、マスターの非道な行いに目を瞑っている？」

セイバーの言葉に彼は眉を顰めながら返答した。

「——その言葉、お前にも当て嵌まるのではないか……セイバー？」

「……何だと？」

ランサーの物言いが彼女の癪に障った。

それはどういう意味だとセイバーは彼に語尾を強めながら問い続けた。

その態度に、ランサーは何を今更と言った具合で応えた。

「——今更、その様な事暗殺を隠すこともあるまい。

お前の本来のマスターが、我が主のお命を蔭ながら狙っていたのは予想できていた。

故に、我が主は自身の信念を枉げてまでこの様な浅ましい手段を為さったのだ」

彼女は彼の言葉に驚いた。

「……キリツグ、貴方はやはりその様な方針を取っていたのですか？

……何故、私に剣を預けて頂けないのですか？」

彼女はランサーの話を聴いて、マスターの行いを初めて知る事が出来たのだ。

セイバーは自身のマスターに何故……と心の中で問いかけていた。そんな彼女の内心など知らずにランサーは言葉を続けた。

「——主が決意を固めたと云うのに俺だけが意地を張るなど、お門違いにも程があるう。

それに、俺は主に聖杯を掲げると誓った身だ。

——勝者になる事こそ、今生の主に取って最高の忠義。  
……俺は勘違いしていたのだ、セイバー。

……自身の意固地な意見だけを押し通すのは、真の忠誠と呼ばない。  
い。

主に忠誠を誓うと言いながら、その実…俺は主の事など顧みていなかった……

ただ、自身の不幸を嘆いていただけの愚か者だったのだ……」  
其処で彼は言葉を止めた。

現在、彼の表情はお世辞にも良いとは言えず、  
寧ろ自身の罪に懺悔している咎人の有様であった。

彼は本当に心の底から、今迄の行いを後悔しているであろう。

セイバーの眼には、少なくともそう感じられた。

そんな彼だったが、次の瞬間には変化した。

先ほどとは打って変わり、その顔を穏やかな表情に変えていたのだ。

これには、流石のセイバーも驚いた。

あれ程、自身の行いに悔いていた存在が此処まで変わるのかと……

彼はセイバーの変化に気付かず先ほどの続きを語りだした。

「だが、主はこの愚かな俺に教えてくれたのだ。

『——貴様の忠義は偽物で在ったかもしれない。だが、其れは今迄の話であろう？』

ならば、この戦いで真に証明しろ。貴様を呼び出したのは、間違いでは無かったのだと』

——ああ、主に誓った願いは過ちにはしない！

このランサー、全身全霊を以て貴方の命に伝えてみせよう！

たとえ他のサーヴァントたちに謗られようとも、

貴方の信頼だけは——決して間違いにはさせない！」

セイバーは、ランサーの誓いに言葉が出なかった。

彼女は、ランサーが己の信念を無理に枉げてマスターの意向に従っている、

心の何処かで思っていたのだ。

だが、その考えは大きく間違っていた。

彼は寧ろ、心の底から忠誠を誓っていた。

自身のマスターと心を通わせて、絶対の信頼関係を得る。

それは、彼女が持ち合わせていない代物であった。

セイバーは彼らの行いに憤りを覚えていたが、その想いが少し薄れていった。

正直、彼らの在り方に憧れを抱いていたのだ。

自分たちとは違う在り方。

強大な敵を眼前にして、主従の絆を固め合う姿。

自身に無いものを此れほど魅せ付けられて、嫉妬が無いとは言えなかった。

ランサー陣営を観ていると、その思いが強くなる一方であった。

……だが、其れでもセイバーは敗けられなかった。

彼女には、果たさなければ成らない願いがある。

たとえ、マスターとの信頼関係が築けなくとも……彼女は勝たなければいけないのだ。

「——ランサー、先ほどの言葉は撤回しよう。

貴公の想いは尊い。

故に最早、言葉は不要だ。

——貴方の誓いは、我が剣で倒す他無い」

「——感謝する、聡明な騎士よ。

貴公に出会えた事は、我が誇りだ」

そこまで言葉を重ねた二人は、理解した。

語り合うのは此処まで、次は互いの生を掛けた全身全霊の闘争。

ランサーは2槍の封印を解き、赤槍と黄槍の姿を露わにした。

セイバーは聖剣に施している風の鞘を使用した、特攻の構えを魅せた。

両者の間に、一陣の風が吹く。

それを合図に、両雄は翔る。



——だが、彼らの勝敗に水を差す存在が戦場に舞い降りた

## 捻じれる参加者

——遠坂邸襲撃の後、ランサー陣営

ケイネスは、その顔を忌々しそうに歪ませていた。

そんな彼に対して、ランサーは臣下の礼を取っていた。

「——殺生丸……か」

「……生前に出会った事が有るので、間違い無いかと思われます」

ランサーから告げられた情報をケイネスは吟味していた。

そしてこの戦いが、絶望的なものに成ったと考えた。

ケイネスは彼らの戦闘を観察しただけで、その結論を出した訳ではない。

その考えに至った一番の経緯は、デイルムツドの伝承の中に在る。

「……ランサー、お前は私に絶対の忠義を誓った、そうだな？」

「——ハイ、私は主に忠誠を誓った身。その言葉に、嘘偽りの類は一切有りません」

「——ふむ、ならば此れより問う言葉に貴様は嘘偽りなく述べよ」

「はっ、承知しました」

ランサーは忠誠を誓った存在に絶対の自信を以て応えた。

そんな彼に、ケイネスは軽く問い投げた。

「——貴様を含めたファイオナ騎士団全軍で化生殺生丸の神に挑み……敗北した伝承は真実か？」

「——っ!？」

……ランサーにとって、その問いは答え辛いもので有った。

その事実をこの場で明かすのは、決定的な敗北宣言をするのと同義である。

だが、忠誠を誓う主の問いに彼が嘘など付ける筈は無かった。

彼はケイネスに、歴史の事実を正直に告げた。

「……我が主の言葉に偽りは御座いません。」

——我らはあの者に戦いを挑み、見事に返り討ちに遭いました」

「……………」

「……………」

ランサーは自身の返答に何も応えてくれないマスターに、不安と諦めの感情を同時に感じた。

当然だ、その話が事実ならばランサーが如何に努力しようとも、殺生丸に一矢報いる事さえも出来はしないだろう。

自身の主に失望されていないかと云う不安、そして今回は忠義を果たせないと考えての諦め、

ランサーの感情を占めるものはその二つであった。  
そんな彼にケイネスは今一度、問いを投げ掛ける。

「——ランサー、貴様一人で彼の化生に勝てるか？」

「——っ!？」

この質問の意味がランサーには解らなかった。

何故、先ほどの会話からこの様な問いが投げ掛けられるのか検討が付かないのだ。

騎士団全軍で挑みながら負けたと云うのに、デイルツド一人で勝てる道理など無い。

それ故に、ランサーはケイネスの意図を測りかねていた。

ランサーはこの問いに自信を持ち応えようとした。

彼の者の首級は我が槍で……と、彼は考えたのだ。

だが、其処まで思考して彼は喋ろうとした言葉を止めた。

いま、彼のマスターは自身に何を求めているのだろうか……

「——先ほど主は仰られたではないか、嘘偽りを申さずに応えよと……

私は、出来もしない嘘を主に告げようとしているのでは無いのか?」

ここまで考えて、彼は迷った。

騎士道に於いて、敵が強いからと初めから敗北を認めるのか?

……だが、今の彼では如何足掻いた処で手傷を負わせる事すら出来ない。

故に彼は悩みに悩み抜いて、その答えを出した。

「私……一人では……勝てません……」

ランサーは惨め過ぎる想いを感じていた。

自身の主君に勝利を奉げる事も出来ない。

言葉にも出来ない。

この身は戦う事でしか役目を果たせないのに、其れすら不可能に成った。

一体、自分は何なのだろうか？

彼には、もう何も残されてはいなかった。

そんな折、ケイネスが告げた。

「——貴様の忠義を認めよう、デイルムツド・オデイナ」

「……………えっ？」

……………いま……主は何と述べた？

この……私の忠義を……認めて下さると仰られたのか？

ランサーは今迄で一番、混乱していた。

そんな彼の間抜け顔を見たケイネスは忌々しそうにしながらも言葉が続けた。

「——腑抜けた表情を魅せるな、愚か者。」

貴様があのサーヴァントには勝てないのは、幼子でも理解できる些事だ。

——もし貴様があの問いに対して、我が槍で示すなどと言った妄言を吐く様で有ったならば、

即座に令呪で自害を申しつけたものを……」

ケイネスは今でもこの選択が正しいのか迷っている様だったが、更に言葉をこう続けた。

「だが貴様は自身の弱さを認めて、一人では勝てないと正直に告げた。貴様自身の事だけではなく、私への忠義に応える為にその事実を述べたと理解した。

——故に此処で、貴様の忠義を今一度信じることにした。

唯、それだけだ……何か異論が有るのかね？ ランサー？」

ツンデレだ。

——高レベルのツンデレが此処に居る。

今迄、ランサーを冷たくあしらっていた彼がここ一番で彼を信じる等の言葉を投げ掛けていた。

別にケイネスは、そんな気持ちは一欠けらたりとも持ち合わせていなかった。

ただ、ランサーの言葉をやっと少しは、ほんのちよっぴり認めてやろうかなと考えただけだ。

信頼などと云ったそんな恥ずかしい感情は今の処、ランサーに対しては無かった。

だが、ランサーにとつてはコレだけで幸せの絶頂ものだった。やっと……やっと、主が我が忠義を認めて下さった！

勝てないと情けない言葉を告げたのに、

それでもこのデイルツドを信じてくれると仰られて下さった！ここに、嬉しい誤解が起こっている。

ケイネスはランサーを一応は認めると言ったものの、それでもまだ彼に対して複雑なものを感じていた。

ランサーは自分では勝てないと宣言したのに、それでもこの身を見捨てなかった主に感激していた。

この二人、結構相性が良いのかも知れない。

ケイネスが毛嫌いしても、それにランサーが動じなければいいのだ。

——此処に、勘違い主従が誕生したのだ。

つと、その場にケイネスの婚約者であり、ランサー陣営の協力者である一人の姿を現した。

彼女の名は、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。

ソラウは彼らの話し合いに一端、席を外していたのだ。

「——ケイネス、話は終わったの？」

「——ソラウ、私たちの話は終わったよ。これからの方針を今から決めたいと思う。」

君も話に参加してくれ」

「解ったわ、それとランサーは疲れてない?」

「……ソラウ様、私はサーヴァントの身です。」

肉体の疲労現象などは、決して起こり得ません」

「そう? 疲れたら時は私に言っただけ?」

「……………」

「……………チツ!」

彼女は乙女だから、都合が悪い話はデフォルトで聴かない。

いつもだったらここで会話が終わるのだが、今日は一味違った。

「——いえ、その場合は我が主に伝えますので結構です」

「……………えっ?」

ケイネスとソラウは、自身の耳を疑った。

いま、彼は冗談を言ったのか?

真偽を確かめる為に、ケイネスは彼に尋ねた。

「——ランサー、冗談は其処までにしておけ」

「いえ、私に不調が起こった場合は主であるケイネス殿に

私を視て頂かなければ…と愚行した所存です」

「……………」

「——ふむ、そういう事なら私に告げろ。」

貴様ที่ใช้物にならないなど、此方のイイ迷惑だ」

「——ハイ、主の仰る通りです」

「……………」

「……所でソラウ、如何かしたのかね? 先ほどから黙ったままだが

?」

「……ソラウ様?」

彼らの話を黙って聞いていた彼女は、ケイネスとランサーに注目されてその口を開いた。

「——駄目よ」

「……………ん?」

「……ソラウ様?」

彼女が何の事を話しているのか、男二人には解らなかった。

そして彼女はもう一度、声高らかに宣言した。

「——そんなの駄目……私は絶対に認めないわよ！」

「ええっ!?!」

二人は心底、彼女が何に対して駄目だと言っているのか解らなかった。

一つだけ、理解が出来る。

彼女は少し、興奮しすぎていないかと……

「そんなアブノーマルな関係は駄目よ、ケイネス！」

ランサーもソツチに往つてはイケないわ！」

「お、落ち着けソラウ！ 一体、君は何を言っているんだね!?!」

「ソラウ様！ 如何したのですか!?!」

「兎に角ダメよ！ 私はそんなの認めないからね!!」

ソラウがこの様になった理由は、先ほど行われた彼らの会話が原因だ。

彼女は脳内で言葉の意味を桃色変換に変えて、聞いていたのだ。

——ソラウビジョン

「いえ、私に不調（意味深）が起こった場合は主であるケイネス殿に私を視て（意味深）頂かなければ……と愚行した所存です」

「——ふむ、そういう事なら私に告げろ。」

貴様が使い物（意味深）にならないなど、此方のイイ迷惑（事実）だ」

……………色々とヒドイ。

彼女がこうなった理由は、簡単だ。

ソツチ系の雑誌がこのスイートルームに置いてあつた所為だ。前の客が持ち忘れていった物だろう。

ホテルの最上階を借りる際、少し強引に手続きを済ませた所為で、充分な清掃が行き届いてなかったらしい。

彼女は偶然にもソレを見つけて、読んでしまったのだ。

ニホンはヘンタイ、はつきりわかんかね。

コレは多分、世界線がどれだけ違おうとも変わる事がない、一つの真理だ。

彼女は運悪く？ソレらに毒されてしまったのだ。

ソラウは箱入りとして今迄生活してきた所為で、そういった代物に對しての免疫が余り無い。

腐ってやがる…遅すぎたんだ……

ソラウを何とか鎮めた後、ケイネスはまず情報収集に力を注いだ。殺生丸の事も事前に知っていれば、色々と準備できた筈と考えたのだ。

その考えに至った後の彼は、素早く行動した。

まず時計塔のコネに連絡を入れて、可能な限りマスターたちの情報を集めた。

そして、聖遺物の特定なども並行して行った。

ロードとしての繋がり、そして9代続いた名門としての情報網は甘くない。

彼は一夜にして、ほぼ全ての陣営についての情報を集めきった。

御三家の『遠坂』『間桐』『アインツベルン』。

聖堂教会所属にして遠坂時臣と師弟関係である、言峰綺礼。

自身の聖遺物を盗んだ教え子、ウェイバー・ベルベット。

アインツベルンが探し出した、コーンウォールから発掘された聖剣の鞘。

遠坂が取り寄せた、この世で最初に脱皮した蛇の抜け殻の化石。

そして教え子が盗んだ、征服王が生前身に着けていたマントの一片。

間桐と言峰の媒介情報は、得られなかった。

自身を含めた、6組の情報を可能な限りは集めた。

だが最後の一組は、マスターの情報すら掴めなかった。



それでも、ケイネスはこれらの情報を纏め上げた。彼が本気になればこの程度、造作もないのだ。

ランサーとソラウにも自身が纏めた情報を公開し、互いの知識を共有した。

此処に、万全の準備が整った。

そんな彼らが、まず標的ターゲットにした存在とは……

「Fervor 沸き立 me 我が sanguis 血潮」

ケイネスは自身の切り札である魔術礼装、ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液を取り出した。

魔導を穢す、クズを処分する為に……

「Automatoportum 自動 imperium 制御  
defensio: 防 incursio 攻撃」

彼は、ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液を改良した。

自身で操作するのでは無く、礼装自身に全てを任せる扱いにしたのだ。

今迄の機能は、彼が常に命令と魔力を礼装に送る形を取っていた。だが今回の戦いに備えて彼は魔力補充を充電式にし、命令系統を完全な自動操縦に切り替えた。

コレの欠点は、魔力が切れた際に完全に機能をストップすると云うものと、

充電する際の魔力量が膨大な事の主に二つの事柄が挙げられた。

だが、その欠点を補って余りある戦力にこの礼装は変貌を遂げていた。

切嗣は礼装に対峙しながら、自身の状況の不味さに焦りを感じていた。

まず、セイバーやアイリの情報が掴めなくなっていた。

ケイネスは、念話などの情報伝達魔術の効力を阻害する結界を周囲に張り巡らせていた。

次に目の前の礼装に合わせて攻撃してくる、ケイネスの存在が厄介であった。

彼は礼装に魔術を送る事も無く、自身の魔術行使にだけ魔力を注いでいた。

これが切嗣を悩ませていた。

彼の切り札である起源弾は、高い魔術行使に応じてその効力を増していく。

だが、ケイネスが現在使用している魔術は基本的なものばかりで、致命傷を狙うには遠く及ばない。

故に、彼は決定打に欠けていた。

そして何より、もう前線を維持するのが難しくなっていた。

彼が用いる魔術は比較的簡単なもので、実戦で使える物と云えば魔術礼装である起源弾と、

自身が戦闘用に改良を加えた固有結界の亜種『固有時制御』の二つだけなのだ。

彼は礼装による自動制御攻撃とケイネスの風魔術の両方を同時に捌かねばならなかったのだ、

固有時制御を連続使用しているのだ。

だがこれは、寿命をただ先延ばしにしているだけでの行いであった。

『固有時制御』の効力は、固有結界の体内展開を時間操作に応用し、

自分の体内の時間経過速度のみを操作する代物。

当然それ相応の副作用があり、解除した後には世界からの『修正力』が働き、

反動によつて身体に相当の負担が掛かる。

故に、通常では考えられない程の負荷が今の彼には掛かっていた。

そしてこの状況を切嗣は、意地と根性だけで何とか踏ん張っている瀬戸際であった。

「……ハア……ハア……ハア！」

「――随分と息が上がってきたな、ネズミ。」

此れは、私から逃げ続けた事を称賛しなければならぬかな？」  
どちらが有利なのかは、一目瞭然だった。

切嗣は暗殺者としては優秀だが、逆を云えばそれだけ。

純正の魔術師と競い合うなど、彼では力不足も良い処だ。

そしてもう一つ理由を述べるとすれば、ケイネスの魔術師としてのレベルが高い所為でもあろう。

環境や条件が違えば、切嗣にも勝ち目はあった。

だが、現状は彼にとって最悪な状況と言っても過言では無い。

何しろ、この場では策を弄そうにも手持ちが足りない。

野外である為に、ケイネスの風の魔術がその能力を上げている。

起源弾を撃とうにもその隙さえ生まれぬ。

不利な点しか挙げられない。

最早、切嗣にとっては殺されるのを待つのと変わり無かった。

「――興ざめだな、魔術師殺し。」

貴様は魔術を扱うには、値しない存在だ。

此れで幕を引こう」

「……クソッ！」

ケイネスが最後の攻撃に移ろうとしたその時、突如 乱入者が現れた。

その者は細身の剣をケイネス自身に投げつける事で、彼の攻撃を強制的に中断させた。

ケイネスはその攻撃を間一髪だが、避ける事に成功した。

だが、キモを冷やした。

何せ、ヴォールメン・ハイドラグラム月 霊 髓 液の自動防御を越えてきたのだから……

「っ?! 一体誰だっ!!」

ケイネスは、剣が飛んできた方角を睨み付けた。

すると其処には元アサシンのマスターである、言峰綺礼の姿が在った。

綺礼の登場には、流石のケイネスも驚いたが、彼以上に切嗣が一番

驚いた。

何故、この男が自分を助ける？……と彼は警戒したのだ。

ケイネスはこの状況に苛立ちを感じながらも、その場を即座に退いた。

二人以上を相手にするのにサーヴァントが傍らに存在しない状況下では、

不味いと冷静に判断したからだ。

理由として、ケイネスは言峰綺礼が教会に保護を求めたのを知っていたが、

敗退したとは露程も考えてはいなかった。

まだ、この男はサーヴァントを所持している。

この考えを頭に浮かべていた為の即時撤退である。

彼は、アサシンが行った遠坂邸襲撃の件を偽造だと既に見抜いていた。

だからこそ、今この場を去るのは最善だと彼は判断を下した。

ケイネスが撤退する様を尻目にしながら、綺礼は切嗣に意識を向けた。

切嗣も息を整えて、敵と何時でも交戦できる状態を即座に作り上げた。

……二人の間に静寂が訪れる。

切嗣は得体が知れない強敵に対して警戒を……

綺礼は自身の導いてくれる存在との遭遇に喜びを……

先に動き出すのはどちらか？

両者はタイミングを見計らい行動を起こそうとした。だがそれは、無駄な徒労に終わってしまう。

――衝撃の出来事が、彼らを襲った

——この出来事は……衛宮切嗣彼に於いて、重要な分岐点のひとつ

——彼は……未来を勝ち取る事が出来るのか？

——其れとも……此処で終わって仕舞うのか？

——運命……その結末は如何に！

——僕は……諦めない！

——1%の可能性が残っている……その時まで！

次回『ケリイ死す』 デュエルスタンバイ!

一難去つて、また一難

——倉庫街、乱入

『A A A A L a L a L a L a L a L a i e !!』

彼らが対峙する中間の位置にチャリオットから、稲妻を放出しながらの派手な登場を決める存在が居た。

セイバーとランサー、両者の決着に割つて入るその存在は、騎乗兵ライダーのサーヴァント。

二人の攻防に刺激されたライダーは、勝敗が決しようとしているその状況を見過ごせず邪魔に入った。

彼の登場に二騎のサーヴァントは警戒を露わにしながら、様子を伺った。

ライダーはそんな彼らの態度を気にせずに、まずは己が何者かを声高らかに宣言した。

「——双方、剣を収めよ！ 王の前であるぞ！」

——我が名は、征服王イスカンダル。

此度の聖杯戦争においては、ライダーのクラスを得て現界した」  
「「「なっ！」「」」

彼の宣言に、四者が驚きを示した。

二人は先ほどまで死闘を繰り広げていた、セイバーとランサー。セイバーの仮のマスターである、アイリスフィール。

最後にライダー自身のマスターである、ウエイバー。前者とアイリが驚くのは未だしも、彼のマスターである

ウエイバーですら予想だにしていなかった暴挙。

クラス名を知られるのは兎も角、まさか自分から真名を明かすなど普通は思わない。

ウエイバーはライダーの事を未だ正しく認識出来ていなかった。

「なっ何を考えてやがりますか！ この馬鹿アは！」

彼がこの様に怒るのも無理はない。

だが、そんなウエイバーをライダーは鬱陶しいとばかりにデコピンで沈黙させた。

今の彼には先んじて遣るべき事があるのだ。

それは……

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……まずは問うておくことがある。

うぬら、ひとつ我が軍門に下り聖杯を余に譲る気はないか？

さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である！」

サーヴァントの勧誘を行う事だ。

……改めて聴くとバカ丸出しである。

ライダーの破天荒ぶりにランサーは呆れを含ませながら言葉を告げた。

「その提案には承諾しかねる。

俺が聖杯を捧げるのは、今生にて誓いをかわした新たなる君主ただ一人。

それは断じて貴様ではないぞ、ライダー！」

最後は殺気を纏わせながらの返答であった。

其れと呼応する様にセイバーも言葉を述べる。

「抑々、そんな戯言を述べ立てる為に、貴様は私とランサーの勝負を邪魔立てしたと云うのか？

騎士として、許しがたい侮辱だ！」

彼女もまた、ランサーと同じように怒りを感じていた。

そんな彼らの怒りを受けてもなお諦めが付かないライダーは今一度言葉にした。

「……待遇は応相談だが？」

「くどいっ！」

「……むっ」

ライダーは残念そうに溜息を吐いた。

「重ねて言うなら、私も一人の王としてブリテン国を預かる身だ。



如何な大王と云えども、臣下に下る訳にはいかぬ」

彼の名乗りに感化されたのか、セイバーも自身の出生を暴露し始めた。

まあ殺生丸アイツの所為で、真名を隠したとしても直ぐにばれるのだが

……

セイバーの名乗りには、ライダーも驚いたようだ。

「ほおー！ ブリテンの王となー！」

此れは驚いた、何しろ騎士王がこんな小娘だったとはー！」

「——其の小娘の一太刀を浴びてみるか、征服王！」

「……はあ、これは交渉決裂かなあ。勿体無いなあ〜残念だなあ〜」

説得に失敗したライダーは残念そうにしながらも、何処か楽しげな様子である。

彼にしてみれば、この誘いも相手が乗ってくれば儲け物程度の心算であったからだ。

マスターであるウェイバーにしてみれば、溜まったものではないが

……

ライダーは一通り自身がしたい事を終えると、辺りに一帯に対して突然挑発をし始めた。

セイバーは疑問に感じて、彼に問いを投げ掛けた。

「セイバー、其れにランサーよ。」

うぬらの真向切つての競い合い、真に見事であった！

あれほど清澄な剣戟を響かせては、惹かれて出てきた英霊がよもや余一人と云う事はあるまい」

ライダーは自信満々と云った感じで、彼らの戦いをそう評した。

実際にセイバーとランサーの白兵戦は、次元の高い闘争であった。

「聖杯に招かれし英霊は、今此処に集うが良い！」

尚も顔見せを怖じる様な臆病者は、征服王イスカンダルの侮蔑を免れる者としれえ！」

倉庫街を分裂させたアサシンを介して戦況を見ていた綺礼、そして綺礼より情報を得ていた時臣は、焦りを感じた。

絶対、アーチャーは戦場に姿を現す。

その考えが二人の脳裏に瞬時に過る。

アーチャー・アサシン陣営の状況は、比較的にもともな状態へと戻っていた。

遠坂時臣は屋敷を吹っ飛ばされたが予備の仮設にその身を隠し、

言峰綺礼は教会の保護下に入りながら地下に籠り、

アサシンより得た情報を時臣に伝達していた。

遠坂邸も幾人かの魔術師に手を借りて、何とか復興作業が行われていた。

そして何と、あのアーチャーが復興する為の軍資金を恵んでくれた。

罪悪感は微塵も感じていなかったが、殺生丸程の強者と戯れられた事は思いの外楽しめた様だ。

故に、ギルガメッシュはその褒美として数百億の現金を時臣に恵んだのだ。

屋敷の有様に嘆いていた時臣もこれには慶び上がり、ギルに対し改めて忠誠を誓った。

遠坂家の魔術は基本的に金食い虫のもので、

逆を云えば金さえあれば再起を幾らでも図れるのだ。

そうして、今の状況にまで戦況を戻す事に成功。

だが、ライダーの挑発にまた頭が痛む思いであった。

「これは……不味いな」

「はい……不味いですね」

二人が危惧する様に、プライドが高いアーチャーがこの挑発に乗らない筈がないのだ。

彼を止める為に時臣は令呪を使用するか悩んだが、その考えを破棄した。

英雄王に勝てる存在が居るのに、この様な事で切り札たる令呪を消費するなど馬鹿げている。

故に彼を止める術は今の処無い。

サーヴァント同士の戦闘が穏便に収まる事を願うしか無い。

時臣と綺礼はそう結論を出して終わった。

「っ！——我が師よ、失礼ですが私は一端席を外されて貰います」

「……何か問題が発生したのかい？」

「ええ、アサシンの様子が変なので少し見てきます」

「……解った。出来るだけ手早く済ませてくれ」

「——承知しました」

時臣との通信を遮断した綺礼は、倉庫街に急いだ。

彼は時臣に嘘を付いてサーヴァント同士が争い合う戦場に急行していた。

正確には彼らの横で争い合う、魔術師二人の元に急いでいたのだ。アサシンからの情報で、衛宮切嗣とケイネスの両者が争い合っているのが分かった。

そして、戦況が切嗣にとって悪いのも見て取れた。

綺礼は自身の悩みを解決できる存在として見定めている、

衛宮切嗣を死なせる訳にはいかなかった。

故に自分の身を渦中に飛び込ませても、あの場に赴かなければならない。

「いまの彼には、聖杯戦争など如何でもよかった。

ただ、自分の答えを知る為に……」

ライダーが告げた言葉に招かれて参上した存在は、黄金のサーヴァント。

この場で彼の存在を知らないのはセイバー陣営の二人。

対し彼の戦闘を覗いていたランサー、ライダーとマスターであるウエイバーは、

アーチャーの登場に警戒の色を示した。

アーチャーは不愉快げに口元を歪めながら、眼下に存在する英霊たちを一瞥した。

「我を差し置いて、『王』を称する不埒者が一夜に二匹も湧くとはな」  
彼は、自身以外がその『王』<sup>称号</sup>を拝するのは我慢ならなかったらしい。「難癖つけられたところであ……」

イスカンドルたる余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが「戯け。真の王たる英雄は、天上天下に我ただ独り。後は有象無象の雑種に過ぎん」

ライダーはアーチャーが述べる言葉に、呆れた様子で溜息を吐いていた。

「そこまで言うんなら、先ずは名乗りを上げたらどうだ？」

貴様も王たる者ならば、まさか己の威名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか？ 雑種風情か？ 王たるこの我に向けて？」

我が拜謁の栄に俗して尚この面貌を見知らぬと申すなら、

そんな蒙昧は生かしておく価値すらない！」

アーチャー<sup>英雄</sup>にとっては自身の存在こそ世界の全て。

姿を観る・声を聴く・問いに応える事さえも彼の許可が必要であり、  
其れが彼にとっての当たり前。

簡潔に述べるなら、ジャイアニズム。

所謂、独占主義者。

ライダーが彼に対して問いを投げ掛けた事についてもそうだが、  
一番の怒りを感じている部分は自分の面を知らないと言うその一点に集約される。

アーチャーが立つ背後の空間に陽炎の様な波紋が広がり、  
其処から剣と槍の二つの武器が露わになる。

間近で観るそれらは、膨大な魔力を内包した物……つまりは宝具の類であると理解できた。

だが、其れ故に襲撃を視察していた者たちは驚愕した。

昨夜の戦闘でアーチャーは背後の歪みより数十、或いは数百の武器を取り出した。

彼が出す武器の全てが別種の物だとしたら、

それは宝具を数十、数百持ち合わせると云う事になるのだ。

宝具はサーヴァント一体、原則的に一つ。

多くても三つから四つ程度だ。

だが、此の黄金のサーヴァントには其れが通じていない。

その光景を見たセイバーとアイリスフィールは警戒レベルを最大に上げ、

ランサーも何時でも行動できるように備えた。

そんな中、ライダーは今迄得た情報を組み合わせてアーチャーの真名にほぼ辿り着いていた。

故に、戦う前にその答え合わせをしようとしたが又しても戦場に乱入者が現れる。

「——其処までだ『英雄王』」

この戦場に、現在に至るまでに存在してなかった人物の声が上がった。

それに反応して、戦場に集った全ての人が夜空を見上げた。

辺りを一帯を照らす、月の光を背にしながら白き者が参上した。

彼の者は闇夜の空から舞い降りてアーチャーが佇立する、

街灯のポールと対峙する位置にあるコンテナの上に降り立った。

「っ！」

「貴様は……！」

「ほお！懐かしいの！」

「——ふん、やっと現れたか……」

「——貴方は……！」

アイリスフィールとウェイバーは新たな侵入者に警戒し、

ランサーはその場に表れた者の厄介さを感じ、ライダーは懐かしい

顔を拝み観て喜び、

アーチャーは不機嫌な面を愉悦に変え、セイバーは驚愕した面持ち

を見せた。

新たな乱入者の名は、殺生丸。

眼下に存在するサーヴァントを一通り眺めた後、彼は確認する様に言葉を告げる。

『騎士王』アーサー・ペンドラゴン。

『フィオナ騎士団』デイルムツド・オディナ。

……………そして貴様は誰だ？」

二人の騎士を認識した後、彼は巨漢の男を眼下に収めながらそう呟いた。

そしてこの言葉にはライダーも驚いた。

まさか自分の事を忘れられているなど、思いもしなかったのだ。

「おいおい！ 余を忘れるとは何事か殺生丸よ！」

この面を見て名が出てこないなど有り得ぬであろう！」

彼は殺生丸に必死にアピールした。

そんな彼の顔を見詰めていた殺生丸は思い出したかの様に言葉にしました。

「——貴様はアレキサンダー……アレクサンドロス3世なのか？」

殺生丸は呆然としながら、ライダーの真名を語った。

その結果に満足したのか、彼は胸を張りながら応えた。

「応ともよ！ 余が世界にその名を轟かせた、征服王イスカンダルである！」

「(……………詐欺レベルで姿が違いすぎだろ)」

他の参加者に聞こえない様に、殺生丸は小さな声でそう呟いた。

彼らが出会ったのは、まだ征服王が幼き姿であった時だ。

殺生丸から言わせて貰うなら、匂いが一緒の赤の他人レベルの変わり様であった。

殺生丸は寧ろ、アレキサンダーの偽者と言われた方がまだ信じられた。

現実是非常である……

彼らの姿を視界に収めながら、殺生丸は改めて黄金の王と対峙する。

「——『英雄王』、此処は一端手を引け」

「——我に対して引けだど？ 随分と大きく出たな、獣風情が」

殺生丸の言葉にギルガメッシュは憤怒の表情を浮かべた。

そんな彼に臆する事もなく、殺生丸は言葉が続けた。

「——勘違いするな。貴様が手を下すまでも無いと言っている。

この様な些事にまで手を出すのが、貴様の王としての在り方なのか？」

「……………」

彼の言葉を聴いたギルは思案した後、背後に展開していた宝具を収めた。

如何やら殺生丸の思惑に賛同したらしい。

「——何の策を巡らせているのかは知らんが、此度は貴様の提案に乗ってやろう。

雑種共を間引く庭師の仕事は、貴様に預けて遣る。精々励めよ」

その言葉を残して、黄金の王はその姿を消した。

最強と最強、二度目となる彼らの遭遇は穏便に事が済んだ。

最強が姿を消したが、別の最強が戦場に留まる。

一体、彼の目的は何なのか？ この混沌とした戦場に表れたその理由は？

## 一時休戦

「殺生丸よ！ 久しいではないか！」

アーチャーが立ち去った後、緊迫する雰囲気をぶち壊しながら

殺生丸に話し掛けるのは征服王イスカンドル。

彼もまた、永き時を過ごした殺生丸の生涯で巡り合った大英傑の一人。

「——貴様とは、其処まで親しく接した覚えは無いのだがな……？」

「何を言う！ 共に戦場を駆け抜けた、友と呼ぶのにこれ以上の理由はなかるうて！」

「……………そうだな」

彼らを傍から見たら、明らかに温度差がある。

だがライダーはそんなのは知らんとばかり、旧友に会えた喜びを分かち合おうとしていた。

そんな二人の会話に、静観を決め込んでいたランサーも加わってきた。

「——殺生丸、こうしてお前とまた顔を合わせる事になろうとはな

……………」

「……………貴様ファイオナ様騎士団との因縁は既に決着が着いた。

今更、昔話を穿り返す事もあるまい。

——故に、その辛気臭い面を私の前に晒すのは止めろ」

殺生丸はランサーが何を言いたいのか瞬時に察し、自身が思っている事を簡潔に伝えた。

彼の物言いにはきつい部分もあるが、実際に告げている内容は

『イケメンの苦悩を抱えた表情はイラツとくるから止めろ』……………こんな処であった。

「——ああ、お前がその様に受け止めるのなら……………俺からはもう何も言わない



(……だが感謝する、白き聖者よ)」

(……何かまた、変な勘違いをしてないかコイツ?)」

生前からの因縁を清算した二人は、それ以上の言葉を紡ぐ事は無かった。

そして、最後に残った知人であるセイバーが彼に言葉を述べた。

「——貴方が聖杯戦争に参加しているのには驚きでした、殺生丸。

貴方の人物が、聖杯に託す願望が有ると云うのですか?」

「——其れは此方の台詞と言わせて貰おうか、アーサー王。

清廉潔白な貴様が、欲の塊とも呼べる聖杯戦争に参加するとは

……其れほどの願望が有るのだな?」

「……………」

「——その様子だと、私が言いたい事は大方理解しているのか……」

「——ええ、『人を視ろ』……貴方がブリテンより立ち去る前に、私に残した言葉です」

「……………」

「……私が貴方の言葉にもう少し耳を傾けていれば、カムランの戦いには至らなかつたんでしょね。

ギネヴィアの事、騎士たちの事……私は何も理解していなかつた」

セイバーは自責の念を抱きながら、殺生丸と対話していた。

彼女は未だに後悔している、過去の過ちを……

そんな彼女がこの聖杯戦争に願う願望など知れている。

「——殺生丸、私は貴方が敵だとしても加減はしない。

我が願いは、決して誰にも止められはしない!」

彼女の願いは、歴史の改ざん。

故郷であるブリテンを滅びの運命から解き放つ、唯その一点に限る。

殺生丸はセイバーの願いが手に取る様に分かる、己が身を少し悔やんだ。

円卓の騎士たちと行動を共にした彼からしてみれば、彼女の願いはその全てを無に還すもの。

だが、殺生丸はその願いをある程度肯定していた。

征服王や英雄王が聴けば彼女の王道を否定するだろうが、殺生丸にとってそんなのは如何でもいい事だ。

彼はその人生で多くの人々を救ったとされるが、その行為も彼にしてみれば自身の欲を貫いた結果だ。

故に、彼女が国を救いたいと言う願いも彼にしてみれば納得は出来ていた。

殺生丸はサーヴァント同士の会話を一通り済ませた後、

セイバーの背後に佇むアイリスフィールに顔を向けていた。

彼に見詰められた彼女は、体をビクツと震わせて一步後ずさった。

その態度に内心ため息を吐きながら、殺生丸はアイリに話しかけた。

「——そう怯えるな、アインツベルンの女よ。」

私は、貴様に……いや貴様たちに話があつてこの場に姿を現したのだ」

「……貴方が、私たちに話がある？」

「——そうだ、貴様が抱えている……聖杯の中身についての話だ」

「っ!」

彼の指摘にアイリは焦りを感じた。

まさか、自分がどの様な存在なのかを一目で見破られるとは思っていなかった。

彼女はサーヴァント同士の会話に口を挟まず、戦況を見極めようとした。

切嗣からの連絡も途絶えたままであつた為、自身から行動を起こすのは避けていたのだ。

故に、自身がこの場で出来る事を最優先していた。

だが、この超常の存在に目を付けられたのは予想だにしなかった。

——殺生丸

アーサー王伝説にも登場した、特異な存在。

其の身は獣で在りながら、円卓の騎士たちと協力して蛮族共を退けた者。

彼が騎士たちに協力した理由は、蛮族たちが彼の探し求めていた秘宝のかけらを持っていた為……と云うのが有力な説だ。他には略奪されているブリテンの民に慈悲の心を痛めて立ち上がった等の説がある。

そんな諸説が残されている『救世主』に話がある等と言われたら普通は驚く。

其れに、その内容が聖杯についてだと言うのだから更に驚きだ。

アイリは切嗣に連絡が取れない状況でこの案件を進めるのを戸惑った。

もし、彼が話す内容が重大なモノだとしたら絶対に聞かなければならないからだ。

そんな事を思考していたアイリに、殺生丸は話の続きを語った。

「――衛宮切嗣の身を心配しているのなら安心しろ。

奴の安全は確保されている」

「っ！ キリツグの事を知っているの!？」

なら教えて、彼はいま如何しているの!」

「――そう喚かずとも聴こえている。奴は無事に戦場を離脱した。

少し経てば、貴様にも連絡が入る筈だ」

「……はあ、ホントに良かった」

アイリは心底安堵した。

殺生丸が嘘を付いている可能性もあったが、彼女はその可能性は無いと考えた。

殺生丸が本気になれば、対峙する相手が騎士王だとしても容易く打倒されるのは明白。

そんな彼が嘘を付いてまで、此方と交渉しようとは考え難かった故だ。

「――交渉の場は貴様らの陣地である、郊外の森に建つ城を会合に設けたい。

その方が、其方としても何かと便利であろう」

「……ええ、了解したわ。アインツベルンは貴方の要求に応じます。

会合の日時は、明日の s y 「待てえい！其れはつまり、酒盛りをすると云う事だな！」

「……………は？」

「……………貴様は何を言っている？」

殺生丸とアイリは突然訳の分からない事を言い出したライダーを疑惑の目で見詰めた。

だが彼はそんな視線を物ともせず、既に酒盛りを行う事だけを考えていた。

彼の頭の中では、話し合いをする＝酒盛りをすると同じ様なモノ。故に二人の話に興味を惹いて、自身もその会合に参加しようと目論んでいるのだ。

「よし！ そうと決まれば、アーチャーの奴も誘って来なくては往けないな！」

「おい、私の話を聞いているのか征服王？」

「応とも！ つまりはセイバーたちの城で酒を飲むのであろう？」

「違う、全く以て違う」

「まあそう固い事を言うな。」

数と酒は余が集めておく故に、会場の準備は任せたぞ！」

そう言い残し、ライダーは来た時と同じようにチャリオットを操り帰路につく。

ライダーのマスターであるウェイバーは、終始ライダーの隣で怒鳴り散らしていたが強烈なデコピンで沈黙させられていた。

その場に集った者たちは、ライダーの後姿を呆然と眺めていた。だが何時までもそうしている訳にはいかない為、話を続ける事にした。

「……………アインツベルン、如何するつもりだ？」

彼奴があのように告げた以上、必ず実行するだろう」

「如何するって言っても……………」

殺生丸はアイリに対してそう告げたが、彼女からしてみればホントに勘弁してほしかった。

破天荒の塊であるライダーを野放しにしているは、話し合い処では

無いからだ。

「……寧ろ、ライダーの提案は其方にとって都合が良いのかも知れないな」

「それはどういう事？」

「貴方は私たちと話し合いをしたかったのでは無いの？」

「……私が話す内容は、何も貴様らだけの問題では無いと云う事だ。」

「——そう言う訳で貴様も参加するか？ ランサーの魔術師」

「なっ！」

セイバーとアイリは殺生丸が語り掛けた方角を見遣った。

其処には、彼女たちを出し抜いて衛宮切嗣に襲撃を仕掛けたケイネスの姿が在った。

「……何時から、私の存在に気づいていたのかね？」

「——衛宮切嗣を仕留めきれず、此方に撤退して来たのは始めから知っていた」

「……チツ！」

ケイネスは忌々しそうに殺生丸の顔を見ていた。

後一步の処で撤退して来たのは事実なので、彼はその評価を素直に受け入れた。

彼はプライドが高いので本来この様な評価は受け付けないのだが、殺生丸とアーチャーの影響で少ない変化が訪れていた。

『事実是在りのままに受け入れる』、人として当たり前前の事を彼は漸く手に入れたのだ。

まあ、其れで気持ちの持ち様までは変わらないのだが……

表情を強張らせながら、ケイネスは殺生丸の提案を蹴った。

「私を愚か者と一緒にしなさいで貰おう。」

それ故に、その提案は断らせて貰う。

「……まあ私の参加を其方のご婦人が許可するとも思えないのでね」  
「……………」

アイリはケイネスに対して鋭い視線を送っていた。

まあ、彼女の警戒は仕方ないだろう。

先ほどまで、ケイネスは衛宮切嗣を殺そうとしていたのだ。

必要以上の警戒をするのは寧ろ当たり前だ。  
そんな彼女にケイネスは嗤笑しながら告げた。

「……アインツベルンの魔術師。」

私は、貴様たちに対して行った事を後悔はしていないぞ？

聖杯戦争は正真正銘の殺し合い。

貴様たちが暗殺を企てた様に、如何な手段を用いても勝たなければ  
ならないのだ。

故に私は、手心などを加えるつもりは無い。

其れを肝に命じて於いてくれたまえ。

……魔術を競い合う要素など、初めから無かったのだ。

過去の私は、何を考えてこの様な催しに参加しようと思ったのか  
……」

最初は普通に語っていたケイネスだが、最後の方は自身の愚かさを  
小さい声ながらも述べていた。

彼は天才の領域に属する人間だが、其れでも英霊などと比べられた  
らちつぽけな存在だ。

その事実を彼は冬木にて、認識する事が出来た。

故に、ケイネスは自身が持ち得る限りを尽くしてこの戦いに挑むの  
だ。

「ランサー、私たちも今宵は撤退するぞ」

「はっ、仰せのままに。」

——聡明な騎士よ、次は相見える際は我が槍で貴殿の首級を挙げよ  
う」

「……ランサー。」

ええ、貴方の槍は我が剣で受けよう」

「——ふっ、是非も無い」

ケイネスが去り、其れに続いてランサーもその場を後にした。  
殺生丸も用が済んだのでその場を後にしようとしていた。  
そんな彼にセイバーが言葉を投げ掛けてきた。

「——殺生丸、貴方は何故この戦いに参加しているのです？

……貴方は生前より、自身の願いを実現し続けてきた筈です？

そんな貴方が……なぜ？」

セイバーは彼の事を知っているが故に、その問い掛けをした。

彼女が知る彼ならば、願望など無いと思った故だ。

殺生丸はセイバーを一瞥した後、その答えを簡潔に告げた。

「――哀れな男が、幼子の救いを求めた。」

この戦いに参加した理由は……其れだけだ」

「――」  
そう言い残して殺生丸は今度こそ、その身を夜空に溶け込ませて消えた。

セイバーはそんな彼を暖かな眼で見詰めていた。

自分が過ぎ去った時代でも、殺生丸は一貫して弱者を救済していた。

彼女は殺生丸が欲に駆られて、この聖杯戦争に参加したのではと危惧したのだ。

だが、彼は何も変わっていないかった。

自身が理想とする、気高き精神はそのままだった。

騎士王アルトリア・ペンドラゴンが憧れるその姿は、色褪せていなかった。

『(アルの奴、相変わらずのアホ毛とまな板だったな。』

あと話を聞かない筋肉ダルマは俺の手でコロコロしよっ♪(『

………初めから色褪せていたなら、そりゃあ変わらないだろうね！

## 一時の会話

——アインツベルン城

「キリツグ……ホントに怪我は大丈夫なの？」

「……ああ、僕は大丈夫だよ。君の治療のお蔭で随分とマシになった。

其れより、殺生丸との会合について話をしよう」

「そのことについては御免なさい。貴方の承諾も得ずに此方で勝手に決めてしまつて……」

「いや、アイリの判断は正しいよ。

奴が聖杯についてどんな事を話すのかは知らないけど、

此方が知り得ない事を情報として持っているのは確かな筈だ」

切嗣はアイリスフィールの判断に賛同した。

彼女が思考した様に、切嗣もあの救世主が何の策も無く

此方と交渉を行うとは考え難かったのだ。

セイバー陣営は、アインツベルンが聖杯戦争に参加する際に建設した城に於いて体を休めていた。

倉庫街をサーヴァント達が解散した後、セイバーとアイリは用意されてる城に向かった。

到着した城には、切嗣の無事な姿と彼の協力者である久宇舞弥の姿が在った。

アイリは彼の無事な姿をその眼に収めて安堵した。

殺生丸から教えられていた情報とは云え不安はあったからだ。

そんな彼女に切嗣は苦笑いをしながら自身の身に何があったのか説明した。

「——言峰綺礼が貴方を助けた!?!」

「……アイツが何を考えて僕を助けたのかは知らないけど、



事実あの場に奴が現れなかったら死んでいただろう」

「……危険な相手だけど、キリツグを救ってくれた事については感謝しなくちゃいけないかしら?」

「そんな事は考えなくて良いさ。」

目的があつて僕を助けた筈だ、つまり利害の一致と云う奴だよ」

「……その後はどうなったの?」

まさか、ホントに貴方を救う為だけに姿を現したんじゃないんでしょう?」

「……言峰綺礼についてそれ以上は分からない。」

奴が姿を曝した直後に、アサシンが襲撃を仕掛けて来たんだ」

「アサシン!? 脱落したんじゃないの!?!」

彼女の驚きに切嗣は少し呆れながら言葉を告げた。

「……アイリ、君はサーヴァントが脱落したら其の有無を

確かめる事が出来るんじゃないか?」

「……あつ」

彼女も如何やら相当テンパっていたらしい。

普段なら気付く事もこの状況下に於いてはそれが鈍ってしまったている。

自身の発言に恥ずかしがっている彼女を視界に収めながら、

切嗣は話の続きを語った。

「言峰を襲ったアサシンは、遠坂邸を襲った際に姿を見せた個体だった」

「個体ってどういう事?」

「——如何やら、アサシンのサーヴァントは複数存在するらしいんだ。

襲撃をしたアサシンは何らかの方法で、マスターであった言峰と契約を絶って

今は対立関係になっている。まあその辺りはあの救世主様が何かしたんだろうけど……」

そう告げた切嗣は、自分が助けられた時の状況を思い出していた。

窮地を脱した切嗣は、新たな敵である綺礼の登場に焦っていた。直前まで戦闘をしていた彼には、体力と魔力共に残されていない。それ故に、未だ危険状態は変わり無かった。そんな折、新たな乱入者がその場に現れたのだ。

「――綺礼殿、その御仁に手を出すのはお止め下さい。」

まだその方に退場されるのは、此方としても不都合なので」

「何っ―！」

綺礼はその場を離れ、声の主に視線を送る。

彼の視界の先には、あの襲撃で捨て駒にしたアサシンの姿が在った。

ザイードの登場は流石に予想しきれなかった様で綺礼は狼狽えた。

「……何故、貴様がまだ存在する？ あの場合で確かに消滅した筈だ。」

現に、貴様とのラインは途切れたままだ……一体なぜ？」

「――ふっ、私の身の上話など語った処で貴殿には関係ない事です。」

其れよりも其処に居る御仁を開放して下さい」

「……何が目的だ？」

「……其れこそ貴方に話す必要は無い。」

あと先に申して於きますが、この場にアサシンを呼ぶのは良い選択とは思いませんぞ？

此方としても同胞をこの手に掛けるのは避けたい事ですし、

元とは云えマスターの命を狙うのは気が引けますからな」

そう言っつて、ザイードはその手にダークを構えた。

綺礼はアサシンと切嗣の顔を見比べ思考を巡らせた後、その場を撤退する事に決めた。

得体が知れないザイードを相手にするより、切嗣を救った事実には満足する事にしたのだ。

「――衛宮切嗣、貴様とは何れ巡り合う時が来る。」

その際に、私の苦悩を解き明かすのに協力して貰おう」

その言葉を残して彼は闇へと消えた。

其れを見届けたザイード自身も、霊体化で姿を消しながら切嗣に伝えた。

『――衛宮切嗣殿、貴殿の奥方とサーヴァントはご無事ですのでご安心召されよ。』

お連れの方には多少眠って貰いましたが、命に別状は有りませんので悪しからずに』

そんなアサシンに切嗣は訝しみながら言葉を返す。

「……お前は何がしたいんだ？」

『――貴殿の奥方に伺えば自ずと理解しましょう。帰路はお気をつけて下され』

それを最後にサイドはその場を後にした。

切嗣は彼らの気配が完全に消え失せたのを確認した後、舞弥を回収してその場を離脱した。

自身を助けた、アサシンの事を考えながら……

彼はアイリの報告から、間違いなくあのアサシンが殺生丸の手の者だと理解した。

この話し合い場を設ける為に、自身は救われたのだと想着いたのだ。

何故、セイバーのマスターと知っていたのか？

そして、この会合で奴がどの様な話を持ち出してくるのか？

切嗣は対処する案を脳内で纏め上げた。

そんな彼にアイリは困った顔をしながら、ライダーの事も告げる。

「キリツグ、殺生丸の事もそうだけどライダー達の対応も如何にかしなくてはいけないわ」

「そうだな、其方の対処もしなくてはいけないか……」

彼はサーヴァント達の問題も思考した。

「――いつそ、全員を同じ場所に集めようか？」

「！ そんな事をして大丈夫なの？」

「複数の敵が同じ場所に居合わせたら、寧ろ手が出し難い筈だ。

殺生丸が僕たちに話す内容も場合によっては有効活用できるかも知れない」

「……ライダーの言葉通りだとしたら、アーチャーも参加するでしょうし

その考えは良い知れない。でも、殺生丸が話す内容については危険じゃない？」

「いや、ライダーが君の話してくれた通りの男なら内緒の話なんて格好の獲物さ。

寧ろ目の前で話を聞かせて大人しくさせた方が、此方としては遣り易い」

切嗣は粗方の方針を決めたので、その対応としてアイリに指示を送った。

「アイリ、君にはセイバーのマスターとしてそのまま対応してくれ。

僕の正体を正確に知っているのはロード・エルメロイと言峰綺礼、其れと殺生丸の陣営だけの筈だ。

ロードは来ないだろうし、言峰だって脱落者として表舞台には早々出て来れない。

ライダーのマスターは知らないだろうし、アーチャーのマスターである

遠坂時臣も知らないだろう」

「遠坂は言峰と同盟を結んでいるから知ってるんじゃないの？」

「その可能性は低いと思うよ」

「？」

「——言峰が僕を救援に来たのが、奴のほぼ独断だからさ。

あの場で助けるのは愚者と何も変わらないからね。

そう考えると、同盟者の遠坂による指示じゃないのが理解できる。

厄介な奴に目を付けられたのは手痛いはその御蔭で助かった。

アイツ自身が僕に執着している間は、同盟関係にあっても遠坂には情報を話さない筈さ」

切嗣は自分でその可能性を語りながら身震いした。

戦略として考えた場合、アサシンの使役者である言峰の口から

自身の情報が漏れないのは有り難い。

だが、心境としては最悪である。

本国で情報を得たその時から一番に警戒していた存在が、何の因果か今では利用できる駒へととなっていたのだから……そんな彼にアイリはそつと後ろから抱きついた。切嗣はその行動に初めて弱音を吐いた。

「……もし……もし僕が今ここで何もかも投げ出して逃げ出したら、君と一緒に付いて来てくれるかい？」

「イリヤは……城に残したあの子は如何するの？」

「戻って連れ出す、邪魔する奴は殺す。」

それから先は……僕の人生を全て君とイリヤの為だけに費やす！」

アイリは悲痛な表情で彼の本音を聴いた。

衛宮切嗣は機械にはなれない。

彼はこの聖杯戦争に参加している人の中でも脆い部類の人種だ。

そんな彼の弱い部分が、露わになっていた。

「……逃げられるの？」

「逃げられる！……今ならまだ間に合う……！」

「嘘」

「ッ！」

アイリは理解していた。

彼の脆さも……弱さも……彼女は知っている。

「……それは嘘よ。貴方は決して逃げられない。」

聖杯を捨てた自分も……世界を救えなかった自分も……貴方は決して許せない。

きつと貴方自身が最初で最後の断罪者として……衛宮切嗣を殺してしまう」

「……怖いんだ。奴が……言峰綺礼が僕を狙っている。」

ケイネスも今迄の魔術師とは桁が違う。

何より、あのサーヴァント<sup>殺生丸</sup>は僕の行動を読んでいた。

君を犠牲に戦うのに……イリヤを残したままなのに……危険過ぎる！

——もし……もし僕が失敗したら？ 君の犠牲も、イリヤを救う事も……何も出来ない！」

「——貴方一人を戦わせない。私が守る。セイバーが守る。其れに……舞弥さんも居る」

「アイリ……」

衛宮切嗣は人間だ。

どうしようもない、唯の弱い人なのだ。

そんな彼を支える……白き姫君。

衛宮切嗣  
機械を人に戻した……最愛の妻。

彼女と彼女が産んだ最愛の子が居る限り、彼は進み続ける。

……いや、彼女たちが居なくても衛宮切嗣はその歩みを止めはしないだろう。

——彼が信じた希望がその手に入るまで……

だが、彼は知らない。

たとえ聖杯が正常だったとしても、彼の祈りは叶わない……決して……

——双子館（東）

「今宵のセイバー足止めは見事であつたぞ、ランサー」

「はっ！ 勿体無きお言葉感謝します、我が主よ。」

——ですが、御首級を挙げるには至らず申し訳ありません」

「良い、欲をかいて事を仕損じるよりはマシな結果だ」

「——このデイルムッド、我が主の言葉には感服の想いです」

「ふんっ、適当な事をペラペラと……まあ良い。」

私も無様な戦略を取って今日は疲れた、故に此れより休息に入る。

「貴様には周囲の警護を任せるぞ」

「はっ！ この私に万事お任せを！」

そう言い残してケイネスは寝室へと移った。

彼らが拠点にしている此処は、第3次聖杯戦争の折に参加者の一組

である宝石魔術の大家、

エーデルフェルトの魔術師が建てた館の一つである。

一つと表現する様に、冬木にはもう一つ彼らが建てた館が存在する。

場所は深山町に存在する物と新都に存在する物で、

ケイネス達が拠点にしているのは新都にある方だ。

彼らは飛行機等も爆破する衛宮切嗣に対応する為に、

元の拠点である冬木市ハイアットホテルを放棄し此方へと移動した。

拠点に新たな魔術を施すのに魔力を使い切り、流石のケイネスも疲れた様だ。

ベットに入るとすぐに寝入ってしまった。

そんな主の姿にランサーは感動していた。

今のケイネスの姿は、ランサーの眼から見たら素晴らしいの一言であつた。

己が全力を注ぐ姿は、嘗て殺生丸に挑んだ時を思い出す。

自身が持ち得る最高の状態を作り、強大な敵に挑む。

不謹慎だが、ランサーは殺生丸に出会えた事を感謝した。

もし彼がアーチャーと戦闘を行わなかったら、ケイネスとの進展は有り得なかつただろう。

故にランサーは、大英雄に感謝するのだ。

『ランサーがベットで寝てるケイネスの事を考えている……コレはイケルじゃなかった！ランサーがアッチにイッテしまっわ！考えるのよソラウ、二人を助けられるのは貴女だけなのよ！……でも、アッチも一寸だけよ？ホンの少しだけ……興味があるのよね……』

——遠坂邸（仮）

「英雄王、ご帰還されましたか」

「——如何した時臣？ 随分と愉快そうだな。」

「……そんなに我が戦わなかったのが嬉しかったか？」

「っ?! 決してその様な事は……!」

「——フツ、まあ良かろう。我が財に加える宝も見つけた。」

殺生丸 彼奴に有象無象の雑種共を間引かせて、最後はこの我手ずから幕を引いてやろう。

時臣、委細は任せておくぞ」

そう言い残して英雄王はまた街へと散策しに出掛けた。

時臣は深いため息を吐きながら、椅子に腰かける。

「……はあ、英雄王の機嫌が損なわれていないのは幸いだった。」

未だに私の首は繋がっているか……」

殺生丸との頂上決戦を繰り広げたアーチャーに暴れられては堪ったものではない。

それ故に、かの王の扱いは細心の注意を払わなければならないのだ。

「……綺礼から連絡が入ってこないのだが、大丈夫なのだろうか？」

サーヴァント達が集結した際に一端席を外した弟子に時臣は少し心配した。

英雄王等の危険物を扱っていると、自身の心労を吐ける存在と云うモノは貴重なのだ。

そんな彼は一体何をしているのだろうか？

——紅州宴歳館 泰山

衝撃のマーボーを食していた。



えっ？ 説明が雑過ぎる？ ……仕方が無い、順を追って説明しよう。

言峰綺礼は衛宮切嗣を救出↓言峰の愛の告白（違う）、切嗣が振る（違う）↓ザイドKY登場↓愛し合う両者を引き裂く（絶対違う）↓言峰が告げる、切嗣との再会の誓い（これホント）↓そして、マーボーを食す

えっ？ 話が飛んだ？ いやいや、これはホントだよホント。

より具体的に状況を述べると、帰還の最中にお腹が減る。

でも、早く帰らないと不味い事になる。

でもやっぱりお腹が減る。

その時、彼の視界に泰山の看板が見えた。

よし、マーボーを食おう。

完璧だ。反論の余地が無い位に完璧な説明だった。

あっ？ 時臣に説明？ 髭の事なんて知らん！

言峰さん、メはビシツと決めちゃって下さい！

「食うか——？」

「食うか——！」

そのセリフは十年早いよ！

——マツケンジー家

「……何だか、この配置に悪意を感じた」

「何を言っとるんだ坊主。」

まあ其れより、明日持つていく酒を今の内に見繕うぞ！」

「お前はホントにアインツベルンの城に行くのかよ！」

「当然であろう。世に名高い英傑共が集まって斬り合うだけってのも味気ないではないか。」

ココは一つ、酒でも飲み交わしながら腹の底を見せ合うのも一考だ

ろう」

「……僕、この戦いを終えたら実家で養生するんだ」

「んっ！ 坊主、そのセリフはフラグと云う奴か！」

「五月蠅い！ 何でお前はそう変な言葉を覚えてくるんだよ！」

「がっはっはっはっは！ 其れは余が征服王であるが故だ！」

「……『征服王』万能過ぎだろ」

この陣営が一番、仲が良いかも知れない。

——間桐邸

「——ザイド、任務ご苦労だったな」

「いえ、私は楽だったので問題は有りません。」

殺生丸殿の方こそ、アーチャーを退ける役など大した御方です」

「私も遠見の水晶で視てたけど凄かったよねー、ジル」

「ええ、流石は殺生丸と云った処でしょう。」

かの王と矛を交えずに退却させるとは……」

「……だけど良いのかよ？ あの場で衛宮切嗣を倒さなくて？」

「——危険な男に変わり無いが、対処しようと思えば何時でも出来る。」

あの男も親を務めるのなら……命程度は見逃してやろう」

「……相変わらず、変な処で律儀だなお前」

「何を言うのですか雁夜殿。殺生丸殿は慈悲の心を持つ御方。」

どんな暗殺者であろうとも、その広きお心を以てして接して下さい

素晴らしい御仁ですぞ」

「……いや、親じゃなかつたら真っ先に倒していると思うぞ」

「まあ、雁夜の言う通り殺生丸は容赦ない時はないですよ」

「ねえねえ、ソレってロリコンって呼ばれる人の事だよね？」

「……えっ？」

桜の言葉に反応して殺生丸を見遣ってしまった、雁夜、ジル、ザイ

ドの三名。

「テレビでね、子供が好きな大人はそう呼ばれるんだって。

今年はそのような人が多いから、皆さん注意しましょうねってテレビのお姉さんが言ってたの」

「……………」

その場から静かに立ち上がり、徐々に殺生丸から距離を取る男三人衆。

そんな彼らに声を掛ける、白い悪魔。

「——何処に往くつもりだ、お前たち？」

「いっいやくガスの元栓閉め忘れたから少し見に行つて来るよ、うん」

「私は地下に設置した植物に水を与えなくてはいけない時間なのでこれで失礼します」

「私は日課にしているダンス教室のレッスンが始まるので此れにて御免」

そんな彼らに爽やかな笑みを浮かべて詰め寄る殺生丸。

彼の笑みに引き攣る男三人。

「——まあ待て、そんなに急ぐ必要は無いだらう。

もう少し……………話をしよう?」

『いっいやくそれは遠慮して「H A ・ N A ・ S I ・ W O ・ S I ・ Y O ・ U ?」是非聞かせて頂きます!!』

「……………ふふっ、今日も皆は仲良しさんだね!」

今日も間桐陣営は元氣一杯だった、まる。

## 聖杯問答の始まり

——郊外の森

時刻は、辺りを闇が支配し始めた頃。

一般の家庭であれば、家族で食卓を囲んで食事を取っている時であろう。

アインツベルンの森に轟音が響き渡る。

元凶はライダーが操るチャリオットから発せられていた。

アイリスフィールは自身の体に奔ったもので、誰がやって来たのかを大方理解した。

この森に張っている魔術結界は彼女と連動していて、

何時何処で誰が侵入して来ても彼女であれば瞬時に理解できる。

まあ、ライダーの様に結界をぶつ壊して侵入されたら堪ったものではないが……

こんな無茶な入り方をするのは、彼女が知っている限りではライダーしか思い浮かばなかった。

傍らに控えているセイバーもその意見に賛成していた。

「先ほどの雷鳴、そして憚る事を知らないこの出方は恐らくライダーでしょう」

「彼はもう少し、上品な入り方をしてくれないかしら？」

「其れは無駄でしょう。ライダーにその様な気品が有ると思えませんし……」

「はあ、結界を張り直さなければいけないわ……」

彼女は頭が痛くなる一方である。

此れから戦いでは無く話し合いとは云え、相手は曲者揃いの英霊たち。

無駄な考えは省いて挑まなければならないのに、新たな仕事を増やす征服王。

会合を前にして、もう休息を取りたいと思ったアイリフィールであつた。

「セイバー！ 酒盛りに出向いてやったぞ！ 宴に適した場所に案内致せ！」

この場所を宴の席にするには、少々埃っぽくて敵わん！」

玄関ホールに向かったアイリとセイバーは、

門を突き破つて侵入したライダーにそう言われて若干キレていた。

「……ライダー、貴様もう少し静かに来れないのか？」

「あん？ 邪魔な木々が生い茂っていた故に伐採してやったまでよ。

客人を招くのに、手入れもしてないのは駄目であろう」

「……私たちは貴方を招待したつもりは無いのよ？ 征服王さん？」

「まあそう固い事を言うで無い、セイバーのマスターよ。

今宵は皆で大いに盛り上がり上ろうではないか！ がっはっはっはっはっはっは！」

「……………はあ」

ライダーが上機嫌なのに対してセイバーとアイリ、

其れとライダーのマスターであるウェイバーは三人同時に溜息を

吐いていた。

振り回される存在は、何も敵だけでは無い。

ライダーに最も振り回されている可哀そうな奴は、何を隠そうこのウェイバーだ。

だが其れは、王様サーヴァントを召喚してしまった彼の自業自得でもあるが……

宴の場所は、中庭の花壇に決まつた。

彼らは後に来るサーヴァント達を待たず、先に酒盛りを始めていた。

セイバーなどは殺生丸が来るまで待つ気であつたが、

ライダーが既に飲み始めていたので自身も諦めて彼に足されるまま酒を頂戴していた。

彼らの近くには邪魔にならない様に待機した、アイリとウェイバーの姿も在った。

ライダーが持ち込んだ酒樽のワインを柄杓で掬い上げ、互いに飲み干しながら先ずは彼が話を切り出す。

「聖杯は、相応しき者の手に渡る定めにあるという。」

それを見定めるための儀式が、この冬木における闘争だというが、なにも見極めをつけるだけならば、血を流すには及ばない。

英霊同士、お互いの『格』に納得がいったなら、それで自ずと答えが出る」

「——それで、まずは私と『格』を競おうというわけか？ 征服王？」

「その通り。お互いに『王』を名乗って譲らぬとあつては捨て置けまい？」

云わばこれは『聖杯戦争』ならぬ『聖杯問答』、どちらがより聖杯の王に相応しき器か。

酒杯に問えば詳らかになると云うものよ」

『——戯れは其処までにしておけ、雑種』

騎士王と征服王、彼らの会話に割って入る存在は第三の王……英雄王ギルガメツシュ。

いま此処に、三騎の王が揃った。

彼の登場に、ライダー以外はその身を強張らせた。

「……本当にアーチャーを呼んで来たのか、征服王？」

「応よ！ このイスカンダル、約束は違えぬからな！」

アーチャーとライダー以外、この場に居る全員が『マジで余計な事を……』と心中で思った。

「其れにしても遅かったではないか、金ぴか？」

まあ余と違って歩行<sup>かち</sup>なのだから無理もないか」

「——よもやこんな鬱陶しい場所を宴の席に選ぶとはな。

我にわざわざ足を運ばせた非礼をどう詫びる？」

「まあそう固い事を言うでない。ほれ、駆けつけ一杯」

ライダーは柄杓で掬ったワインをアーチャーに差し出す。

不機嫌なアーチャーはライダーの誘いを断ると思つたが差し出さ

れた柄杓を受けとり、

何の気負いも見せずにワインを飲み干した。

「何だこの安酒は？　こんな物で本当に英雄の格が量れるとも思っただのか？」

「そうか？　この土地の市場で仕入れた内じやあ、コイツはなかなかの逸品だぞ」

「そう思うのは、お前達が本当の酒を知らぬからだ。雑種めが」

アーチャーが掌を虚空に差し出すと、其処から黄金の揺らぎが現れて黄金の瓶と杯を排出する。

瓶の中身には、澄んだ色をした酒が入っていた。

「見るがいい。そして思い知れ。これが王の酒と云う物だ」

「おお！　これは重畳」

受け取った杯に酒を注ぎ、他の二名にも手渡すライダー。

彼はアーチャーが自慢する酒を早々に飲みたいらしい。

「コイツは美味いっ！」

「っ！」

セイバーとライダーは同時に酒を呷り、その美味さに驚愕を示した。

彼らも王として国のトップに座っていた存在。

故に、民草が飲む酒より遥かに上質な物を今迄の人生で呑んできた筈だ。

だがこの酒は、生前のどの酒よりも濃厚で透き通った味わいを魅せた。

「酒も剣も、我が宝物庫には至高の財しか有り得ない」

ライダーの称賛も当然と受け取って自身の酒を呷るアーチャー。

そんな彼が、虚空に向かって言葉を投げる。

「――それ故に、我が宝物庫に貴様の財を加えて遣るのは名誉な事であるのだぞ？」

『――妄言も大概にしろ、アーチャー』

最後に姿を現すのは、白銀のサーヴァント『殺生丸』。

彼の登場に漸くかと騒ぎ立てたのはライダー。

「お主も随分と遅かったのではないか、殺生丸？ 一体何をしていたのだ？」

「——貴様には関係ない事だ」

「冷たい反応だのお。……そうかつ！」

いま現世の間で流行しているツンデレと云う奴か！」

「煩い黙れ」

「……何か余に対してだけホントに冷たくないか？」

「……………」

「無視か！」

殺生丸はライダーの言葉に無視を決め込みながら、サーヴァント達の傍らに立ち尽くす。

そんな彼に疑問を抱き、セイバーが話しかける。

「如何したのですか、殺生丸？ 貴方も此方に座ると良いでしょう」

セイバーは近くの地面を叩き、其処に座る様に足した。

だが殺生丸は其れには応じずに腰から刀を取り出す。

其れには流石に目の色を変えて立ち上がるセイバー。

ライダーとアーチャーも疑いの眼を以て彼を見遣る。

殺生丸はそんな三者に目もくれずに刀を一振り。

斬った虚空が裂け、其処からイスとテーブルが飛び出す。

セイバーは眼を見開き、ライダーは感心し、アーチャーが満足げに座る。

……つてか早いよ英雄王！

彼は表情を愉快なモノを見たと言いたげに言葉を述べる。

「——良いぞ、己が身を弁えて我の足を用意してくるとは感心だな」

「——貴様たちも座ったら如何だ？」

殺生丸はそんなアーチャーを無視してセイバーとライダーにも着席を言い渡す。

ライダーは遠慮なく、セイバーは失礼しますと一言述べて席に座る。

「何だ何だ！ お主も宴を楽しみにしていたのではないか！」

「……地べたに座りながら貴様たちの話を聞く気にはならなかっただ



けだ」

「分かった分かった！ 兎に角、金ぴかが用意した酒でも飲んで今は楽しもうぞー！」

「……酒は貰うぞ」

ライダーが何時の間にか注いでいた酒を受け取り一口含む。

殺生丸は一瞬目を大きく広げた後、残りを飲み干した。

その反応に英雄王も顔を満足げにした。

口には出さずとも表情で理解出来る。

そして役者が揃った処でライダーが本題に入る。

「では役者も出揃った処であるし、各王に問うて於こう。

まずはアーチャー、貴様がどれ程の大望を聖杯に託すのか其れを先ずは聞かせて貰おう」

「仕切るな雑種。第一、聖杯を奪い合うと云う前提からして理を外しているのだぞ？」

「ん？ ソイツは如何云う事だ？」

「——抑々に於いて、アレは我の所有物だ。世界の宝物は一つ残らず其の起源を我が蔵に遡る」

「じゃあ貴様、昔聖杯を持っていたことがあるのか？ どんなもんか正体も知ってる？」

「知らぬ」

「はあ？」

ライダーはアーチャーの言葉に気の抜けた声を出す。

彼はその様子を視て、鼻で嗤いながら言葉を続ける。

「雑種の尺度で測るでない。我の財の総量は、とうに我の認識を超えている。」

だが『宝』であるという時点で我が財であるのは明白だ。

それを勝手に持ち去ろう等と——盗人猛々しいにも程がある」

アーチャーの言葉を聴き遂げたセイバーはその表情を歪めて告げた。

「錯乱したサーヴァントの言と云うのは聞くに堪えないな」

其れに対して、アーチャーは視線を鋭くして彼女を見遣る。

ライダーはそんな彼らに落ち着けと宥めながら自身の考えを告げる。

「いやいや、其れはまだ分からんかも知れんぞ、セイバー。」

殺生丸が告げていた様に、其の者が彼の英雄王で在るならば間違いでもあるまい。

——じゃあ何か？ 聖杯が欲しければ、貴様の承諾さえ得られれば良いと？」

「然り。だがお前ら如き雑種に、我が褒賞を賜わす理由はどこにもない」

「貴様……もしかしてケチか？」

「戯け。我の温情に与るべきは、我の臣下と民だけだ。」

故にお前が我の許に下ると云うならば、杯の一つや二つ、何時でも下賜してやつても良いぞ？」

「——そりや出来ん相談だわなあ。」

でもな、アーチャー。貴様、別段聖杯が惜しいって訳でも無いんだろう？」

「無論だ。だが我の財を狙う賊には、然るべき裁きを下さねばならん。」

——要は筋道の問題と云う奴だ」

「つまり、何なんだアーチャー？ そこにどんな義があり、どんな道理があると？」

「——法だ。我が王として敷いた——我の法だ」

最古の王は自身が下す決断を絶対のモノとしている。

其処にどんな善が在ろうが、どんな悪が存在しようとも関係ない。

ただ王が敷いた法こそが、絶対の掟。

「然り、其れでこそ王と云う者であろう。」

だがなアーチャー？ 余は聖杯が欲しくて仕方ないんだよ。

つで、欲した以上は略奪するのが余の流儀だ。

何せ、このイスカンダルは——征服王であるが故に」

「是非もあるまい。お前が犯し、俺が裁く。問答の余地など何処にも無い」

「うむ。そうなる後は、剣を交えるのみ。」

其れとアーチャー、兎も角この酒は飲みきってしまったわんか？

殺し合うだけなら後でも出来るだろう？」

「当然。其れとも貴様は、私の振る舞った酒を蔑ろにする気でいたのか？」

「其れこそ愚問よ。これほどの美酒を捨て置けるものか」

ライダーはアーチャーの言葉に満足気にしながら、新たに注いだ酒を呷る。

そんな彼にセイバーが問いを投げる。

「——征服王よ。」

お前は、聖杯の正しい所有権が他人にあると認めた上で、尚且つ其れを力で奪うのか？

そうまでして、聖杯に何を求める？」

セイバーは二人の王としての在り方に憤りを感じていた。

王とは第一に民草の救済してこそと考える彼女には、彼らの思想は受け入れられないのだ。

故に、征服を良しとするライダーが聖杯に何を願うのか此処で聴かなければと思っただのだ。

セイバーの問いにライダーは即座に応えず、少しばかりの戸惑いを魅せた。

この対応に、彼女とアーチャーは静かに待った。

そして僅かに思考を巡らせたのか、顔を赤らめながら問いを返す。

「……受肉だ」

「「はあ？」」

「(この酒、上手いな……)」

ライダーの願いに、セイバー、アーチャー、ウェイバーの三者は呆けた声を上げた。

生前からの知り合いである殺生丸は、ライダーの願いに全くのガン無視である。

「はあ—————!!? おっお前! 望みは世界征服だったんじゃ——どいえぶっ!」

ライダーに詰め寄るウェイバーをお馴染みのデコピンで吹っ飛ば

しながら、彼は告げる。

「馬鹿者！ 幾ら魔力で現界していても、所詮我等は使い魔。サーヴァント

余は転生したこの世界に、一個の命として根を下ろしたい。

身体一つの我を張って、天と地に向かい合う。

其れが征服という行いの総て、その様に開始し推し進め、成し遂げてこそ——我が霸道なのだ」

ライダーの発言には、彼の生前を知らずとも征服王の歩みを想像する事が容易に出来た。

付き従った臣下、民、国が彼を頂点として一つの世界を形作る。

今迄のアーチャーはライダーを見遣る時、その視線に何の価値を見出していなかった。

だが、彼の発言を受けて其の退屈そうだった瞳を変える。

「——決めたぞ、ライダー。貴様は、この我が手ずから殺そう」

「今更、念を押すまでも無かろう。

余も貴様の宝物庫とやらを奪い尽くす気でおるから覚悟しておけ」  
アーチャーは殺生丸以外で楽しみを視つけた様だ。

ライダーも英雄王の財宝に興味を持った様だ。

「其れに此度の遠征には殺生丸も連れて行く故、余も些か以上に楽しみである！」

「——？」

今迄ライダーの話をもともに聞いていなかった為に、話を振られても内容を理解出来ない殺生丸。

セイバーは、やはり相容れないとばかりに言葉を告げる。

「——そんなものは、王の在り方では無い」

「ほお？ では、貴様の懐の内を聞かせて貰おうか」

セイバーの言葉に耳を傾ける二人の王。

彼女はそんな彼らに、自身の崇高な祈りを宣言する。

「——私は、我が故郷の救済を願う。

万能の願望機を持って、ブリテンの滅びの運命を変える」

——遠坂邸（仮）

遠坂時臣は、アーチャーの勝手さに呆れを抱いていた。

「よりにもよって、酒盛りに出向くとは……」

通信を行っている言峰綺礼は、その行為を如何するか時臣に問う。

「アーチャーをこのまま放置して於いても宜しいので？」

「……仕方あるまい。」

王の中の王に在らせられては、突きつけられた問答に背を向ける訳にも如何だろう」

時臣は其処で一端言葉を切り、綺礼に現状を確認する。

「——綺礼。ライダーとアーチャーの戦力差……君は如何考える？」

「……ライダーに神威ゴルディアス・ホイールの車輪を上回る切り札が有るのか否か、其処に尽きると思われますが？」

「うむ。ライダーがマスター共々、無防備に酒盛りに興じてる今は又と無い襲撃の好機。」

この際、勝算が有るのかどうかは問題では無い。

例えばアサシンが敗退しても、彼我の戦力差を量る事が出来れば目的は達成される。

この辺りで一つ仕掛けてみる手もあるかもな、綺礼」

「依存はありません。全てのアサシンを呼び寄せるのに、十分程掛かるかと……」

綺礼の言葉に満足しながら、時臣は命を下す。

「——良し。号令を発したまえ。」

大博打ではあるが、幸いにして我々が失うモノは何も無い」  
彼らにとつて、アサシンなどは唯の捨て駒。

其れは、聖杯戦争を開始した当時からの考えであった。

「綺礼、令呪を以てアサシンへ命じよ。犠牲を厭わず勝利せよ……とな」

ギルガメツシュと殺生丸と云う超級のサーヴァントに対して、アサシンは弱い。

彼らに限らず、他の英霊たちでも同じ事が言えるがとりわけ暗殺者<sup>アサシン</sup>は弱いのだ。

其の考えは正しいが、同時に正しくも無い。

暗殺者<sup>その名</sup>が示す様に、彼らの本領は暗殺なのだ。

真向から戦うのでは無く、闇に隠れ敵に忍び寄り其の命を刈る、其れがアサシン<sup>彼ら</sup>だ。

典型的な魔術師である遠坂時臣、彼の指示に従う言峰綺礼、

この二人では暗殺者を正しく運用する事は出来ない。

それ故に、この様な捨て駒としての使い方しか出来ないのだ。

正しく運用できれば、英雄王を使わずとも勝者になれたであろうに

……

まあ、遠坂時臣の采配も仕方ないであろう。

初戦に於いて凄まじい戦闘を近くで見せられた所為で、暗殺者など戦力に加える事が出来なかったのだ。

——彼らの采配は、一体どのような結果を齎すのか？

——まあ、結果は容易に想像できそうだが……

## 聖杯問答の終わり

セイバーの言葉に、その場に静けさが舞い降りる。

ライダーは彼女の願いを聴き、表情に困惑を魅せながら呟く。

「……なあ、騎士王。貴様、いま『運命を変える』と言ったか？」

——それは、過去の歴史を覆すと云う事か？」

「そうだ。例え奇跡を以てしても叶わぬ願いであろうと、

聖杯が真に万能であるならば、必ずや……」

セイバーが言葉を続けられたのは其処までだった。

場に流れる雰囲気は先程とは違う事に気付いたのだ。

「ええと、セイバー？」

確かめて於くが……ブリテンが滅んだのは、貴様の時代の話であろう？

「貴様の治世であつたのだろうか？」

「そうだ。だからこそ、私は許せない。だからこそ悔やむのだ。

あの結末を変えたいのだ。他でもない、私の責であるが故に……」

その時、アーチャーが嗤った。

人の尊厳など毛ほども考えない、侮辱の笑み。

セイバーは彼の反応に、怒りを以てして応える。

「——アーチャー、何が可笑しい？」

「自ら王を名乗り、皆から王と讃えられて、そんな輩が『悔やむ』だと？

アハハハッ！　これが笑わずにいられるか!？」

尚も嗤い続けるアーチャーにセイバーは怒りを吐き出そうとするが、

彼女より先にライダーが言葉を告げる。

「——セイバー。貴様よりにもよって、自らが歴史に刻んだ行いを否定すると云うのか？」

「そうとも！ 何故訝る！ 何故笑う！

剣を預かり、身命を捧げた故国が滅んだのだ。

其れを悼むのが如何して可笑しい！」

「おいおい、聞いたかライダー！」

この騎士王とか名乗る小娘はよりにもよって、故国に身命を捧げたのだと…さあ！」

「笑われる筋合いが何処にある！」

王たるものならば、身を挺して、治める国の繁栄を願う筈だ！」

「——いいや違う。王が捧げるのではない。

国が、民草が、その身命を王に捧げるのだ。断じてその逆では無い」

征服の覇者は、騎士の王に対して断言する。

其れに否を唱えるは、騎士王アーサー。

「何を…其れは暴君の治世ではないか！」

「然り。我等は暴君であるが故に英雄だ。

だが自らの治世を、其の結末を悔やむ王が居るとしたら、それはただの暗君だ。

暴君よりも尚始末が悪い」

「——征服王、貴様とて世継ぎを葬られ、築き上げた帝国は三つに引き裂かれて終わった筈だ。

その結末に…貴様は何の悔いも無いと言うのか？」

「——無い。

余の決断、余に付き従った臣下たちの生き様の果てに辿り着いた結末であるのならば、

その滅びは必定だ。痛みもしよう、涙も流そう、だが決して悔やみはしない」

「そんな…」

ライダーの言葉に、セイバーは圧された。

彼の決断を彼女は受け入れられないのだ。

「まして其れを覆すなどっ！

そんな愚行は、余と共に時代を築いた全ての人間に対する侮辱であるっ！」



「滅びの華を誉れとするのは武人だけだっ！」

力無き者を守らずして如何する。

正しき統制、正しき治世、其れこそが王の本懐だろうっ！」

騎士王と征服王、時代を築いた二君は互いの主義を言い合う。

そんな彼らの語り合いに、我慢の限界であった獣が呟く。

「——下らん」

「……なに？」

会話を止められた両者は、其の者を見遣る。

酒を飲み飽きたのか、杯を手で弄ぶ殺生丸の姿が其処に在った。

「——私は、何時まで見当違いの問答を聴かなければならないのだ」

「……其れは如何云う事だ、殺生丸？」

ライダーの問いに殺生丸は侮辱を混ぜた言葉で返す。

「——愚か者が。抑々、貴様たちは互いの王道を語り合うだけで良かったのだ。

それを話の論点を変えながら問答を繰り返り広げるなど、愚か者以外の何ものでも無かろう」

「……余は別に、他の話などをした覚えは無いが？」

殺生丸はライダーの発言に、綺麗な貌を歪める。

度し難いモノを視たと云う様に言葉を続ける。

「——愚かを通り越して呆れを覚えるぞ、征服王。

貴様たちは過ごした時代、国も異なるのに如何して否定し合う？」

何故、他国の王が求める願いを間違いだと断言できる？」

「……歴史を塗り替えると云うのは、其れまで積み重ねたモノを無にする行為なのだぞ？」

「——其れは、貴様の願いと如何違う？」

征服王イスカンダルの歩みは、とうの昔に終わったモノ。

歴史に於いて、其れは変わらぬ事実。

終わった歴史を掘り返そうとしている貴様も……騎士王と同じだ。

——貴様たちの願いは、自身の生を諦めきれずに前に進もうとして

いるか、

後ろに進もうとしているかの違いでしか無い。

自身の願いを小奇麗な言葉で飾り合う問答を愚かと言わず何と言  
う？

——願いに正否など存在しない。

在るのは願いを最後まで貫き通せる、自己の強さだけだ」

殺生丸の言葉は正論だ。

騎士王の時代も征服王の時代もこの場現代に於いては、既に過去の事。

征服王の道は過去で既に完了しているモノだ。

新たな未来続きなど、本来は無い。

だが、其れを可能とするのが聖杯だ。

騎士王の道は過去で既に終わっているモノだ。

救いの過去続きなど、本来は無い。

だが、其れを可能とするのが聖杯だ。

彼らの王道は、決して間違いではない。

理想に殉じる騎士道の誉れたる王道カタチ。

制覇して尚辱めぬ武人の誉れたる王道カタチ。

時代が、彼の王たちを欲したのだ。

セイバーは殺生丸の言葉を聴き、漸く心を落ち着かせた。考えれ

ば、簡単な事だったのだ。

コレは聖杯問答。他の王を否定するのでは無い、自身の願カタチいを見せ

合う戦聖戦い。

気圧される必要など何処にも無い。

自身が願うモノをただ貫けば良いのだ。

「——征服王」

「——何だ、騎士王」

先程まで、憂いの面持ちをしていたライダーはその表情を変えた。

対面に座るセイバーの気配が、澄んだモノに変化したのを理解した

為に。

「——私は、故国の救済を願う。

民草や騎士、国に否定されても……其れでも私は願う。

私が想うこの願いは、決して間違いなどでは無い。

民たちが求めた『理想に殉じる』王として、私はブリテンに在り続

ける」

『理想に殉じる』王だと？

殉教などという茨の道に、一体誰が憧れる……焦がれる程の夢を観る。

王とはな、誰よりも強欲に、誰よりも豪笑し、誰よりも激怒する。清濁を含めて、人の臨界を極めたる者。

そう在るからこそ臣下は王を羨望し、王に魅せられる。

一人一人の民草の心に、『我もまた王たらん』と憧憬の火が灯る！

「——其れは征服王、貴様の王道カタチであろう？

生憎、私が掲げる王道カタチにその様なモノは不要だ。

魅せなくとも良い、民草一人一人の心には既に灯が芽生えていた。

私はそれらを守る一振りの剣で……唯の理想で在れば良かった」

彼らの問答は続いていく。

「——では何故、理想に殉じた貴様は聖杯を欲する？」

「——語るまでも無いであろう、征服王。

私は、理想に殉じてこそその騎士王なのだぞ？

祖国の滅びを阻止するのにもまた、我が理想王道なのだ」

セイバーが告げる決意にライダーは瞳を閉じて聴き入った。

そして、豪快な笑い声を上げる。

「がっはっはっはっはっは！ 良い！ 良いぞ、騎士道の誉れたる王よ！

其れでこそ、王として『格』を競え合えると云うものだ！」

自身の王道道とは違ったモノを示す者、騎士王アーサー。

征服王は彼女の願いを受け入れられない。

彼が、臣下との絆を永遠のモノと想っている為に……

だが其れでも、一つの時代を築いた王として彼はセイバーを認め  
た。

其れは、彼女に王としての『格』を視たが故に。

彼らに言葉など、最早不要であろう。

互いになすべき事は決まった。

「さて、王の『格』を競うのは此処までとしよう。

互いの『王道』は相容れぬ事が理解出来た。故に、後は剣を交えるのみだ」

ライダーは其処で述べ、視線を殺生丸に移す。

「――殺生丸。お主の御蔭で余は間違いを犯さずに済んだ、礼を言うぞ」

「――勘違いするな、征服王。私は手早く、自身の用を済ませたかっただけだ」

「おおつ、そうであった！　元々はお主の話を聞くためにこの場に集まったのであったな！」

「……貴様、まさか忘れていたのか？」

「いやー、酒盛りの事ばかり思考しておった故に記憶が飛んでおったわ！」

「……………」

セイバーは、殺生丸から哀愁が漂っている様な気がした。

彼女とライダーの遣り取りをいままで眺めていたアーチャーは、殺生丸の内容に口を挿む。

「――殺生丸よ。その話とは一体何だ？」

「ん？　貴様には告げていなかったな？」

殺生丸の話と云うのは、聖杯の事についてよ」

ライダーの言葉に興味を惹かれたのか、アーチャーに興が乗る。

「ほお？　我の宝についてか……では許そう。」

光栄に想え、この我も貴様の話を聞いてやろう」

「私は会合を提案された陣営の者です。」

ですので話は聞かせて貰いますよ、殺生丸？」

アーチャーに続き、セイバーも話を聞く姿勢に入った。

彼女にとつて勝利者に与えられる聖杯の情報は欠かせないのだ。

殺生丸は元よりこの場に集まる全員に聞かせるつもりであった故、別段問題は無かった。

そして彼が漸く話が出来ると思った矢先、其れを遮る様に襲撃者が現れる。

初めに気付いたのはサーヴァント達。

彼らに遅れて、アイリとウェイバーの二人も敵襲に気付き、サーヴァント相方の傍に避難する。

そして、警戒した彼らの先に白い髑髏の仮面が宙に浮かんだ。中庭に浮かぶその数、総勢80近くに及んでいた。

彼らを襲撃した者の正体は、序盤で脱落したと思われていたアサシンのサーヴァントであった。

アサシンの登場に疑念の声を上げるライダー。

「……コレは貴様の計らいか、アーチャー?」

「——時臣め、下種な真似を……」

アーチャーは彼の質問に答えるのではなく、己が召喚者を貶した。

「無茶苦茶だあ! 何でアサシンがこんなに住るんだよお!」

アサシンの登場にセイバーとアイリは警戒し、ウェイバーはライダーの傍で叫んだ。

ウェイバーの叫びに答えるかのように、アサシンが述べる。

「——我らは分断された個。群にして個のサーヴァント。されど個にして群の……影」

アサシンの言葉にウェイバーは答えを見出す。

「……多重人格の英霊が、自我の数だけ実体化しているのか?」

アレだけの情報でその答えに辿り着いた彼は優秀であろう。

「……なあおい……ライダー……」

「こら坊主、そう狼狽えるでない。宴の客を遇する度量でも、王の器は問われるのだぞ?」

「あんな奴等までも宴に迎え入れるのか、征服王?」

「当然だ。王の言葉は万民に向けて発するもの。」

わざわざ傾聴しに来た者ならば、敵も味方もありはせぬ」

ライダーは自身が用意した酒樽のワインを柄杓に汲み、アサシン達に向けて掲げる。

「さあ、遠慮はいらぬ!」

共に語ろうという者はここに来て杯を取れ、この酒は貴様らの血と共にある!」

ライダーが捧げる柄杓に対し、アサシンは返答として短刀ダークを投げつ

短刀は柄杓を引き裂こうとライダーの手元に向かったが、

着弾する寸前で殺生丸の指に挟まれて阻止される。

「――済まないな、征服王。」

いま貴様に彼奴等を倒される訳にはいかんのだ」

「……其れは先ほど話そうとしていた、聖杯に何か関係があるのか？」

「――ああ。それ故に、後の事は私に任せて貰おう」

そう告げた殺生丸はその場を静かに立ち上がり、天生牙を抜き放つた。

彼は天生牙で冥界に続く穴を開くと其処から歪な剣を取り出す。

アサシン達はその行動に警戒し、けん制の意味を込めて短刀を投擲。

だが殺生丸は、指先から淡い光を発する鞭の様なモノで難なくそれらを打ち落とす。

「――アサシン、貴様たちの纏め役は誰だ？」

殺生丸は静かに問う。

彼の言葉にアサシン達は嘲る様に笑う。

その反応に対して、殺生丸は瞳を閉じて沈黙する。

そして、閉じていた其の眼を見開く――

――殺生丸を中心、一陣の風が吹いた様に感じた

ウェイバーは殺生丸が眼を見開いた際、その様に感じた。

現に彼はそれ以上のモノは感じなかった。

だが変化は、彼以外に訪れた。

総数80のアサシンの内、9割の者がその場に崩れ落ちたのだ。

この現状は、その場に居合わせた者たち全てを驚きに染める。

だがその中で、アーチャーだけは本当に愉快的な演劇を観ていると云った貌を魅せていた。

「っ!? 如何したのだ、お前たちっ!!」

無事だったアサシンの一人、女性型のアサシンが声を荒げる。

そんな彼女に、殺生丸は再度問う。

「——もう一度、問う。貴様たちの纏め役は……誰だ？」

先程と同じ事を言っているのに、感じる印象は全く違う。

女のアサシンはその様に感じていた。

それ故、今度の問いは素直に白状した。

「……私が綺礼様に命じられて、纏め役を仰せつかっている」

「——この襲撃は、令呪で命じられたのか？」

「……そうだ」

彼女の答えを聞いた殺生丸は、その手に持つ剣を戸惑い無く彼女に突きたてた。

その瞬間、彼らを中心とした魔力の波が発生する。

女性アサシンは自身の死を想像し、その眼を閉じていたが痛みが来ず疑問に思った。

殺生丸はそんな彼女に声を掛ける。

「——何時まで放心しているつもりだ。脱落したくなければ、手早く再契約を果たすぞ」

「……は？」

アサシンは殺生丸に掛けられた言葉を理解するのに多少時間が掛かった。

だが理解した後、彼の言葉通りの状況に陥っている自身の状態に驚愕した。

マスターである言峰綺礼との魔術契約が切られていた。

其れにより、令呪の効力も掻き消えている。

殺生丸が使用した剣は、契約や魔術などを掻き消す効果を持つのだ。

「——単独行動スキルを持ち合わせない貴様たちでは、消滅は時間の問題。」

故に、この場で決断しろ。何も果せずに消滅するか、私に協力して聖杯を狙うか？」

「……………」

考えるまでも無い、アサシン達は聖杯を欲しているのだ。

取る方針など既に決まっている。

女性アサシンは、残りのアサシン達に視線を向ける。

その視線を受けた彼らは頷きで肯定を表す。

其れを確認した彼女と残りのアサシンは、殺生丸に跪いて忠誠の構えを取る。

「——我らは暗殺者アサシンの使い魔サーヴァント、此れより御身の影とらせて頂きます」  
アサシンの言葉に、殺生丸は契約の詠唱を以て応える。

——『告げる』

——『汝の身は我の下に、我が命運は汝の剣に』

——『聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら』

——『我に従え。ならばこの命運、汝が剣に預けよう』

「——我らが新たな主マスター、方針は如何様に？」

「——貴様たちには、令呪を以て我が陣営の者を傷付けない事を誓わせる。

この命に、異論は無いな？」

「——御意」

アサシンの了解を得て、命を下す。

「——令呪を以て告げる。間桐雁夜、間桐桜の両名を害する行為は今後禁止とする」

殺生丸の命により、其れは無事に受理された。

彼はアサシンに次の命を下す。

「——貴様たちは、此れより間桐邸へ赴け。指示は、屋敷に居る者に仰げ」

殺生丸の命を受けた彼らは、気絶している者を叩き起こして慌ただ



しく城外に出て往く。

アサシン達の行動に、いままで静観を決め込んでいたライダーは騒ぎ出す。

「ああ！ 何と勿体無い事をするのだ、お主はと云う奴は！」

「——其れは一体、如何云う事だ？」

ライダーの発言に殺生丸だけでは無く、他の者たちも興味を示す。

そして彼は残念そうに呟く。

「——アレだけの者たちが居れば、酒宴も賑やかになったであろうに……」

「「「「……………」」」」」

セイバー、アイリ、アーチャー、ウェイバー、殺生丸の五名は言葉を失くす。

先程の光景を目の当たりにしてその考えがまず浮かぶ輩に、

その場に居る彼らは返す言葉を持ち合わせていなかった。

彼の発言で微妙な空気となった場を入れ替える為に、殺生丸は先ほどの話を切り出す事にした。

## 序章の終わり、新たな始まり

「――話を再開しよう。私が此れより告げる事柄は、全て事実だ。故に、アインツベルン<sup>様</sup>は特に聴いて於くが良い」

「……（コクツ）」

殺生丸はアイリにも聞いて貰う為に改めて言葉に出す。

彼女も今から始まる語りは、確りと自身で聞き届けるつもりであった。

アイリの様子に内心で満足しながら殺生丸は語り出す。

「――まずは、サーヴァント<sup>前</sup>達の認識を改めさせよう」

「私たちの認識を改めさせる……ですか？」

「――ああ、手始めに聖杯が降臨するシステムについて話そう」

セイバーの疑問に答える為、殺生丸は言葉を選んでいく。

「この地に存在する『聖杯』とは、簡潔に述べれば『万能の願望機』と呼ばれる魔術礼装だ。

聖杯<sup>コレ</sup>を起動させる為には、サーヴァント<sup>魔カ</sup>の魂が必要となる」

「……私たちの魂が必要？　つまり、戦いを制した者が『聖杯』を勝ち取れると云うのは……」

「そう、我らが脱落した際に英霊の座に還る魂……膨大な魔力を用いて、

この魔術礼装<sup>聖杯</sup>は真の『万能の願望機』へと至る」

「何だどつ！　其れは誠か、殺生丸！」

セイバーに説明していた殺生丸は、予想通りの反応をみせる輩を見遣る。

彼の視線の先には、驚愕を露わにしたライダーの姿があった。

予想通り過ぎる反応に溜息を吐きながら殺生丸は対応する。

「……貴様は大方、他の英霊<sup>者</sup>たちを勧誘できないだとかそんな処であろう？」

「当然である！ お主が言った通りだとしたら、余の朋友計画が全てパーではないか！」

「知らん。貴様は大人しくしている」

殺生丸は素っ気ない態度でライダーに対応する。

ライダーはその返しに、(´・ω・｀)シヨボーンと云った表情になっていた。

だが殺生丸の言葉に反応したのは、何もライダーだけでは無い。

セイバーも彼が告げた内容に戸惑っていた。

「殺生丸。貴方が告げた事が本当なら、私たちの願いは……」

「――安心しろ。願いを叶える程度ならば、自身以外の六騎を敗退させれば事足りる」

「……其れならば、何も問題はありませんね」

セイバーは其れで満足した様だが、其れに納得できない者が居る。

「……殺生丸よ……本当に全てのサーヴァントを倒さなければ、願望を叶える事は出来ぬのか？」

ライダーは説明を受けても、まだ諦めが付かなかつたらしい。

征服王である彼の目の前には英傑豪傑が存在しているのだ。

故に、中々決断が出来ないらしい。

ライダーの状況を子供に例えると、二つの玩具を同時に買おうとして、

一つしか手に入らないのを認めたくない……こんな処であろうか？

単純に述べるなら、諦めが悪い奴位の認識で良いだろう。

「――聖杯を願望機として降臨させるには、六騎分が必要だ。潔く諦めろ」

「……………はあああああ……………勿体無い。」

……………勿体無いのお……………はあああああ……………

「(……………まっ、ライダーはほつといても良いか)」

ライダーをスルーの方針で話を進める事にした、昔馴染み。

彼は興味が湧かない事は、基本的に無関心なのだ。

そんな殺生丸にアーチャーが問いを投げる。

「――茶番<sup>基本</sup>は其処までして本題に移れ、殺生丸。

貴様が告げたい事はそんな事では無い筈だ」

「――そうだな、基本的な話は此処までとしよう。

次の事柄が貴様たちに伝えて於きたい案件だ」

殺生丸は、話の続きを語る。

「――第三次聖杯戦争。アインツベルンが召喚したサーヴァントが全ての始まりだ。

彼奴等は聖杯戦争で確実な勝利を得る為、最悪の悪神を呼び出そうと試みた。

――真名を『この世全ての悪』。ゾロアスター教に於いて、絶対悪と称される悪神」

「――なっ!?! 神霊の召喚だなんてそんなの無理だわ!

だって聖杯戦争で召喚できるのは英霊までの筈よ!!」

殺生丸が告げた名に激しい反応を示す、アイリスフィール。

彼女の言葉を肯定しながら続きを語る。

「――そう、神霊クラスはこの地の召喚システムでは召喚不可能。

呼び出せたとしても、神としての側面に至っていない状態で呼び出される。

だが、『この世全ての悪』に神以外の側面など存在しない。

それ故、第三次聖杯戦争で召喚された者は悪神では無く……人間であつた。

唯の人間ではない、『この世全ての悪』を背負わされた人身御供だ」

「……其れから如何なつたのだ?」

何時の間にか復活していたライダーも話に加わる。

「――アンリマユとなった其のサーヴァント、アヴェンジャーは、聖杯戦争が開催されて数日で脱落したらしい。

だが問題は、アヴェンジャーが倒されてから発生した」

「……如何云う事です?」

「――本来『聖杯』の中身とは無色透明であり、力の方向性が定まっていないモノ。

それ故に取得者の願い<sup>ベクトル</sup>で方向性を定め、最終的な形<sup>杯</sup>を形作る。

——然し、その無色透明な中身を……悪神アンリマユが穢こしてしまっただけだ」  
彼は問答で使った杯の中に何処からか用意した、水差しの水を流し込む。

そして水が入った杯に自身の血を一滴零す。  
其れだけで無色透明であった水は穢これた。

「——現在の『聖杯』は無色では無くなった。

結果、願いは正しく成就されなくなり、歪んだ結末を生む願望機へと変貌した。

破滅と云う手段でしか所有者の願いを叶えられない……欠陥品へとな」

サーヴァント彼達が座るテーブルに、手を叩きつける音が響く。

「——では、私たちの願いは如何なるのだっ!？」

話が事実であるならば、この戦い全てが最早茶番ではないかっ!!」  
話を聞いたセイバーは、その事実を語った殺生丸に怒りをぶつける。

彼女が荒れる理由は、サーヴァントの中で最も聖杯を欲していたからだろう。

一方のライダーは彼女とは違い、静かに事実だけを告げた。

彼はやっと殺生丸が成そうとしている事を理解したのだ。

「——なるほど、まだ何も入っていない器をお主は如何にかしようとしている訳か。

中身が入っていると調べる際に面倒であるが故に……」

ライダーの答えを肯定する。

「——貴様の言う通りだ、征服王。

私が調べる際、中身が有ると無いとでは作業効率が大きく変わろう。

故、アサシンであっても脱落させる訳にはいかないのだ」

例えば、コップの何処かにヒビ穢が入っているでしょう。

そのヒビが何処に在るのか調べる際に中身が入っていたのでは、逆さにしてコップの底を覗くのも手間が掛かる。

中身が入っていたとしても調べる事は可能だが、其れだと征服王が

述べた様に面倒。

故に殺生丸は、面倒になりそうな事は極力省いてきた。

彼は興味が持てないモノには、余り力を注ぎたくは無いのだ。

「……其れはつまり、まだ可能性が残されていると云う事ですね？」

「——さてな、魔術師<sup>キャスター</sup>で召喚された場合ならば簡単とは行かずとも可能であろう。

だが生憎とこの身はイレギュラー故、結果が如何転ぶかは分からぬ。

もし結果が伴わなければ、最終的には破壊する他あるまい」

「……そうですか」

殺生丸は最悪を想定して次の選択も視野に入れた。

だがセイバーは、殺生丸との会話にまだ希望が在ると解り一端は大  
人しくなる。

彼は、今の状況にため息を吐きたい気分であった。

「——四魂<sup>ア</sup>の玉と云い聖杯<sup>コレ</sup>と云い、願望を叶える代物とは本当に面倒  
である」

殺生丸はそう呟くと天生牙で開いた時空の狭間から、ある箱を取り  
出した。

見た目的には古めかしい木箱でしかなかったが、何やら清らかな  
気配<sup>オーラ</sup>を発していた。

其れに逸早く気付いたアーチャーは言葉を発する。

「——木箱<sup>ソックス</sup>に救世主<sup>貴様</sup>が永き時を渡り集めた、秘宝の玉が眠っているの  
か」

アーチャーの問い掛けを無視する様に、殺生丸は木箱を解放する。

其処には仄かな光を発する美しい玉が存在した。

玉の輝きに、その場に居た者たちは魅了される。

セイバーとライダーは生前に於いて四魂の玉のかけらを観ていた  
が、

玉の完成した姿を見るのは初めてであった。

アーチャーはその輝きに、宝とはこう云うモノで在ってこそと其の  
貌を歪めた。

アイリとウェイバーはその玉を見詰めていると、自分自身の何だか



過去 とある救世主 記憶の一部 1

その昔、獣が世界によつて産み落とされる。

獣にはある使命が下されていた。

世界に害を及ぼす敵を討滅、また原因の元である四魂の玉を回収、封印を担う者。

それが世界に望まれた獣の役割であつた。

産ませてきた獣には確固たる自我が存在した。

それは偶然と判断して良いものなのか、はたまた必然だつたと呼んで良いものなのか……

どのような仮説を並べ立てようとも獣は既に一つの個として世界に誕生していた。

世界は獣に使命の全てを任せた。

だが何時まで経つても使命を果たそうとしない。

何故か？ それは獣が臆病だつた為だ。

発生した自我は、自己の主張が激しかった。

それ故に獣は世界からのお願いを幻聴と断じた。

仕方なく世界は母親を経由して使命を告げる。

獣が疑問を抱かないよう、ごく自然へと……

こうして獣の物語は始まる。

——世界は時を刻む



—— 獣が居た。

白銀の長髪と尻尾を靡かせるヒトの形をした者<sup>ナニカ</sup>。  
生物が獣<sup>シ</sup>に対し知覚できるのはそこまでだろう。

産まれながらに心を持つ獣は過去を振り返る。

この世に第二の生を授かり幾百の時が過ぎる。

オレがワタシに変化しても違和感がない程の時、生前とは比ぶべくもない経験の数々を経た。

—— ダガ……ナンダコレハ……？

彼の眼には一人の女性が映し出されている。

辺り一帯を血の匂いが満たしていく。

此処は死と絶望を煮詰めた戦場の地。

彼が見つめるその先は戦場の一角。

—— そこに女は居た。

戦場の血で穢れた大地に横たわるその姿は、命が消えかけているのを否応なしに理解させる。

彼はここに至り絶望とは何であるか認識する。

—— ああ……何故だ？

何故……私は失ってから気付くのだ？

知っていた筈だ。

失うことがどの様な結末を齎すか……

私は……知っていた筈だ……

言葉として表せない内に秘めた後悔は心を侵し、自身を光が届かぬ奈落の底へと誘う。

そんな絶望の淵に漂う彼を認識する最愛の女<sup>ひと</sup>。

「……せつ……しよ、う……まる……っ」

か細い声であった。

だがまだ生命の鼓動を感じられた。

女の言葉に彼は意識を揺り起こされる。

「待っている、■■■■ッ!! すぐに治療をッ!」

言葉を洩らす彼であったが彼も理解している。

彼女を救う手立てはないのだと……

感情とは別に判断してしまった。

そして、そう判断した自分自身を嫌悪する。

美しい貌を歪める彼とは違い女は微笑んでいた。

彼女は死の淵にいなながら穏やかであった。

流れ出る血は留めなく溢れ、誰が見ても助かりはしないだろうと容

易に理解できる。

だが彼女の表情は痛みで苦痛に歪むことはなく、彼が見てきた中で

一番——美しかった。

女は愛する獣ひとに永久の別れを告げる。

「……さい……にね……う？」

おね……が……い、……あ……る……の……」

その言葉に彼は過剰に反応してしまう。

彼女と本当に別れてしまうと理解したが為に。

「もう喋るなッ!! 最後になどさせん!

私が、必ず……お前を必ず救って……ッ!」

彼の最後の言葉を遮るように女は告げる。

例えそれを彼が望んでいなくても……

「……わらっ……てえ……う？」

「」

——彼の頭から言葉が消えた。

告げようとした、誓いも……想いも……

その願いを聞いた途端に消え失せる。

「……さ……い……に……みた……い……な……う？」

彼の視界が徐々にぼやけていく。

それは生前で幾度となく流した涙モである。

今生において初めて流した涙モでもあった。

ぼやける視界に女を収めながら彼は懇願する。

逝かないでくれ……



『貴方ってホント、笑わないわね?』

『』

『ねえ? 一度くらい良いでしょ?』

『』

『よし! なら、私はここに宣言するわ!』

一生の内に一度はゼツタイ挿んでやる!

—— 貴方の笑顔をね!』

『—— 勝手にしろ』